

# 成壽

SEIJU

1999年  
第30卷

冬期



般若波羅蜜多是大神咒是大明咒是  
無等咒是咒能除一切苦真實不虛故說  
觀世音菩薩心咒多咒即說咒  
心經一切

三十七卷  
成壽

成壽

謹啓

師直の候と相成り申した。

平素、寺門興隆に育英会に

格別の尽力を賜り厚く御礼申し

と存じます。

成壽三十号を送り申しと存じます。

今回は善光寺開創三十周年

育英会十五周年式典、善光中国

天童禅寺参拝記念特集号と

お送りいたします。

今後共にお指導、お鞭撻をばして

お願い申し上げます。

合掌

善光寺

星田武志 拝上

# 祝 偈

岩本昭典老師

宗風独格貫人生

宗風独格として人生を貫ぬき

功德善光照育瑛

善光の功德育瑛を照す

更約将来成寿処

更に将来を約す成寿の処

応見福衆至昌栄

応に福衆を見て昌栄を至す

(善光寺開創三十周年・育英会十五周年の祝賀会において)

# 成寿山善光寺

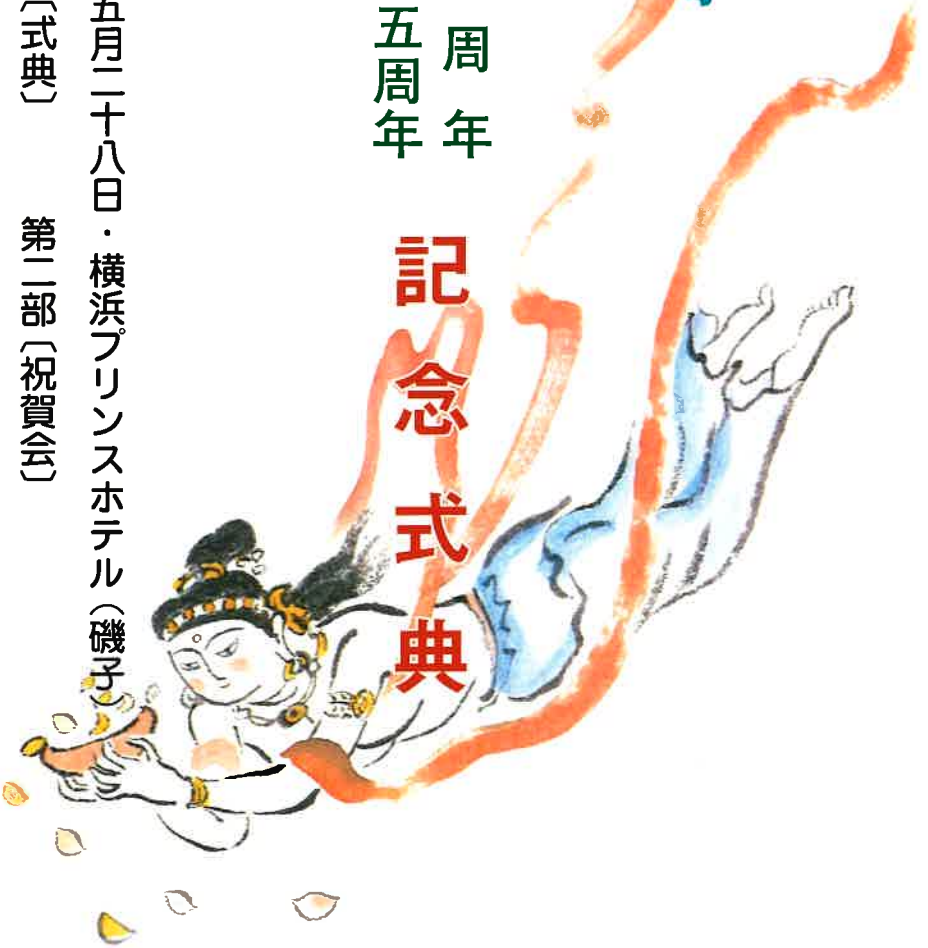
開創三十周年  
育英会設立十五周年

## 記念式典

一九九九年五月二十八日・横浜プリンスホテル(磯子)

第一部〔式典〕

第二部〔祝賀会〕



# 開創30周年記念式典 育英会設立15周年



黒田住職の挨拶

# 成寿山善光寺



成壽山善光寺 開創30周年 育英會設立15周年 記念式典



本尊上供



導師光真寺住職

奈良康明先生



岡野正貴統理



園部逸夫先生







開基家・村岡守見子様に感謝状贈呈

檀信徒代表・富永豊重様に感謝状贈呈





黒田住職より周穎先生に感謝状贈呈

会場にお披露目された十八羅漢屏風



引田弘道先生



宮本延雄先生

会場内





会場内



受付にて



東隆眞先生



石附周行老師



黒田俊雄老師



伊藤博先生



祝宴会場内





黒田住職夫妻

# 祝賀会

岩本昭典老師



鏡開き



祝賀会  
会場







沖縄の踊り

中央総代 仲田清祐氏



奇術・松旭斎八重子さん



ウィリー沖山さん





総代 山口義男氏



司会・酒井良子さん



総代 國廣敏郎氏

善光寺の歌・指揮は岡島雅興先生



倫子夫人に花束の贈呈



▲子供達から花束を贈られる  
住職夫妻

カラ 一■成寿山善光寺開創三十周年、育英会設立十五周年 記念式典  
集●善光寺開創三十周年、育英会十五周年 記念式典・祝賀会  
祝辞..... 板橋興宗 下

●善光寺開創三十周年を祝う..... 園部 逸夫

●スリランカ：大菩提会 ダルマパーラ生誕一三五年祝う記念式典..... 黒田 武志

●駒澤大学茶道部の五十年に寄せて 茶禪一味..... 黒田 武志

●天童寺・西安・北京の旅..... 東郷 敏

●道元さまに引かれて天童山参り..... 國廣 良子

●春 天童寺・西安・北京の旅..... 伊藤 博

●留学僧を取り巻く異文化..... 黒田 武志

●心の時代 留学生交流を支えて..... 阿部 慈園

●ブラフマ・カマル..... 福田 智昭

●アメリカ禅センター滞在を終えて..... 遠藤 博因

●現代アメリカ禅仏教における一考察.....

善光寺ニュース.....

寄付お礼170 声172 読者のたより176 留学育英生からのたより189

題字・さし絵 伊藤三喜庵

# 巻頭言

善光寺住職 黒田 武志

今世紀の終わりに鑑み、横浜善光寺は開創、満二十年、育英会設立十五年という記念すべき年にめぐりあい、感慨も一入であります。

五月には区切りとしての記念式典を無事すませることが出来ました。これひとえに檀信徒の皆様や関係者の方々のご尽力の賜物であり、心から感謝し厚く御礼申し上げます。

記念行事として四月に中国天童寺を、また育英会記念行事として、十一月にタイ国ワットパクナムを団長富永豊重総代、伊藤初枝婦人会会長をはじめ三十余名の檀信徒の方々と一緒に参拝させていただくことが出来ました。

「ワットパクナム」は私が三十五年前、修行させていただいた寺院であります。此の度はプラ・マハージャマニガラチャラ大僧正は善光寺旅団一同には親愛の情を以って、至れり尽くせり歓迎を賜り、唯々尊崇と感恩のひとつきを過ぐすことが出来ました。昼食供養をすませた後、ブツダモントンを訪ねました。この聖地は仏紀二千五百年を記念してプミポン国王と政府が国家プロジェクトを組織し、半世紀をかけて作られた施設であります。今世紀最大の仏教遺産「パリー語南伝大蔵経」の経蔵を見学。経蔵の内部は大理石の板碑一四一八枚（縦二メートル、横一・一メートル）にお経が刻まれており、参拝団はこの規模と素晴らしさに圧倒され、タイ国民の偉大な信仰心と爆発的なエネルギーを感じて帰ってまいりました。つくづく釈尊のみ教えは大きく深く根づいていることを実感致しました。さて私達は、仏法を通して日本が世界から学び、日本を世界にアピールする時代到来と確信致します。釈尊のそして道元禅師の正伝の仏法を世に伝え残していくことが二十一世紀の使命であります。二十世紀は産業・経済ともに未曾有の発

展をしました。しかしその反面、失うものも多大でした。特に高齢化や少子化というかつてない問題や世界的にも環境が損なわれ、保護せねばならぬということが切実となりました。これからどうするかは今に生きる人々の責任と思慮、明断を以つての必要を痛感致します。

道元禅師は『学道の人は先ず貪ひんなるべし、財多ければ必ずその志しを失う』と申されました。自然に恵まれた日本人として、自然と共存し日本の歴史と伝統を大切にしながらこの素晴らしい日本文化を遺さねばなりません。

今こそ初心に立ち還り、日本の将来が国際社会の中で孤立しないよう、国際社会に通用する人づくりのためさらなる決意を以て、善光寺は国際的な仏教交流に力を尽くし、そして仏法興隆と世界平和に貢献したいと念願いたしております。

# 善光寺

開創三十周年  
育英会十五周年

## 記念式典・祝賀会

### 幅広い活動称え六百人が参集

「宗祖を通して釈尊に帰れ」を宗教的原点として昭和四十四年、横浜市日野公園墓地の入り口に成寿山善光寺（黒田武志住職）が開創されてから三十周年、また横浜善光寺留学僧育英会の設立十五周年を記念する式典と祝賀会が五月二十八日午後二時から、横浜市磯子区の横浜プリンスホテルで来賓・檀信徒ら六百人が参集して盛大に開催された。ゼロから出発し、育英事

業を通じて世界十八カ国（一地域）・延べ九十三人の人材を海外へ留学させ、諸外国からも受け入れるなど、世界平和と人類福祉への願いに貫かれた活躍で国際的にも評価を得ている善光寺の寺檀一体の寺院づくりには数々の賛辞が寄せられた。

### 衆生のために身を削り奉仕

本寺の栃木県・光真寺住職黒田俊雄老師の導師により本尊上供が営まれた後、黒田住職は「三



十年を振り返り、光陰は矢の如しの思いに尽きる。三十にして立つというが、多くの方々助けを得て、やっとスタートラインに着いたという心境だ。人生の三分の二は過ぎた。還暦を過ぎて、やっと精進の意味を知った」と感謝の言葉を述べた。さらに「二十世紀は物質にとらわれた追いつき追い越せの世紀ではなかったか。二十一世紀は、己れ未だ度らざる先に一切衆生を度さんと菩提心を発するべき世紀だ。多くの人のために身を削って尽くしたい。そのことを固くお約束する」と発願利生の思いを吐露した。

前駒澤大学学長・奈良康明先生、前最高裁判所判事・園部逸夫先生、孝道教団統理・岡野正貫先生がそれぞれ祝辞を述べられた。

奈良先生は「黒田方丈は社会への貢献、宗門に役立ちたいとの願いを持ち、それを実行していく企画性と実行力をもっておられる。仏教の非社会性が批判的に言われるが、黒田方丈は常

に利他を考え実践している。すでに仏教の国際化の時代は過ぎて世界化が言われている。善光寺育英会がここまで発展してくると、世界化の意識をはっきり認めなければならぬ」と黒田住職の活躍を高く評価された。

この後、善光寺開基家の村岡守見子氏と檀信徒代表の富永豊重氏に大本山總持寺の板橋興宗貫首から、また善光寺に奉納された十八羅漢図の制作者である中国上海美術出版社の画家・周穎先生に黒田住職から、それぞれ感謝状が贈られた。

三十周年の実績・経過報告を育英会理事の宮本延雄先生（鶴見大学事務局長）、育英会十五周年の実績・経過報告を第五回育英生の引田弘道先生（愛知学院大学教授）が行なった。宮本先生は「三十年を契機に黒田老師は初心を忘れることなく、生かされている生命を仏法のため、人のために使い、一滴残らず使い切って一生を

捧げたいという抱負と信念をもっておられる」と信念に生きる黒田住職の実践行を讃えた。

祝賀会では駒沢女子大学学長・東隆眞先生、

大雄山最乗寺山主・石附周行老師、ニューヨーク州立大学教授・伊藤博先生が祝辞を述べ、善光寺を取りまく各界の有縁者により鏡開きが行なわれた。曹洞宗参議の東京・吉祥寺住職岩本昭典老師が「宗風独格貫人生／功德善光照育瑛／更約将来成寿処／応見福衆至昌栄」の祝偈を捧げて乾杯となり、沖繩の踊りや奇術・歌など多彩な催しと、善光寺の寺族や婦人部、檀信徒、来賓が一つになつての温かい交流の場面が続いた。



# 祝 辞

曹洞宗 管長 板橋 興宗 猊下  
大本山總持寺貫首

黒田武志老師は、栃木県大田原の光真寺のお師匠さまのもとから独立し、この横浜の地に「善光寺」を開創されてから満三十年になります。

また、佛道を学ぶ内外の学徒に育英資金を提  
供し、将来ある人材を数多く育成されてきまし  
た。その「留学僧育英会」を設立されて十五周  
年になるとのことです。心よりお慶び申  
上げます。

黒田老師一代で、これだけの大寺院に築き上  
げ、しかも育英の大事業を成し遂げられました  
ことは、現代の宗門人としては稀有のことと驚  
嘆しております。

ここに至るまでの老師の御努力と御苦勞は私  
たちの想像を越えるものがあつたことと思いま

す。そこに一貫しているのは老師の熱烈なる菩  
提心であり、一途な誓願心であると敬服してお  
ります。

また、檀信徒の皆様が住職の願心を汲みとり、  
物心両面で多大な御協力があつたればこそと、  
その御信心の深さに頭の下る思いがいたしま  
す。

老師は、年齢的にも、これからが円熟期にあ  
ります。日本国内はもちろん、洋の東西を問わ  
ず自由闊達な法力を展開されますことを期待申  
し上げております。

ここに、ますます御法体健やかに御精進のほ  
どを願ひ、さらに寺門の興隆を祈念して祝辞と  
いたします。



# 善光寺開創三十周年を祝う

元最高裁判所判事  
立命館大学大学院法学研究科客員教授

園部逸夫

本日茲に善光寺開創三十周年・育英会設立十  
五周年記念式典を修行されるに当たり、恭しく  
祝辞を述べる機会を得ましたことは私の深く欣  
びとするところであります。

私は当山黒田武志老師とは老師が私の在官中  
ニューヨーク州立大学教授伊藤博先生の御案内  
で平成七年六月最高裁判所に御光来以来のお付  
き合ひでありまして、その後折に触れて親しく

御教導を賜っている者であります。

顧みますと、この三十年日本は激動の時代を  
経て今日就中<sup>なかんずく</sup>経済と社会の面において人心動  
揺甚だ不安の時を過ごしているのであります  
が、この間善光寺におかれましては民心の浄化、  
平和の招来のために黒田老師自ら先頭に立たれ  
大いに法輪を転ぜられたのであります。

また善光寺におかれましては昭和五十九年一

月開創十五周年を期して海外留学僧派遣育英会を設立され、平成五年二月横浜善光寺留学僧育英会と名称を変更されましたが、設立以来今まで十五年、昭和六十年第一回にタイ国に二名の留学僧を派遣され爾来平成十一年度第十五回に至るまで留学僧九十三名、関係国十八カ国（二地域）派遣国十三カ国、受け入れ国十カ国（二地域）という偉業を成就されたのであります。

一山の護持宗風の挙揚ということだけでも一大事でありますのに、併せて育英会の経営という時代に即応した教化事業をこのように立派に推進されましたこと只々驚嘆のほかはありません。これもひとえに黒田理事長始め関係各国の並々ならぬご努力とこの事業に協力された関係各位の研究機関、国内関係大学及び寺院のご理解とご助力の賜物と深く敬意を表する次第であります。

明治以来日本は学問のすべての分野において特に西欧諸国の文化を吸収して来たのでありますが、さきの大戦を経て未曾有の復興を成し遂げた今日、世界各国との文化の相互交流に力を注いでおります。このような状況の下において善光寺開創三十周年育英会設立十五周年は、善光寺を発信地とする仏教文化の国際交流という観点からも誠に歴史的な意味のあることと存じ慶賀に堪えません。善光寺が正法の顕揚と禅風の鼓吹はもとより国際的仏教文化交流の一大拠点として今後とも活躍されますことを衷心より期待申し上げます。

最後に善光寺並びに育英会の益々の御発展と皆々様の吉祥をお祈り申し上げて慶祝の辞と致します。

平成十一年五月二十八日

# ダルマパーラ生誕一三五年祝う記念式典

## 〜黒田住職が招待され祝辞〜

インドの仏教聖地回復を志して大菩提会（マハーボーディ・ソサエティー）を設立するなど、仏教の普及に尽くし、現代スリランカ仏教復興の父と呼ばれるアナガリーカ・ダルマパーラの生誕百三十五年記念式典が、九月十七日、スリランカの大菩提会本部で執り行なわれた。

生誕記念式典はアナガリーカ・ダルマパーラ財団の全面的な後援のもとに開催され、海外から多くの仏教界代表が来賓として出席。日本からはスリランカサンガの日本における首席導師であるウパティッサ比丘の要請により、善光寺

の黒田住職が招待され、式典の席上、祝辞を述べた。

ダルマパーラはコロンボの名門に生まれ、当り語と仏教を学び、仏教者としての自覚を深めると共に、学僧として名を高めた。その後、インドの仏蹟が荒廃しているのを目の当たりにして聖地回復を発願し、一八九一年に大菩提会を設立、仏蹟を整備・復興した。今日、世界の仏教徒がインドの仏蹟地を巡拝出来るのは、ダルマパーラの尽力によるものである。

# 祝 辞

善光寺住職 黒田武志

このたびは、スリランカ大菩提会アグラスラ  
ーワカ寺院における、この尊い式典にお招きい  
ただき、あいさつの機会を与えられましたこと、  
誠に光栄なことで存じております。一言心より  
のお祝いの言葉を述べさせていただきますと思  
います。

この大菩提会はご存じの通り、今から約百十  
年前、命がけて釈尊の精神を護ろうとした、十九  
世紀スリランカ最大の偉人、アナガーリカ・ダ  
ルマパーラ師によって発足されたものでござい  
ます。自らの生涯を人類の奉仕に捧げたいと願  
った若きダルマパーラ師は、精力的で熱心な活  
動によって、世界中の知識人や理解者の協力を  
得て、正しい仏経を世に広めるためにたゆま

力を怠ることなく一生を駆け抜けられました。

ダルマパーラ師の功績は数限りなくあるので  
すが、まずは、師の活躍によって、上座仏教が  
完全にスリランカ国民の心に浸透し、純粹な仏  
教の復興は一層の盛り上がりを見せるようにな  
ったことがあげられると思います。この仏教の  
復興は、国内的に進められたのみならず、積極  
的に海外へ布教派遣団を送ることによってより  
力強さを増していきました。また、スリランカ  
の国家的なすばらしい文化の優秀性が、師によ  
って広く世界に認められ、国民一人ひとりが大  
きな自信を獲得し、この自信がやがて西洋キリ  
スト教による植民地支配を排して、独立を生む  
精神的支柱となったともいわれます。「生涯を人





ダルマパーラ墓所

類の奉仕に捧げたい」という誓願どおり、師の運動は、学問研究から社会福祉に至るまで、人類の平和に貢献する幅広いものとなりました。

ダルマパーラ師がその生涯を閉じられたのは、一九三三年の四月。師の意志はパンニャテッサ大僧正、その弟子のバーナガラ・ウパテッサ僧正といった尊いお弟子たちに受け継がれさらに世界的広がりを見せながら現在に至っています。一九九五年には、ダルマパーラ師の尽力によってイギリスからインドに返還された舍利仏と目蓮の舍利の一部が、インド政府からスリランカ政府に寄贈されることになりました。この舍利は大菩提会に下され、おまつりするための寺院として、この世界的名利アグラスワーカー寺院が建立されることとなったのです。

釈尊の精神を脈々と受け継ぐ、世界仏教界の中心ともいえるスリランカとわが国日本は、文

化や習慣、国情の違いはあれども、それらを越えて、同じ仏道を歩んでいく同胞として交流を重ねてまいりました。日本で初めての上座部仏教寺院・蘭華寺を千葉県に建立してくださいましたウパティッサ師が、大僧正、そして大菩提会管長に就任されたことによって、両国の交流はますます深まっていくことと存じます。

二十一世紀を目前にした今、仏教交流の復興は、平和を願う「心の交流」が深まっていくすばらしい第一歩であると思います。ダルマパーラ師の願いをさらに後世に生きる人類に引き継いでいくこと、そして、正しく伝導できる人材を育て、残すこと……私も、一仏教者としてその使命を貫いていきたいと決心しております。

ダルマパーラ師が灯した光が、新世紀に一層まぶしく輝き出すよう祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

本日はまことにありがとうございます。

## ශ්‍රී ලංකා සමාජ සේවා

අනුග්‍රහයක් ලෙස ඒකාබද්ධ පවත්වනු ලබන මේ මහාභිමාන ප්‍රතිපත්තියට සහභාගිවන්නන්ට ලැබීමෙන්, මේ මහාභිමාන අවස්ථාවේ මඩ අමතන වචන සිපයක් ප්‍රකාශ කරන්නට මිනිසුන්ට වටිනා කාලය ලබා දීම පිළිබඳව සැම දෙනාටම පළමුව මා සිතුවන්න වේ.



මහාභිමාන සමාජයේ අප දන්නා පරිදි ගත වීම් සඳහා අධික කාලයකට පෙර පිටින පරිදිවට තබා ලොවිතරා බුදුරජාණන් වහන්සේගේ ශ්‍රී සද්ධර්මය ආරක්ෂා කරන්නට ඇපකැපවී ක්‍රියා කළ දහනව වන ගත වීමේ දී ලංකාවේ පහල වූ ශ්‍රේණි පහ නාසකයාණන් වූ ශ්‍රීමත් අනගාරික ධර්මපාලතුමාණන් විසින් ගොඩ නගන ලද්දකි. සිය පිටින කාලය මානව වර්ගයාගේ යහපත වෙනුවෙන් කැපකළ යුතුයැයි අදීර්ණ කළ තරුණ වියේ පසුව ධර්මපාල ශ්‍රීමතාණන්ගේ ඇපකැපවීම තුළින් ලොවපුරා බුද්ධිමතුන් මෙන්ම මේ සත් වනපාරාධ පිළිබඳව නිවැරදි අවබෝධයක් ඇතිකර ගත්තවුන්ගේ ආධාර උපකාර මත ලොවපුරා බුදු දහම ප්‍රචලිත කරන්නට හිට අදීර්ණ ක්‍රියා කළහ.

ධර්මපාල ශ්‍රීමතාණන්ගේ කේවලවත් සිමාවක් නොවීය. ඒ අතර වතුමාණන් විසින් විනාශ මුහුටට පත් වෙමින් පැවති සිංහලකම හා බෞද්ධකම නැවත නැගී සිටුවන්නට අප්‍රතිහත බෞද්ධයන්ගේ යුගව ක්‍රියා කළහ. යුරෝපයන්ගේ විවිධ තාඩන පිඩනෙන්ට ලක්වෙමින් පවතින සිය මුඛදෙරට පත් ලංකාවේ වෙරළාදී බුදු දහම නැගී සිටුවීමට එනම් මේ ශ්‍රේණි කර්තව්‍ය ශ්‍රී ලංකාවට පමණක් සීමා නොකොට විදේශයන්හි පවා විපාජන කරන්නට පසුවට නොවුන. ඒ සඳහා වතුමා විසින්ම ඇපකැප වී ක්‍රියාකළ පමණක් නොව විදේශයන්ට දුන පිරිස් යැවීමෙන් ද මේ ශ්‍රේණි ක්‍රියාවලියෙහි ගත්තිමත් බව ලොවට පෙන්වීය. ඒ පමණක් නොව අනන්‍යතාවය වශයෙන් මේ රටතුල ගොඩනැගෙමින් පැවති, විෂම සුදු ජාතික සංස්කෘතික රැල්ල පාහේ දමා දේශීය සංස්කෘතිය ඇගයාකරන පිරිසක් බිහි කිරීමේ උදර කර්තව්‍යයටත්, යටත්පිටින වාදයෙන් තම මාතෘකුමිය ගලවාගන්නට ගෙන ගිය සත් විනපාරය තුළින් මේ දේශයේ ස්වාධීනත්වය ගොඩනගා ගැනීමට හැකිවිය. "මිනිසා අනන්‍යතාව වෙනුවෙන් පිටත් විය යුතුය" යන දර්ශනය ඇගය කළ මෙතුමා විවිධ ක්‍රමයන් තුළින් මානව වර්ගයාගේ සුභ සිද්ධිය සඳහාම ක්‍රියා කළහ.

ධර්මපාල ශ්‍රීමතාණන්ගේ පිටිතයේ අවසාන කාලය වළඹුණේ 1933 අප්‍රේල් මාසයේ ය. මෙතුමාගේ උදර කාශයකින් නොකඩවා ඉදිරියට ගෙනයෑම සඳහා වතුමාගේ ශිෂ්‍ය පාර්ශ්ව දේශයේ මහානායක පුජ්‍ය සැඩ්ගල්ලේ පන්දුසෑරියන් මහ නාහිමියන් හා උත්වසන්සේගේ ශිෂ්‍ය ජපානගේ ප්‍රධාන සංඝනායක, පුජ්‍ය බානගල උපතිස්ස නාහිමිපාණන් වහන්සේලා මේ උදර කර්තව්‍යයට උර දෙමින්, වතුමාණන් ගෙන ගිය මේ උදරතට සත් ක්‍රියාවන් අඛණ්ඩව ඉදිරියට ගෙන යමින් සිටින බව පැහැදිලි වේ. 1947 ධර්මපාලතුමාගේ උත්තරාගම මහ වංශලන්තයේ සිට ඉන්දියාවට නැවතත් කාරකර දෙන ලද අනුග්‍රහය කාරිපුත්‍ර හා මොග්ගල්ලන මහ රතනත් වහන්සේලාගේ ධාතුන් වහන්සේලා ඉන්දිය රජය මගින් ශ්‍රී ලංකා රජයට කාරදීමෙන් අනතුරුව, ශ්‍රී ලංකා රජය එම ධාතුන් වහන්සේලා තැන්පත් කිරීම සඳහා මහාභිමාන අනුග්‍රහයක් ලෙස විකාරය තනවා අනුග්‍රහයක් ලෙස විකාරයට පවරනු ලැබුවේ ද පුද සත්කාර ඉටු කරනු සඳහාය.

බුදුරජාණන් වහන්සේගේ නිර්මල ධර්මය පවතින එමෙන්ම එම ප්‍රතිපත්ති අනුගමනය කරන ශ්‍රී ලංකාවත්, ජපානයත් සංස්කෘතික හා වාග්මුඛවිභවයන්ගේ විවිධ වෙනස්කම් පැවතියත්, ඒවා මැඩගෙන බුදුරජාණන්ගේ ගමන්මත යන සහෝදර ජාතීන් දෙකක් වශයෙන් නානාවිධ ක්‍රමයන්ගෙන් බැඳී සිටී. ජපානයේ ප්‍රචම වරට වෙරළාදී බෞද්ධ විකාරයක් ඉදිකළ ජපානයේ ප්‍රධාන සංඝනායක බානගල උපතිස්ස නිමියන්, අනුග්‍රහයක් ලෙස විකාරයේ විකාරාධිපති ධුරයට පත් වීම නිමිත්තෙන් අප දෙරට අතර සම්බන්ධතාවය තව තවත් දියුණු වනු ඇතැයි මම විශ්වාස කරමි. විසින්ග ගත වීමේ අතිශය අතිශය සිටින මේ අවස්ථාවේ අපේ සබැඳියාවන් තව තවත් ගත්තිමත් කර ගැනීමට බෞද්ධ ප්‍රජාවට ද තුළින් ගොඩ නැගෙන සාමකාමී සමාජය එහි පළමු පියවර ලෙස මම විශ්වාස කරමි. අනගාරික ධර්මපාල ශ්‍රීමතාණන්ගේ අතිමහත්වරයන් නව ගතවීමේ පිටත් වන මහත් වර්තයා වෙත ගෙන යෑමත්, එමෙන්ම ධර්ම ප්‍රචාරය සඳහා අවශ්‍ය මානව සම්පත සකසා ගිවිසීම සඳහා බෞද්ධ නිකායවත් වශයෙන් මානව කළ හැකි කායානිකාරය සැකි පමණින් හෝ සකසා ගැනීම මාගේ අභිලාෂය වන්නේය. ධර්මපාල ශ්‍රීමතාණන් දැව්වන ලද මේ ධර්මලෝකය නව ගතවීමේ ඒකාලෝක සිටීමට හැකිවේවායි මාගේ ඒකාගත පැතුම වන්නේය.

අධ්‍යක්ෂ, - කුමරු නිකු අනන්‍ය ආගමනය,  
කෝකෝපි විකාරය, කෝකෝකම, ජපානය.

祝辞を述べる方丈



ウパテッサ大僧正よりお札のご挨拶

ダルマパーラ墓所公園



招待された各国の皆様と



式場に向かう行列



幼稚園を訪問



## —招待状—

横浜善光寺育英会理事長黒田武志老師

仏教界最高位者ブッダ・サーサナ・ケールティ・スリの称号（を有する）ヘディガレ・パンナティッサ・マハーナヤカ長老及び大菩提会アグラスラワカ大精舎（マハーヴィハーラ）最高責任者ブナガラ・ウパティッサ長老の要請と1999年9月17日午後2時30分に、コロombo・マリガカンダの大菩提会（マハーボーディ・ソサエティー）本部において執行される、国内外の仏教伝道に貢献した故スリマト・アナガリカ・ダルマパーラ師の生誕一三五年の記念式典に、アナガリカ・ダルマパーラ会の実質的支援団体ダヤカ・サバの意向に沿って、貴台を拜請いたします。故スリマト・アナガリカ・ダルマパーラ師は、スリランカの国家的英雄、且つスリランカ及び世界各地の仏教の特にスリランカの民衆の文化的伝統のルネサンス（復興）をもたらした偉大な仏教者として尊敬されております。

スリランカの温かき歓迎を享受されることを私は確信いたします。

敬白

ア Nil・モーナシンケー

マハーボーティ（大菩提）アグラッスラワカ

マハーヴィハーラ（大精舎）ダヤカサバ（座長）

スリランカ・民主社会主義共和国

駒澤大学茶道部の五十年に寄せて

# 茶 禅 一 味

善光寺住職 黒田 武志

茶は服のよきように点て

炭は湯の湧くように置き

花は野にあるように

夏は涼しく冬暖かに

刻限は早めに

降らずとも傘の用意

相客に心せよ

これは、茶道を学ぶ方ならきつと誰もがご存  
じの、茶聖・利休居士の教えられた七則です。

学生（駒澤大学）の私が初めてこの教えを知

り、一語、一語に内包された深い人生哲学に抱  
いた感無量の思い——それは、半世紀たとうと  
している今も鮮やかに胸に甦ってきます。

利休居士とその茶の湯を伝える「茶道の聖典」  
とも称される『南方録』には、居士の尊い教え  
が数多く残されておりますが、七則は、私たち  
人間の、根源的な生きる姿を教えてくださいとい  
るように思います。

今から四百年以上前、ある人が利休居士の茶  
湯の心持ちの極意・秘事を尋ねたときに、居士

はこの言葉を残されました。あまりにもあたりまえのことで、秘事でも何でもなく、に感じたその人が、

「それくらいのことなら、私も存じておりませんが」

と不服そうに言うのと、利休居士は静かにこうお答えになりました。

「それでは今私が言ったように、私を招いてくださいませんか。そうすれば、私はあなたの弟子になりましょう」。

あまりにもあたりまえのように思えたこと、それが実は、実践するにはとてつもなくむずかしいことだと、そのときその人は気づいたことでしょう。

この話を、大徳寺の笑嶺宗訴という、利休居士の参禅の師が聞き、

「利休の答えはもつともなことである。昔、唐の時代の代表的な詩人・白樂天が、名高い、

鳥窠ちようか禪師に、「仏法の極意とは何ですか」と尋ねたときに、「諸しよ悪あく莫まく作さく 衆しゆ善ぜん奉行ぶぎやう」とお答えになった。これは、——もろもろの悪をなさず、あ

らゆる善行を行え——というごくあたりまえのことである。白樂天が、「そんなことなら三歳の童子でも知っていますよ」というと、鳥窠ちようか禪師は、「三歳の童子でも知ってはいるが、さて、八十歳の老翁でも行うことはたいへんむずかしいことである」とおっしゃった。白樂天はひどく自分を恥じて、深く和尚に帰依したという。利休の答えはそれと同じことだよ」

と語られたといいます。

私も、仏の道を選び歩んで四十数年……まだまだ、日々、修行の毎日であり、これでよしと感じたことはありません。それは、お茶の稽古のたびに思ったことでありました。ただ、未熟ながらも学び続けていると、一服のお茶をいたたく——そのことだけのために命をかけた利休



居士の、そして先達の茶人たちの生きように思いをはせ、いかに何でもないことを大切にしてきたかということに感動し、心が浄われていく感覚を味わうことができるようになりました。

わが国に喫茶の風習が伝わったのは、千二百年前の平安後期といわれます。鎌倉時代には、栄西禪師によって、「茶の湯」としての法が中国よりもたらされ、はじめは禅院で行われていたものが次第に当時の大名たちの生活に取り入れられていきました。このことがお茶と禅宗が深く結びれている端緒となっています。中国においては良薬あるいは娯楽であったお茶を「茶道」という精神文化にまで高めたのが、桃山時代に生きた宗匠・千利休でした。

大坂・堺の納屋衆（堺の富商）に生まれた利休居士は十七歳のときに茶匠北向道陳に茶の湯を学び、またその紹介によって武野紹鷗たけのじょうぢうに師事して奥義を究めました。この紹鷗師の指導と自

らの研鑽によって工夫し、この間、大林宗套、笑嶺宗訴などの師について参禅修行を重ね大いに悟るところがあり、抛筌ほうせんの号、宗易そうえきという法名を与えられました。筌とは魚を漁るウケのこと、その筌を投げ捨てるという意味の名は、魚を得てしまえばもはや魚をとる道具はいらない。悟りを得たならば、その悟りすらも忘れてしまおうという、利休居士の境地の高さがうかがえるような気が私にはいたします。

利休居士は、

「茶の湯を習うは仏法を習うなり」

と語っておられますが、まさに茶禅一味、その一挙一投足、戸の開けしめにいたるまで、その物事を通じて自己をみつめ、自己をならい、真実の自己に極めていこうとする姿勢は、私も学んできた禅の修行そのものなのです。道元禅師も、「仏道をならふといふは、自己をならふなり、自己をならふといふは、自己をわするるなり、

り、自己をわするるといふは、万法まんぽうに証せらるるなり。万法に証せらるるといふは、自己の身心しん、および佗己たごの身心をして脱落せしむるなり」と言われましたが、禪とは、自己の奥に向かつていく心の旅であり、表面的な知識ではなく、体験から人間の本質、すなわち、人間がいったい何であるかを模索していく試みであるといえます。己の心のあり方を学ぶ——これは、利休居士のおっしゃった「七則」の深い哲学だと思ふのです。

人間として自然にあることの尊さを知り、何かに縛られたりとらわれたりすることなく、あるがままに生きていく。いくら文明が発達し、時代の流れが変わろうとも、花が美しいと感じる心は幾千年たとうとも、国籍や性別が異なろうとも普遍的に変わらぬ、人として生まれながらに誰もが持つ仏性です。

七則に充ちている相手を思いやる心、それは

世のすべてのものに感謝ができたとき、生かされていくことに感謝できたとき、自然に生まれ得るものであり、何ら見返りを求めない美しい魂です。すべてのものに感謝したとき、私たちは、すでに自分が満ち足りていることに気づきます。足ることを知れば、それ以上の何らかの飾りつけやぜいたくは、まったく必要ないものであり、そこには美しささえありません。

華美な飾り、奢り、ぜいたくな心をどんどんと削ぎ落として、磨いて、そして最後に到達した、大宇宙に溶け込んでしまう自然の美を尊ぶ精神で、「佗わび」という世界を創りだしていった利休居士は、まさに、無限の大きさを持った禅僧であり哲学者であったといえましょう。

豊臣秀吉の台頭に従って茶名を挙げ、天下第一宗匠と称せられることとなる利休居士ですが、けんらん豪華を抑え、枯淡の中にひとかたならぬ英知と王侯貴族をしのぐ気概を持つ「佗わび」

の精神を持つ、超越した茶人を、秀吉はどれほど憧れ、そして、畏怖したことでしょう。

利休居士が点前をすると、時が幽玄な優美さに溶けていき、茶室は一つの小宇宙と化し、茶道具も火も湯も花も風もみな利休と一つになって、雅びな調和を保ち、そのまま次元を越えて昇華していく…：自分をはるかに超越した、あまりにも異質で尊い人を目の前にするたびに、秀吉は金色に輝く豪華さのみを求めた自分との違いに、はじめな気分を味わっていったのではないでしようか。

憧れや羨望はやがて、嫉妬へと変わり、正しい人間としての見方ができなくなっていった天下人は、とうとう捉えどころのない利休の正体をつかめないことにあせり、自分の目の前から消し去ってしまおうとしました。利休居士が秀吉の命により堺に蟄居し、京に呼び戻されて自刃したのは、居士が七十歳のときのこと。私は、

思うのです。この世での生を終わるその瞬間まで利休居士は、秀吉の仏性を観じ、何の恨みも未練も残さず、それどころか感謝の心を抱いて安らかに逝かれたのではないかと。

家は漏らぬほど、食事は飢えぬほど。

茶の湯とは

ただ湯をわかし茶をたてて

飲むばかりなる事と知るべし

頂点まで究めた人が、究めつくして戻ってくる原点が、残されたこれらの言葉に凝縮されているような気がします。茶道というのは、禅の思想の中に日本人ならではの美意識が付随し、利休居士ほど超越した人物でなければ一生かかってもそれを完璧には体得することはできない道なのかもしれません。しかし、人間として何を大切に生きていったらいいのかを学びながら生きていくということほど尊いことはないと思

は考えます。お茶を通して、真の自己を学ぶ——  
そうした精神が日本人の中には息づいており、  
戦後の混乱からもみごとに立ち上がることがで  
き、救われてきたのだと思うのです。

昭和二十六年、駒澤大学茶道部は、利休居士  
の教えられた四規『和敬静寂』を根本精神とし  
発足、以来、顧問・鈴木宗保先生、講師・鈴木  
宗幹先生を始め、多くの諸先輩方のご尽力によ  
って、脈々と五十年続いてまいりました。

和敬静寂——これはまさに禅の心に通ずる茶  
道精神そのものであります。それは、人の生き  
る道そのもの・心を高める精神修養の道そのも  
のといいかえてもよいと思います。

和——調和の心、人間同志和し合う心の大切  
さ。和は茶道の本質です。相手を思いやる心を  
こもった作法の中から生まれる和らぎ、和やか  
さ、慎ましやかさ。あらゆる人と人との交流、

たとえば亭主と客、夫と妻、親と子、民族と民  
族……も、この『和』を尊ぶ心さえ忘れなければ、  
大自然、大宇宙とも調和することができ、宇宙  
の法則に反する争いごとは、世の中からいつさ  
いなくなるはずなのです。利休居士の時代、茶  
の湯を学ぼうとする者は、大名や裕福な商人た  
ちでした。たとえどんなに身分が高くても、刀  
をおき、頭を低くしてにじり入る、このことに  
よって自分の地位ではなく人間性に尊きをおき、  
すべての人が平等であるということを認識する  
異空間、それが茶室だったのです。現代ではと  
くに、この『和』の心の大切さをあらためて人  
は学び直してみるべきだと私は考えます。

敬——和とともに大切なのは、相手を敬う心  
です。茶の湯はあらゆる面で、敬意と尊敬の精  
神を必要としています。これは、無理にそうあ  
ろうとしなくとも、「今現在のこの方とお逢いす  
るのは生涯でただ一度きりのこと。この茶会は



生涯でただ一度きりのものである」という一期一會の精神を持つ人ならば、自然に現れる心の動きだと思えます。一瞬一瞬、唯一、このときだけ、大切に生きる。今、という時の重要性を理解していれば、おのずと人に対しても自分をとりにくすすべての自然に対しても——一輪の花、一滴の水に対しても——、敬意が、そして真心が生まれるものだと思います。

清——客が到着する前に、細心の注意を払って露地に水を打つ。このことよって清められるのは、その人の魂だと私は思います。茶室にいるひととき、日常の雑事から離れ、心のすみずみまで清められていくような気がいたします。さまざまな垢を削ぎ落とすとき、そこに自己の本質を見つげることができのです。その清らかな魂を、どんな日常にいても忙しさの中にも持ち続けることが修行であると私は思うのです。

寂——「禪」というのはサンスクリット語で、「心を静かにする」という意味です。どんなことがあっても動じず、とらわれず、いつも平靜で澄みきった状態が、寂に通ずる心だと思えます。動いているときには決して聞こえてこなかった音——水をそそぐ音、釜を鳴らす松風、そして、外からではなく内からの静かな声。茶禪一味、その声に耳を傾ける時を私たちは持つことがのできるのです。盲目的な激情を捨て、私たちは本性は、みな仏性だということを自覚できるはずなのです。

「和敬静寂」という四つの言葉にこめられた奥深さを、茶道部に籍をおいた方々はその後の人生で、いつそう深く味わい、どんな境遇にいたとしても一生の財産として子に孫に伝えていかれていることでしょう。

茶道部創立当時から私たちを指導してくださいました鈴木宗保先生は、この利休居士の精神をそ

のまま我々に伝えてくださった偉大な師でありました。明治十五年にお生まれになり、明治四十四年より京都裏千家で修業、大正五年には裏千家業躰とられました。茶の湯に関するご本も数多く出版なさり、多くの門弟に愛されながら昭和五十五年九月、数え年九十九歳でこの世での生を終わられました。空前ともいえる茶人のご長寿であられました。宗保先生の句歌集『太翁』を読ませていただくと、先生の、あまりにも自然体で一瞬一瞬を大切に生きてこられた姿が現れており、感動がわき上がってまいります。門弟一同による『太翁』のあとがきには次のように書かれています。

『大先生は朝がたいへん早いでした。弟子ががんばって、かなり早く馳せ参じても、それより一段早く炉に火を入れられ、水屋の準備もすっかり終えられて、冬ならば釜の上に新聞を広げて、コタツ替わりに暖をとってお

られました。——中略——最晩年の大先生は、厳しい面よりも、ほのぼのとした温かい慈愛の方が勝っておりましたが、お亡くなりになる前の年につけられた紹鷗棚の稽古は猛烈果敢でした。総員総点検で弟子どもはふるえあがりました。しかしこれは特例で、晩年は二、三番稽古をつけられると、パイと立っていかれて、茶の間でサラサラと短冊を認められ、出来がよいとニコニコしながら稽古席に最出馬され、パイと誰かの膝の上にそれを投げられるのでした。そうしていただいた短冊が幾つか積って今回の句歌集の一端をなしているのです……』

目を閉じれば、なつかしく、宗保先生の仏さまのような慈愛に満ちた笑顔が、瞼の裏に浮かんでまいります。私にとっても、きつとみなさんにとっても青春時代の輝かしい一シーンの、尊い出会いでありましょう。

照りつづく露地をぬらして朝茶かな

四分の一松よろよと吹かれ居る

冬至湯の肩までいれて九十四

私が先生の境地に達して冬至湯の肩までつか  
るには、まだ三十年の月日を待たなければなり  
ません。

「あの人にはお茶がある」という表現があり  
ますが、さりげない仕種や動作の中に、利休居  
士の魂を感じさせていただける先生でありまし  
た。そしてもちろん、その後を受け継がれた若  
先生である鈴木宗幹先生にも、宗保先生の茶道  
精神・生きる姿勢が息づいておられました。そ  
して私たち茶道部の門弟に、全情熱を傾けてご  
教授くださったのです。

五十年——一口にいいにしても、一世紀の半

分という長きに亘って、世の中の流れにとまど  
うことなく伝統を維持し続けるというのは、並  
大抵の努力ではなかったと思います。

創立当時の諸先輩方が作ってくださった「茶  
道部規約」が現在も後輩にほとんど変わること  
なくたしかに受け継がれ守られていることにも  
それがあたりまえとは思わずに、感嘆と驚きを  
感じるものであります。

昭和三十四年に駒澤大学を卒業し、大学院に  
進み、その後、二十歳代の後半では、雨風にさ  
らされてほとんど無一文の状態での全国托鉢行  
脚を体験しました。利休居士のおっしゃった「家  
はもらぬほど、食事は飢えぬほど」にさえも届  
かない野宿生活の中、厳しい現実に打ち負かさ  
れそうになりながらも、茶道部での日々で心身  
に浸透した和敬静寂の根本精神が、いつどんな  
ときも生きていてくれたのです。私はこのと



きの体験で、自然から受ける恩恵、自分が生かされている尊さに気づくことができました。以来、苦しいことも嬉しいこともすべてを超越して、来るもの皆よし、すべてありがたいという境地に達することができ、私の教えの真の意味を実感したのです。ほんの少し、道元禅師に、そして、利休居士の魂に近づけたような思いがし、それと同時に自分の弱さ、無学さを思い知り、あらためて自己を高めるため修行し直したのです。

昭和四十二年、茶道部が時代の転換期を迎えている頃、私は三十歳で布教と修行のためにアメリカに渡りました。高校生の頃の私は、ただ漠然と、無限の可能性が秘められているような超大国に憧れを抱いていただけでした。しかし、茶道を学び、禅を学び、托鉢行脚で自己を学んだ私は、タイやアメリカに暮らすほどに、深く日本人としての誇りを持って茶道精神や禅の思

想について話せるようになりました。西洋人の目で、日本の文化・宗教を見つめ直してみると、そこには大きな驚きと新しい発見の連続でした。継承された伝統的なものが素晴らしいのはなぜか。それは、ただ長く続いているから価値があるのではなく、どんな時代においても何世紀の間、頑なにそれを守って後世に伝えようとした方々の努力が光輝いて息づいているからなのです。

我が茶道部についても、まったく同じことが言えると思うのです。

今から一世紀近くも前に岡倉天心が『茶の本』を英語で書き、日本の茶道精神を西洋に伝えたのも、西洋でさまざまな体験を積み、あらためて日本の素晴らしさを再発見したからこそではないでしょうか。その時代というのは、日本人がこぞって西洋化しようしようとしていた頃だったというのに……。

終戦後五十余年、西洋文明とその考え方にどつぷりつかりそうになる時代の中で、温故知新の精神で誇りを持って茶道部を絶やすことなく継承してきた先生方、先輩後輩のみなさんに、私は深い敬意を払わずにはいられません。

今、経済大国となった日本はさまざまの意味で世界から注目されています。科学の進歩は目ざましく、コンピュータやLSIによって、世界との距離と時間はどんどん短縮されました。そんな時間の中で、私たちは常に断片でものを見る習慣がつき、全体像を見ることが苦手になってしまいました。次々と展開する新しいことばかりに心奪われ、自然との触れ合いや美しさ、宇宙の法則の偉大さに感謝するよりも、自分の自己的な欲ばかりに興味を持つようになってしまいました。国や会社の発展だけを目標にがむしゃらに走った結果、金銭的には豊かになり生活は便利になりました。なのに、人々の表情が

ゆったりと満たされていないのはなぜなのでしょう。想像もつかないような破壊力を持つ兵器を使った戦争の脅威、じわじわ進む環境破壊を、飢えで泣く子どもたち……グローバルな視野を向けたとき、そこには不安が広がっているのです。世界の全体像を見渡せば、日本人が昔から大切にしてきた和の精神を二十一世紀に向けて広げることが、世界平和のためにいかに重要な使命かということがわかってくると思うのです。

茶道部創立五十年、きつと二十一世紀には、六十年、七十年、百年と祝えることでしょう。創立当時の美しい茶道精神が、必ず生き続けているはずですよ。

めまぐるしく変わっていく時代の中で、この十六世紀から変わらぬ茶室という空間に身をおくと、この上ない安らぎに満たされてまいります。茶道は私たち日本人の心の原点です。調和

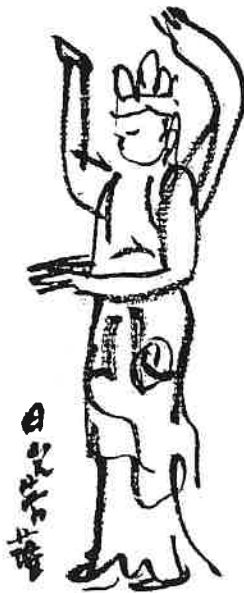
と基として雅びな美しい文化の国、それが私たちの日本です。

「どうぞ、お茶を一服召し上げれ」

そうした意味のある『喫茶去』は、茶道部伝統の機関誌名でもあります。歴代茶道部員が誰でもその書名をなつかしく覚えていてほしい。そして、きっとその、「お茶でもいかが」の精神によって素晴らしい人間関係や出会いを人生の中で築きあげていることでしょう。さらに、さりげなく、しかし一所懸命相手を思いやる「七則」の精神が子から孫、後世へと生き続ける限り、時代、国境、民族、文化、習慣、宗教……、人と人との間にあるかのように見えるどんな垣根も、またたくまに消えていくと思うのです。

日本人として生を受け、永い時間をかけて育まれてきた禅・茶の湯という心の宝。それを私たちは一人ひとり持っています。茶道部を卒部

していった方々の数、現部員のみなさんの数は合わせても、まだ、世界の人口から見れば、針で突いた点にも満たないかもしれません。しかし確実に世界平和の大輪を咲かせる小さな種蒔き人となる方々であり、二十一世紀を救う方々であると私はかたく信じております。



善光寺開創30周年・育英会15周年記念  
天童寺・西安・北京の旅

平成11年4月9日(金)～14日(水)



# 天童寺

拜登諷經



道元禪師得法靈蹟碑前



拝登の挨拶をする黒田住職

天童寺の修祥監院老師に記念品を贈呈





道元禪師入宋紀念碑前

## 寧波

市内にて





阿育王寺





興教寺



大雁塔



兵馬俑坑





弘慈廣濟寺



中日友好病院



北京

万里の長城



明の十三陵



# 道元さまに引かれて天童山参り

（株）ナリス化粧品  
元常務取締役

東郷敏

横浜善光寺、開創三十周年記念訪中団員として、黒田武志方丈に随行。その道程を見たまま感じたまま、書かせていただきました。

## 出発に際して

黒田方丈は出発に際して次のように述べられました。

「開創三十周年は改めてゼロからの出発。私はいつでも初心。三十にして初心横浜善光寺が、今日あるもへ宗祖を通して釈尊に還るゝが原点。

今の世は仏法だけが生きていて、道元禅師さまのお姿を見ることができない。従って私たちは彼の地に赴き、道元さまの教えを全身で受け取ってきたいのです。

若き日、道元さまは、天童禅寺の如浄禅師に師事。大悟大事を成就なさいました。そして五年後帰国。その第一声『われ彼の地において柔軟心を学ばん』と喝破されました。

その彼の地とは、一体何処なのか？

皆様と共に聖地を訪ね、道元禅師さまの足跡

を歩いてみたいと思います。

皆様は横浜善光寺檀家三千軒のひとり代表です。訪中の目的は、

第一に、道元さまの足跡と、その偉大さを実感すること。

第二は、今は亡き善光寺初代総代により設計建立された、日中友好病院（日本国協力援助による）を訪ね、その功績を偲ぶこと。

第三は、四月十二日善光寺開基さまの二十三回忌法要をゆかりの地、北京広済寺においてとり行うこと。

そして世界の安心と平和、日本国民と横浜善光寺檀信徒さまの未来永劫ご多幸ご発展あるよう合わせて、祈念報謝することにあります。

皆様も、平均年齢六十一・一歳、決して若い旅団ではありません。

かつて如浄禅師さまのお師匠、雪竇せつちやう禅師さまが申された、

『三分の光陰、一早く過ぐ、靈体一点もかい磨せず、生を貪り日を追うて、区區としてさるよべども頭を巡らさず、如何せん』

旅団の皆様も、早や人生も三分の二を過ぐし、時間も限られて参りました。今一度自分の人生を振り返り、今日が残された人生の第一日目、  
第一歩。未来に向け、何をなすべきか、どうぞ二度ある人生と心得ず、今は今なりに、自分自分なりに、夫々天分に従い、精一杯やる。これから出来ることは何か、それを知って出来ることから行動する。幸い道元さまの〈習〉われた〈法〉の元に参ります。馬の耳に念仏と言われぬように、目を見開きよく見聞して参りたいと思います。どなたさまも、きつと何処かで人生開眼の一語に接します。まさしく道元さまの〈後を踏み室に這入る〉ということになります。そのためには、いつ何処からでも受け入れる用意と、心の準備が必要です。

道元さまの歩かれた道程は想像もできない程に、遠く、険しく、厳しいものでした。船にあること三カ月。天童五山にへ行くこと五年。

いかがでしょうか、そんな、ながーい道程を、この旅団は僅か八時間で走破することになりま  
す。どうぞしっかりと心づもりして下さい。」

方丈の緊張ぶりがヒシヒシと伝わってくる。私に、旅の動機はあっても特別目的を持っていなかった。多分に観光旅行とばかり思っている。急に気が重くなってくる。今、方丈より、一度の旅にと、新しい地図が与えられた。与えられた地図によって、新しい旅の新しい発見をしたい。

旅団の意志も方向も一致する。旅団は求道者。道縁は、お互いの信によって結ばれる。信なき道縁は鳥合の衆。私も心の中をしつかり、整理する必要があるように思う。この訪中記も道中、実にわがままと迷惑を尽くした第一人者とし

て、方丈より名誉の指名。その罪の酬いとして、書けと言われる。提出までに与えられた時間は僅か四十八時間、人の能力の限界を承知しない、方丈のいつものクセ。

仕方がない、書ける処まで書いてみる。

私は生来、道心これ微か。団員の中でも格別、信仰心の乏しきこと自覚して憚らない。いまだに道元さまの偉さも、立派さも、大きさも分かっていない。これまでお話しさる偉い先生方が、道元さまは偉い御方なんだと言われるから、偉い人なんだと思う程度。それだけに緊張と心配が先に立つ。

方丈の様子も、単なる旅行に行く様な気楽さが全く感じられない。これにはしつかりとした動機、目的が関わっているものと思われる。

時すでに遅し、乗り込んだ飛行機から飛び降りる勇氣もない。

## 機中にて

飛行機は、予定通り午後五時成田を離陸。間もなく西に急旋回。徐々に西へ西へと向かっている。雲はない、珍しく機は青の空間に止まっているように思える。機中に太陽の光は全く差していない。限りなく陽の傾いた真西に向かっている。これはまぎれもなく西方浄土。旅団の目的地天童山を目指していることが分かる。機内もすっかり落ち着いたころ、さいわい持ち込んだ一冊の本。

道元さまの『正法眼蔵隨聞記』、とにかく読んでみる。これまで何度か目を通したことはある。しかし頭の中に全く残っていない。僅か三百ページの隨聞記、何としても上海に着くまでの三時間に読み終える必要を感じる。読み込んで行くうち面白くなってきた。

面白いだけではない、道元さまの御人なりが

吹き上がってくる。

時折、ゆさつと揺れる機体、読み込んだものを頭の空間にほり込んでくれるに丁度いい。中あたりに差しかかったころ、方丈の機中訪問を受ける。ひそかな読書の時間を遮られても困る。「トーゴさん、なに読んでる。なにに、やっぱりな」だと思った、遅いおそいとひやかされる始末。「予定が狂いましたか？ 残念でしたネ」なんともいい調子なんだから。おっしゃる通り、遅いのは私の特性。私の学びは、いつでも遅い。大概、追い詰められてから漸くですから、気にはしません。処が、人間追いつめられて、もがきながら学ぶと、実に入り方が違う、この極意を長年の経験から会得しているところに価値がある。追い詰められ、未だ猶学ばない人よりは上。

さて『隨聞記』も八合目。下界は一面青海原。道元さまの教えと、ご修行時代のご苦労が、見

事な描写で映し出され、新しい発見につながった。

道元さまは言っている。『仏道を学ぶ者は、後日を待つて、行道せんと思うことなかれ、ただ今日、今時を過ぎずして、日々刻々を勤むべきなり』全く、お見通しじゃありませんか？ 学びというものは、後日を待つという心であってはならない。

『海中に龍門と言う処あり、彼の処、浪も他に異ならず、水も同じく塩辛く、他に異なるところなし、しかしこの龍門一定の不思議あり、魚この処渡れば必ず、龍となるなり』私は一人感動している。いまは正にその龍門に向かつている。

このことを誰も知らない。私だけがそれを知っている。いま導かれるままに向かえば、私だつて龍になれる。自由に空を飛び、地を這い、海に潜る事だつて出来る。私だつて、私なりに、

祖師にもなれる。あと僅かな時間で、龍門に達するのだと思うだけでも、なんだか胸に熱いものが感じられる、こみ上げてきえくる。一体なんだろう。感涙で少し読み辛くきえなっている。

嗚呼！ なんと単純、無知なのか、見事な錯覚に陥っている。知りつつ抑えられない感動がある。この秘密話してはならない。私だけのもの。誰にも話さない、漏らさない。この龍門の不思議を得て、天童山に上りさえすればと運命が一変する、などと一人悦に入る。道元さまは全く目こぼしがない。こんなところを見抜いていらつしやるように『示に曰く、無知の道心、終始退すること多し、知恵ある人、無道心なれども、ついに道心起こすなり』いまの世に、実例は多くある、それだからまず、道心のあるなしは問題にせず、仏道を学ぶことに力を尽くすべき……と人間大事なことは、力や知恵がないからといって、学ばず、修行しなかつたら仏道を



得ることができようか、未来永劫その機会はない。いづれなにごとくも後にと考えてはならないと、まことに微に入つて、細に亘り教えてくださつてゐる。

訪中するについて、色々な方々から、中国の現状に鑑み、特に衛生上のアドバイスをいただいた。まず生水は禁物、当然にして寺院を訪ねる訳だから、山また山の山奥に行くはずである。その為に救急箱を持ち込む程にあらゆる状況を考え応急処理用の準備をする。

ところが八百年前の道元さま、『旅に居て病氣というものは、氣の持ち様で転ず、入宋のとき、船の中でひどい下痢を患ひ苦しんでいた、そんな折り暴風で転覆の危機に遭遇、みんな大騒ぎした。わたしの下痢もその騒ぎで直つて居た。このようになんでも、一生懸命考えると病氣も起こるまじきかと覚える』と示してある。何で出発前にここを読まなかつたのか。要は心もち、

心構え次第。一生懸命考えて歩きさえすれば一切かわりなし。これで私の訪中も、病なし、薬に頼る事なしと心得たり。さてさて病氣にでもなれば、一生懸命が足りなかつたことになる。くわばら。くわばら。

道元さま、貞応二年の三月下旬、博多を出帆。四月下旬、慶元府（寧波）に入港、慶元府に着いてなお船にとどまること三カ月。理由は色々想像されているようだが、彼の国の語学上達のため、或いは又上陸したあかつきにヘケイシヨウすべき寺ひいては師事すべき師家の選定に時間をかけられたと伝わっている。いずれにしても、用意周到ねばり強いご性格が観じられる。この訪中に備えた〈中国語〉は……你好。謝。不明白。要迄。請勿吸因。これだけでも優に一カ月を要している。道元さまは、全く心構えが違つていた。機は進みはるか西の天空が真赤に染まるころ、機体は大きく揺れ、はつと我



に返る、流暢な中国語で、間もなく上海、シャンハイ……シートに身体を縛り付けるようにとのこと、シャンハイだけは鮮明にわかった。機体がガラガラ唸っているからには飛行場も近い。雲もない。陸地のはずなのに光が見えない、光がないということはまだ街は遠い……と思っ  
ていると、着陸態勢に入っている。私の概念は夜処かまわず、煌々と照らすところが街。誰彼ともなく暗い、光がない光が少ない、との声、そう思ったのはひとりだけではなかったようだ。しかし着陸してみると、最小限度の灯りはあった、これでいいんだ。

## 上海

上海で一泊、いよいよ早朝からの巡礼に備えて身体を整える必要がある。しかしこれは表面向き、中国の第一夜、素泊まりだけはしたくない。またそんな自分を許す訳にもゆかない。上海は

中国最大の経済都市、人口千二百万人。部屋から、添乗員の陳さんにコッソリ電話、無理を承知で頼んでみる。彼は心易く応えてくれた。しかし、それでも二十三時を回っている。ホテルの玄関に待機しているタクシーを拾い深夜の街に飛び出した。

着いたばかり、ホテルの位置関係はまるでわかっていない。一時間も走り回れば大概の様子はおかめると踏んでいた。運転手がどこに行くのかと聞いているらしい、だったらこれが上海だという旧市街地から、外灘、そして出来れば、東方明珠塔ぐらいたまで行きたい。ところが、陳さんは、「上海といっても東京の三倍の広さですよ。そんなに走ったら、明け方までかかる」と言う。少々では帰れません。それを聞いて卒倒しそうになった。中国でのチョットは百里の感覚。だからといって引き返す訳にもいかない。「では往復三時間、走って、走りまくって欲し

い。運転手さんのスピード技術に期待する」と言った。その途端、十年以上も使い慣れているという車、レース場にでも降りたかのように唸り出して、みるみる周囲をうしろに飛ばしている。このドライブ誠に精神衛生上、極めて悪い状況が続いた、それでも、見たい知りたい気持ちにはかえられない、我慢する。この時間になると、中心街といっても薄暗い、光もポツポツ漸く輪郭がわかる程度、多分鳥がいても見分けがつかなかったろう。国が変われば、動物の生態も違うのか……？ 不思議と猫一匹、犬まで見当たらない。さしずめ珍しい発見もないままUターン。

しかし上海独特の夜の匂いは当分忘れられないだろう。ホテルに舞い戻ったときは丑三つ時。タクシীরメーターは一五五元（×15円）にもなっていた。貨幣価値が全くわからない自分、はじめて払うお金、何度か掛け算してもこれで

いいのか、よかったのか心配になった。運転手さんが「謝謝」と大層喜んでくれる。これでも運転手さんにとってはよかったのだろう。とにかく、自分の住んでいる国の力というものは、国においてはわからない。自国の金を使つてはじめてわかるその価値。……日本が高すぎるのか、中国が安すぎるのか……どちらかであることは、確か。実際へ豊かな国に過ごしていると、いう実感がないだけに戸惑つてしまう。

ホテルのチェックインは二十二時。真夜中はタクシীর中、戻つたのは午前三時。起床五時。出発七時。部屋の滞在時間僅か二―三時間でこれでも一泊。折角の超一流ホテルなのにしかも最高の部屋のはず、まるで仮眠所。電灯を消せば一流も三流も同じでした。

## 中国事情

さてタクシীরの中では運転手さんから色々、

国の事情、生活の情報など、沢山聞くことが出来た。これは収穫。上海住民の平均年収は八千五百元(×15円)、市場経済導入後、経済都市上海は中国で最も高い方だと聞かされた。チョット内陸部に入ると一千元〜一千五百元(×15円)だとも言っていた。あくまでも平均だから、実態はわからない。目安としてはわかる。依然として貧困の差は、大きく、国は年収八百元以下を、貧困家庭と定義づけていることも知った。金額の分量で計る訳にはいかないが、一体どんな生活が出来るのか?…マイルドセブン五〇個分にも満たない、一日一箱チョット吸ったら、全ての生活費は飛んでしまう(大きなお世話です)。

そんな人達が一億人以上もいるというから、聞いて驚くより、むしろ胸が痛む。余談になるが、中国市場十二・五億人。この人口を当てにして企業進出しようものなら、所得レベルも格

差もかなり厳しい状態が現実。余程慎重に進出しない限り、失敗は見えている。利益より、先ず国を豊かにする犠牲心が根底にない限り、進出する資格なし。

また可処分所得をもつ人は、およそ三千万人というから丁度日本と同じくらいか。マスコミや観光案内等いいことづくめ、どれも華々しい部分だけの紹介になるから、全く現実、実態がみえない。将来所得が上がれば(いつのことかわからない)市場は無限。昨今もてはやされた企業進出。しかし一部企業の撤退や、厳しい状況等聞かされとる、当然の様な気がする。あながち嘘ではなさそう。先ず日本の感覚の定規では測れない。社会主義国家の定義は、富める者も、貧しき者も、民主的であり、水準的であり、平等、博愛が理想だと言い続けたスローガンを掲げ続けている。一方日本の社会主義派も同じ事を言っている。

博愛はいい、平等は不平等。……不平等こそ平等かも知れない。

人間社会は何かにつけて競争の原理で成り立っている。そんなところで平等を振り回したら、言葉は美しいが、不平、不満、いい加減の社会になってしまふ。努力の分量と成果に応じた分配。成果に与えられてこそ真の平等。これだつたらだれも、納得出来る。それが市場経済の原理のはず。働く者、働かざる者が平等であれば、個人の意欲は減退するばかり。一体国の生産はどうなる、経済も立ちゆかないのは当たり前ではないか。ましてや、中国国民の優秀さは世界屈指のはずなのに、何故ここまで人々の暮らしが厳しいのか、わからなくなつてしまふ。

空には超近代ロケット、近代兵器、戦力は世界屈指。……なんと政治の難しいことかとそれでも解放後は、頭を使い、努力し運さえ良ければ、二万円〜五万円は稼げるとも言っていた。

そんな人達も少なくなるとか、昨今十万元（百五十万円）を超える人達もあるというから、平等であるはずなのに不平等が見える。

これこそが〈真の平等〉近代社会主義の新しい在り方かも知れない。そして段々と努力の報われる国づくりが進んでいることも伺われる。

ちなみに運転手さんは、花形職業だとか。い時は二万円〜三万元は稼げると、ハンドルたいて誇っていた。だから夜も寝ないで走っていると言うから、いつ寝るのかと、聞いてみると笑いながら「死んだら眠るから大丈夫」と。ここまで来て一緒に眠らされても困る。「頼むから僕を降ろしてから永久に眠ってくれ」と頼む始末。

朝食のとき、方丈より、「トーゴーさん目が真赤だ。どうしたんです。日本を離れて、もうホームシックですか？」……まさか一晚中働き詰めであったこと、籠抜けしたなどと言えたもので

はない。これまでの仕事柄、つい市場調査みたいになってしまふ。

習慣とは恐ろしきもの、なんでも興味をもち、根掘り葉掘り、好奇心旺盛は、慢性的病、困ったものです。

状況描写や数値は、あるいは確かでない事も断っておきますが、およそ外れていないことも、確認しておきます。

## 寧波

予定通り、上海より寧波に飛ぶ。さらに西へ三八〇キロメートル、およそ東京から、京都までの距離。寧波は紀元前二千年時代にさかのぼる。唐の時代は明州。

港は、日本への最古の貿易港。従って日本の歴史は古く、前後数十回の遣唐使の渡来また鑑真和上。また伝教大師、そして道元禪師の上陸の地ともいう。ここは随所に日本仏教ゆかり

の名僧たちの足跡が残されているところ。

この旅団を案内下さるのは、陳さん。彼はこの国、寧波が故郷。天童禪寺で僧侶としての経験を持つ。横浜善光寺を通じ、日本仏教を学び修行した者、学びながら今は日中友好の旅行社に働く身、これ以上の「天童禪寺」案内役は先ずいない。

目的地も近い。道元さまは、未知の国、遠い彼の地に、命をかけてまで、何故？ どうして？ 赴いたのか。誰でもすでに承知の事、しかし敢えて書くなら、道元さまは、一、二〇〇年（八百年前）一月二日久我家に生まれる。一二二二年、十三歳で叡山に。ここで学びを深めるに従い、叡山の名僧と彼の国の高僧たちの考え方が明らかに違うことを知る。道元さまの稜々たる気骨と無妥協の精神は、この国に正師なしと判断。十五歳にして彼の地で「正伝の仏法」を学ぼうと決意。叡山を下って足掛け四年、十八歳

にして、初めて尊敬する師榮西の法嗣、明全に巡り逢う。そしへ仏祖正伝の仏法を主張する禪の流れに触れてゆく。さらに追求せずにはおられない道元さまは、師の明全を促し、宋に渡られたという。ときに一二三三年。弱冠二十三歳、明全四十歳であった。後日、道元さまは『若し無上の仏道を学ばんと欲せば遙かに宋土の知識を訪うべし』と申されたそう。今まで二十三歳といえ、大学を卒業、目標、目的もおぼつかなく、信念も哲学も乏しいばかりでなく、親のスネかじりつつ、職探しに明け暮れる年頃。比べ様もない偉大さ、やっぱ道元さまは偉い御方。

この偉い御方が、港に着いて三カ月間も船にとどまり、過ごした地。慶元府に到着した。道元さまは海から。旅団は空と陸から。時代は逆回りしているように思える。

対岸に停車したバスの中、道元さまのことを

勉強したらしく、地元のガイドさんが指差しながら、位置関係やときの様子をあたかも『道元さま居ますが如く』八〇〇年の空間を埋め、呼び戻して下さる。今でこそ堤防があり、船着場も完備しているが当時は川の中あたりに停泊。小舟に乗り換えてキット泥沼に足を取られながらの上陸であったに違いない。

一路、天童禅寺を目ざす。東に向かうこと三十四キロ、道なき道をどの様に歩き、どれだけの間をかけられたのか、想像もつかないご苦労が観ぜられる。当時宋朝における五山。靈隱、径山、淨慈、育王に囲まれた天童山。その合間を縫う様に歩かれたに違いない。

今でも、天童山への道は砂ほこりを巻き上げひどい道。三十四キロの道程は、難所の難所。バスも左右に大きく弾む。当時なら三倍、おそらく一〇〇キロに及んだのではないかと想像する。





道元禪師像  
平成十一年寓分  
横浜善光寺周款



## 天童禪寺

バスに揺られること五十分。遂に天童禪寺に到着。東京を経てより約三、二〇〇キロの道程。道元さまありがとうございます。思わず合掌。

遂に龍門に達した。胸にこみ上げるものを感じる。

門前は賑わっている。バスから降りると、方丈さまと蒔田僧侶の僧形が珍しいのか、異様なのか、大勢の参拝客や観光客の視線を浴びる。未だ社会主義体制の最中。帰依僧の信仰は芽生えていないらしい。敬意を払う様子は全くない。辺りにいるのは観光客だけでもないらしい、中には香花灯燭を供え敬虔に合掌低頭、熱心には祈りを捧げている人もいる。赤い紙で巻き付けた大きなローソクを、一本二元（三十円）で売ってくれる。祈禱を頼むと、百五十元。ゆるや

かながら体制も個人の信仰に対する自由も少しずつ変化しているのかも知れない。

改革解放後の中国の憲法では、社会主義のへ枠内での宗教活動ならある程度認められているらしい、しかしこの枠内というのが、難しく宗教活動が反体制であるか？否かは、当局だけが知っているというから難しい。

基本的には、先の文革で、宗教は過去の迷信として、厳しく非難された経緯がある。この時、文革の障害となつた従来の伝統と文化遺産、史跡、仏像など宗教関係の宝物などごとく破壊されたという。この思想はいささか、修正されてはいるものの文革当時、毛沢東主席が『宗教は毒薬』宗教は国の発展、改革を妨げ、大きな邪魔になる。第一に物質的進歩への障害、第二は民族を衰退させる、という基本的考え方があった。これは多分に変わっていないと思われる。それがへ枠内であり、わからない状況下

での活動は、想像以上に厳しいものがあるのではないか。

寺院などそこに仕える人々の様子を見ても、観光的要素が強く神聖な道場、犯し難い信仰の場という雰囲気とは違い、私の期待した所とはいささか隔たりがあった。

とにかく、時代とおかれた環境、国の事情など、しっかりと認識すべきであったことは言うまでもない。

中国は歴史的に日本のお手本。何千年という伝統と歴史。儒教や道教。そして仏教によって培われた素晴らしい、民族性と人倫思想がある。これは永久に人々のうづきとなって、受け継がれ、やがていつの時代かにもた再び生かされるものと、期待し信じたいと思う。(いささか筋違いの方向に来てしまいました)こんな時代背景と環境の中で、旅団も一歩一歩、境内を奥深くと進んで行く。あたりは、寺に仕える人々では

ない、なんとも言えぬ、監視の目が気になる。

決して優しいものではない。あるいは気にし過ぎていたのかもしれない。ここまで来たらそんなことはどうでもよい。今この地なら、たとえ繋がれようが、撃たれようが、つまみ出されようが、道元さまの第二の故里。にわか仏弟子を決め込んで、堂々の入場をさせて頂く。

大門の中央に濃いベージュの僧衣を肩から膝に流し、開いた傘を立てたように、合掌し凝視している一人の老僧、還暦はとうに過ぎて、なんとも稜々たる、その風貌。温にして厲し、威あって猛からず、恭しくして安し。まことに自然に具わった威厳。慎み深く、窮屈なところが無い。いかにもゆっくりとして、見るからに親しみを感じる。二時間前から、ここに立ち、今か今かとお待ちになつていたという。昼頃までにはと言った連絡方法が、こんなにも迷惑をかけてしまっている。

しかし、そこまで大事に待って、**〈熱烈歓迎〉**を頂くなど考えてもいなかった。

またそんなはずはないと思っていた。横浜善光寺の存在とは、一体なんなのか？

たかが、横浜善光寺。曹洞宗一万七千カ寺のひとつではないか。

この監院さま、階段を途中までトントンと駆け降りて、真中あたりで「黒田シエンシエイ・黒田先生」と方丈のお手を取り、手厚く出迎え、労をねぎらってくださる。見ていても、遠来の友が訪ねてきて、喜び合っているような、ほのぼのとした光景。

このお方こそ修祥監院。その人である。方丈が中国語で挨拶しているのかと思うほどに、お二人は思い思いの自国語で述べ合っている。

通訳は、先ず不可能、遠くで見えていて不思議はない。完全に通じ合っている。

あれでいいのだ。

早速境内の奥の院、最上層と思われる寺の接賓室にご案内いただく。

随分階段を昇った様に思う。その間、方丈と監院さまの対話が途切れることは無かった。

横浜善光寺育英会を通じて、天童禅寺とのパイプがいかに大きいのか、私の想像をはるかに越えている。心篤いおもてなしは、胸を熱くする。

『朋遠方より来る在り、また楽しからずや……』か、方丈も安堵とよろこびで顔がくつきりと紅潮していた。

これすべて道元さまの御導き、此処に方丈のご信念へ宗祖を通じて**〈釈尊に還れ〉**が息づいている。

### 天童禅寺と道元さま

この古刹天童寺は西晋の永康元年というから、一、七〇〇年の歴史をもつ、かたや横浜善光寺は開創三十年。時間的には気の遠くなるよ

うな隔たり。

しかし流れはひとつ、そこには何の隔たりも無い。いま日本曹洞宗の祖庭にいて、その懐に抱かれているような安らぎ。表現のしようもない。

栄西、雪舟もまたここで参禅したという名刹。

敷地四五、〇〇〇平方メートル。そこに天を突く様な、天王殿、大雄宝殿、法堂が並び、東側に鐘楼や御碑亭など多くの建家が藁いらかを連ねていて登りつめると十八羅漢。道元さまは、ここのお堂を行ったり、来たり、何処に坐わっておいでになったのか、何処で食事をし、何処で経典を開き、何処で寝起きされたのか、廊下も、あの階段も、この土壁まで、手で足でふれられたに違いない。

そんなことに思いを馳せると、ご修行時代のお姿が目のあたりに迫ってくる。

つい宝殿で、土塀に頬をこすりつけ、道元さ

まの声を聞いてみる。ただシーンとして、何も聞こえない。土壁は温かかった。

ここ天童禅寺は五山に囲まれている。春、夏、秋、冬、さぞ四季の移りも、趣があり美しく、道元さまはいつも好時節、極楽浄土であったのでは……

『春は花、夏はほととぎす、秋は月、冬雪さえて冷しかりけり』（傘松道詠）この美しい詩もこんな環境、境遇で、詠われたのではないだろうかなどと思ったりもする。

大本山永平寺は、道元さまが、この寺を模して作られたと本に書いてあった。と言われてみれば、本当によく似ている。後ろに大山をいただし、山の傾斜を最大限利用し、一階のない二階、二階のない三階へと、階段が何処までも続いている。門前の様子まで同じと言ってもいい。永平寺だけではない、宗派かわりなく基本的構造がよく似ている。この形が原型になっ

るのではないかと、不思議に思った。

接賓室で、寺の様子や、道元さまのご活躍、昨今の事情など少しずつ伺い知る事が出来た。やがて監院さまから、なにやら一幅、前住持広修法師さまからの贈り物として、方丈にお渡しになる。法師はすでに光りを失い、全く物を視ることが出来ない。

方丈の、折角のご訪問にも、出迎えてできず、お話することも叶わぬこと、お心添えて手許に。暗黒の世界で託した法師さま心眼の一筆。

方丈はそれを頭上に戴き、全身を震わせ、感泣に咽んでいる。それがどれ程尊いものか方丈は知っている。私にはわからない。

しばらくして、方丈から監院さまに、訪問の主旨など改めて報告。育英会の現状と展望、これを機会にさらに、△宗祖を通じて釈尊に還る△を原点として、二十一世紀に向け一層の精進を誓う、と挨拶。

間もなく、堂の準備も整いたるご案内に、蒔田僧侶の引導で、身も心も威儀も正し、旅団は天王殿に拝登する。堂に至り、方丈より、お参りせし目的と意義、そして宣誓。蒔田僧侶により、宗朝五山に届けと導いて下さる読経に旅団も声高らかに『般若心経』に続いてゆく。

壇上の三世仏は、金色燦々、にこやかに、ほほえみ、よこほま善光寺一同を温かくお見護り、受けてくださっている。旅団の大合唱。全山に木霊する。

感極まり、声も途切れながらの読経、道元さま曰く『仏法に値うこと希なり』今この格言を全身で受けている。ここには、へ大いなる救いとよろこび△が在る。

あらゆる存在がまばゆく、光を放っている。ふと、脳裏に修証議第一章がよぎる。『生を明らかに 死を明らかに 仏家一大事の因縁なり 生死の中に仏あれば生死なし…』人身得ること

難し 仏法 遭うこと希なり 今われら宿善の  
助くるに依りて 己に受け難き人身を受けたる  
のみに非ず 遭い難き仏法に値い奉れり：』私  
は完全にうたれてしまった。

道元さまの声が確かに届いた。届いた様な気がした。大いなる哉、道元さま。

此処は一番天国に近いところ。私はこの地、ここに立つまで人知れず、密かに胸に閉じ込めていた。

二十三年前、幼くして天国に送ってしまった吾がいとし子の遺影。そしてひとつの形見。

いまひとつ、善光寺開基であり、いいつくせぬ精神的、物質的、大恩人村岡満義さまの遺影。奇しくも、同年同時この二つの大事な大事な存在を失ってしまった。あれから早や二十三回忌を迎えるに当たり、どうしても彼の地、否、この地で御仏さまと道元さまに、年忌の報謝と供養。天に召され、救われ、導かれて逝き、いま

は極樂浄土にある二つの魂に改めて感謝の誠を捧げ尽くすこと、ついに叶い唯々感謝。こみ上げるもの押さえることができなかつた。これで二十三年、ずうつとしまい込んで来た荷物を降ろした思いがする。本当にお参りできてよかつた。合掌。

『山に登らば須らく 頂に到るべし 海に入らば 須らく底に到るべし 山に登って到らざらんば 宇宙寛広なること知らず 海に入つて底に到らざらんば 聡明の浅深そしらず 云々：』この境地こそ、此処の頂をきわめたものだけの実感。山に登らば須らく、頂に到るべし。原点に還る尊い体験をする。

黒田武志方丈あればこそその体感。横浜善光寺の偉大な存在。そして方丈の放つ波動。その力をまざまざと見せつけられた思いがする。

## 方丈と発願利生

何故、方丈が曹洞宗の原点、天童禪寺にこだわりつけ、つねに頭上に天童禪寺を戴き敬い慎み、これに服して、おいでなのか。

どうして悉くあらゆるものに対し燃えたぎる情熱を発しておいでなのか。あの徹底した本心真心とほとばしるご至誠はなんなのか。不思議でならなかった。

全て発露の根源は〈利他〉。いつでも、何に対しても私がない。これが全ての基本になっている自分を尽くして、なお尽くしても、「尽くし足りぬ」心が波動となり、振動となって、影響させ周囲を動かしている。此の在り方こそ、方丈の真骨頂。

私などまず自分、自己中心に考えてしまう。時として、人のためにと思っている。しかし身体が〈利己〉、心と裏腹に動いてしまう、だから

ら厄介だ。

方丈は違う。いつも違う。とても同種族とは思えない。あの姿勢こそ、道元さまの教える〈発願利生〉の実現であり、そのための行動になっているのかもしれない。数えきれない発願と利生。すべて並の信念や思いつきで、できるものではない。これ如何に。

天童禪寺大雄宝殿、釈迦牟尼仏に拝し奉ったとき、方丈は、大地に平伏しまさしく、広大無辺宇宙を抱くように、否、抱かれているように、翼如たり、そして洋々と大合掌。

いかにも御仏の故里に遊ぶような、穏やかさの中に一心不乱の〈行〉その一挙手一投足見事な振舞い。実に大らかに蕩々と読経三昧する。これは一朝になせるものではない。専門家の方は、形としてご覧になるかもしれませんが。しかし魂のある・ないはわかります。

〈行〉と〈習〉いで培われた権化。



ついに私は見た。あの不思議の根源を。これこそ、黒田方丈の神髄と見た。

拝登諷経を終え、接賓室のとなり、禪寺食殿にて天童寺心尽くしの精進料理を戴く。まことに絶品の数々、とても私の表現力では説明不可。この精進こそ中国料理の集大成なのかもしれない。まるでベルトコンベアにでも乗せられた様に、次々と持ち運ばれて来る。自然界の全てと云っていい、木の根っこから葉っぱの先まで。

あらゆる薬草と野草等とりませ天童山を食材に、そっくり鍋で煮込んでしまった様な精進料理。なんと奥の深いことか。あまりの豪華さにはじめはおそろるおそろる慎重に箸を運ぶ。場所柄、出来る限り上品に振る舞おうと思っている。また控え目にしようとも思っている。しかし、だんだん私の箸は、意に添わない。この時点では作法など考える余裕すらない。

なんと中国料理の素晴らしいこと。思いやり

に溢れている。誰が、どれだけ取ってもわからない仕組み。やがてクルクル回って、減ったところが余所に行く。中国料理とはそんな料理。実に安心と豊かさを添えて最高のうまさを与えてくれる。後味のいい、忘れ得ぬ料理を堪能し、やがて天童禪寺をあとにする。

僅か八時間の滞在、必死だった。旅団の皆様も、何もかも見逃すまい、聞き逃すまいと各々思いをめぐらし、忘れ得ぬときを過ごす。八時間あれば八時間の足跡。

### 阿育王寺

次行程への道すがら、道元さま、ゆかりの深い育王山阿育王寺に参拝。

道元さまが、慶元府で三カ月間も上陸しないで船で過ごしたときのこと。その船に尋ねて来た一人の老僧。その人、阿育王寺の典座とわかった。道元さま、好機を逸すべからずと典座にお

茶を出したり、引き止めたり、あげくの果ては、いましてご教示に預かりたいと、一泊を促す。しかし、断られる。それでも押しの一歩。典座に『育王山ともあろう名刹、貴僧一人ぐらいおられずとも、典座の代理に事欠く事ありますまい』と詰め寄る。

それでもやっぱりダメはダメ。なおたたみかけるように、いまひとつ『如何なるかな是れ文字、如何なるかな是れ弁道』

典座曰く『一、二、三、四、五』なんとも面白い。道元さまの執着心といおうか、人間らしくて、なんとも親しみを思う。そのときの光景が目に見えかぶ。

道元さまも後に、弁道を了すること、すべて『典座の大恩』とまで言っている。あるいは、中国の第一歩はへ掛錫した天童山ではなく、違う意味で阿育王寺であったかもしれない。天童山より阿育王寺まではバスでおよそ二十分。

参道は大変な賑わいである。大門を入ると有名な舍利宝塔が（四〇〇年）天高くそびえている。

あたりは何かきな臭い。それにしても異常。この寺もまたたくさんさんの監視の目が気になる。消防隊まで境内にいる。事情がわかった、どうも昨夜、境内の建屋が焼失したらしい。道理でまだ燻っている。これは大事件。重要な文化財だったと聞く。

実はここまでのバスの中に天童禅寺の監院さまが同乗していた。車内では、方丈と親しく話しておいでだった。てつきり旅団見送りのため、同乗されたのだと思っていた。ところが実はそうではなかった。旅団を天童山で出迎え、持て成すために火事の見舞いを先送りされていたことがわかった。なんというめぐりあわせか。何千年に一度しかない大事件だったという。何か言いしれぬ因縁めいたものを観じてならなかつ

た。

## 西安

この日午後三時四十分、西安に向かう。西安はその昔へ長安へ、日本に『般若心経』を、もたらしたゆかりの地。機は予定通り離陸。グーツと内陸部に入り込んで行く。道程二、七〇〇キロ。やがて機内アナウンス。このフライト、西安への直行便だが、途中武漢に、臨時着陸する。と陳さんが通訳する。理由は、「武漢に行きたい人がいるので、途中降ろし、また乗る人があったら拾ってあげます」と言っているらしい。西安には一時間三十分遅れとのお断り。聞いて冗談だと思った。「地方ではよくあることです、気にしないで下さい。」と陳さんが言う。どうでしょう、この芸当。飛び立つ前ならわかる。しかし、飛び立って客をシートに縛りつけてから、一方的通告、航空会社の都合とはいえ、考えら

れない事態。しかし誰一人、気にしている様子もない。中国の人たちは偉い。苦情をいうものもない。ただどんな事態にも、ハイ、ハイ、ハイ、なのか。機体の異常ならとも角余程な理由がない限り日本では許されないことも中国では許される。

民族が異なれば、認識も感覚も違ってくるのは当たり前だとは思う。また価値観まで違ってくるのも当然にしても、常識は通用しないのか、すこし腹が立つてくる。私は怒鳴ってみた。「そんな馬鹿な、田舎のバスじゃあるまいし、客をなんと心得ている、勝手もいい加減にせい」と、吠え立ててみる。通ずる筈もない。

スチュワードースに、日本語が通じたか、ニッコリ笑って、請 チーンと、水を持って来てくれた。さすが水の差し方がうまい。

後方より方丈が、「東郷さん、なに暴れているんですか？ここは中国、余所の国。名に恥じぬ



よう郷に従えというではありませんか。何も急ぐ旅ではありませんヨ」どうぞどうぞと宥めてくださる。

まあそれもそうかと諦める。

さすが大陸、お国柄。日本の二十六倍もある国だから、何があっても、起こっても分かりやしないのだ。日本から勝手に来て、中国の伝統と歴史にケチつける。そして、社会主義国家だということも忘れてしまう。しかし、どう逆らってみても、通用するものではない。通用させようとするとところに、所詮ムリがある。

考えてみれば、報謝の旅。先ほどまで御仏の前で涙して人間性に少しめじめ、あれから数時間、まだ目は潤んでいるはず。ところがどうでしょう。もう合点がいかななどと腹を立てている。

よく考えてみると、行けないはずの武漢にもおりました。一時間半も余分に空の旅が出来た。

喜ぶお客さんが乗り降りした。いいことづくめではないか。

私の修行や改心など口先だけ、人生、ブツブツ言うて事が好転するなら言うてもいい。言うても叶わぬと思つたら、やめた方がいいにきまつている。

機は再び西安に。いよいよ般若心経の故郷。ここらあたりで今一度心の立て替えた。急にうれしくなつて来た。程なく西安に着陸する。ところがにわか機内がざわめき歓声となる。なにやら拍手、喝采。それにしても、異様なはしやぎよう。聞いて驚く、なんと西安は雨だという。

なぜ雨に拍手喝采なのか。実に不思議な光景。聞けば、待ちに待った天の恵みに遭遇したらしい。一月と二月は全くなし、三月中旬に僅かな降雨量。そして、二度目の雨。そんな中、西安に歓喜の第一歩を印す。濡れるかと思えば、そ

うでもないシト、シトという程度、それでも雨。人ごとながらよかった。人間少し心を入れ替えると奇跡に出逢う。観光案内に西安は霧と砂嵐の街。と紹介されている。

先ず青空を見ることはない、遠くを見ることもない。ここ西安のためにと、みんなわざわざ防塵マスクを携帯して来た。ところが、明けて翌朝。西安の空はブルーに染まっている。風も砂塵もなく、遠くの山々がくつきり見える。ガイドさんが、今年最高の一日だと言ってくれる。

### 般若心経の故里

昨夜の雨で、すっかり洗われた西安。道元さまからの最高のプレゼント。早速、般若の里、般若心経の原点、大雁塔に向かう。

『般若心経』というお経ほど簡単で、親しみ易いお経はまずない。これは、宗派を問わず誠に便利な共通語。どんな場合でも、どんな場所

でも、これを知ってさえいれば大概事足りる。これは一体何故なのか。誰が作って、誰が日本人持ち込んで来たのか、敢えて知る必要もなかった。

これまで何度か偉い先生方に、お話を伺った事はある。しかし大概、その先生だけが解っていて、難しくお話くださるから、心に残らないでいた。或いは方丈みたいに、食うや食わず極貧の中で行脚托鉢でもしたら『ギャティギヤてい、ハラソウギヤあてい』といくらかでも理解できていたかも知れない。しかし幸いにして、そんな機会には恵まれなかった。

このお経、なんとも詩的でリズムがあり、流れがいい。覚え易く、少々間違っても、どこからでも、何処へでも入れる仕組みになっている。また忘れてしまい、同じ処を繰り返しているといつの間にか終着駅についてしまう。のり継ぎ乗り換えも実にスムーズ、限りなくエンドレス

なのである。

それでいて、いつ間にか心が和んでくるから不思議だ。

先ず眠れぬ夜など、私はながーい間習慣的に睡眠薬代りに使っている。するといつの間にか深い眠りについてしまう。翌日どこまで唱えたか、何度唱えたか覚えていない。般若心経とはそんな魅力を秘めている。

さて一体この魔経、どこから誰がいつ?いよいよその問題解決をしてくれる。

西安への機中方丈に聞いてみる。「だから、東郷さん西安なんですよ。大雁塔なんですよ、玄奘法師さまなんですよ。」全く意味不明、何を言っているのかわかりやしない。

これも、方丈一人わかっているだけ。

仕方なく相槌を打った。そうなんですネエー。孫悟空が八戒と沙悟浄たちと妖魔を追っ払って旅した、あの物語でしょう。知っていますヨ。

方丈が、それじゃ三蔵法師さまも玄奘法師さまも般若心経も出て来ないじゃありませんか。

此処、西安は、西遊記の起点。あの三蔵玄奘法師さまが主役。

三匹の由来に神通力を与え、インドに旅をする。その往き来、艱難苦勞して百魔を征服、ついに釈迦様の仏典を持ち帰る。これが般若心経の原点です。

三蔵法師二十二歳で得度。中国仏教の教典を学ぶうち、仏教哲理に疑問を抱く。なんとかその疑問を解きたいと念願。そのためには仏教の原点お釈迦様のモトに行く。そして仏道を極めたいと決意する。

しかし当時シルクロードは死のロード。ために国からの許可がおりない。

そんなことで諦める玄奘ではない。ついに国禁を犯し、長安を離れ西国浄土インドを目指す。玄奘二十七歳。なぜか道元さまを思い出す、状

況がダブツてくる。

道元さまも、また命を賭し天童山を目ざしている。一方玄奘法師は一年がかりで、一二、五〇〇キロを歩き通し目的地インドに着く。

どうでもいいことだが、仮に三六五日それを配分すると、一日三四キロチョットずつを走破したことになる。

当時の状況からは考えられない速さ。玄奘法師は、道なき道をただひたすら西方に向かった。

『空には一飛鳥なく、地には一走獸なし、人骨獸骨類を持って行路の標となすのみ』といった法師の文字をみれば、どれ程過酷なものであったか想像がつく。

インドに着いた玄奘法師は、お釈迦様の足跡をたどりながら、膨大な経典を集める。それを携え、また来た道を引き返す。

ときすでに四十三歳。帰国の道程は往路の四倍もかかったという。この道々の出来事が西遊

記。物語は面白い。三蔵法師は思いやりに溢れ、旅を通して人間が犯しやすい邪心、良心、悪行、善行が隈無く描かれている。

さて、難儀して持ち帰った梵語経典は、七五部、一三一五卷。帰国してからは漢訳に没頭。

その集大成が『大般若経』であり、それをさらに凝縮、僅か二六二文字にまとめたのが『般若心経』だという。

この二六二文字、この中には天地の真理と人間最高の知恵、仏智について、その神髄をまことに簡潔に教えてあるのだという。

能に般若の面あり、お酒を般若湯といい、救い船を般若の船ともいう。多分、夫々に深い意味があつて、この語も生まれているに違いない。明らかに『般若心経』が、原点になっていることは間違いない。出来たらこの執筆で、般若心経とはこれ也。と解いてみたいと思つたりもする。しかし簡単にはできない。



悲しい哉、理解し表現する能力がない。本屋に行けば、関係書だけでも山と積まれている。

同じ内容であるはずはない。その人その人の知恵の分量と能力に応じ、またその年代において、どの様にも解することの出来る古典は化物なのかもしれない。

深く学び、理解し、私を無くし、行じてこそ、般若心経の原点神髄に辿り着くのかも知れない。大般若経を通じての『般若心経』でなければ、先ず本当の理解には至らないだろう。此処は専門家にまかせよう。当分、お経読みのお経しらずで行くよりほかない。生きている間は、もちろんこの程度。先々土の中に入ってからユックリ解いてみたい。

話は前後した。三蔵玄奘法師はついに、凡語から漢語（今の日本の経典はおそらくこの漢語訳がモトになっている）に完訳した。

## 大雁塔

漢語経典を、なんとか保存したいと願う玄奘法師。時の高宗がこれを聞き入れ、玄奘自身に納経塔をつくらせた。これが〈大雁塔〉。当時は五層であつたらしい。のち地震、戦乱で壊れた塔を修理したり建て増しにより十層になつたり、また七層になつたり。現在は七層六四メートルという高さだ。

旅団は大慈恩寺に参拝後、大雁塔を三十分で登破するようにとのこと。急ぐ旅だから仕方がない。ヨーイドン、なんとか急傾斜の階段を、般若心経を唱えながら登ってみた。三層まで登り、息も絶え絶え、途中で登頂を断念。しつかりと理由をみつけた。最頂が『大般若経』三層目は『般若心経』なのだからそのまま降りてしまった。

決して残された時間がない訳ではなかった。

三層あたりで玄奘さまのことをチョットでも思い起せば或いは踏ん張れたかも知れない。それにしても、もう一息だったのに惜しかった。

これこそ現代に生きる、いい加減な人間の形骸、全く口先だけ。道に近づいても道を行ずることができない。やっただつもあり、行っただつもあり、わかつたつもあり、つもりつもりって一生恥じのかき通し。

あげくの果ては、登るに十分な時間がなかつたからとか、疲れていたから、階段が急すぎたから等、人やものの所為にしてしまう。

問題やその原因が自分自身にあると気づくのは、いつのことなのか？

論語にあった。『たとえば 山を偽るがごとし未だ いっきを為さずして 止むは吾が止むなり。たとえば地を平らかにするが如し いっきを覆すと雖も 進むは 吾が行くなり。』人間なにをするでも、要するに、へ退くも・進むも自

分自身の意志によるのであって、けっして人によるものでない。また、書経にも『山をつくること、九仞の功を、いっきに欠く』と同じことを言っている。

学びを深め、徳を高くする工夫。すべて諸々は自分自身の責任とすべきことと教えている。とにかく、なにごととも人のせいにするな、自分のせいにしろということ。大雁塔の参拝終了。

西安ならではの、秦の始皇帝陵、兵馬俑坑など見学。また初めてショッピングの時間をいただいた。特に買いたいものはない。しかしバスが自動的に買いたくなるような、政府のショッピングセンターに吸い込まれるように横付けをした。見ているうちに買いたいものはあった。しかし何もかもあるものは、世界にひとつだけ。中国ではここだけしかないの連発を聞いてるうち、本物、偽物がわからなくなった。他の場所で買ったものは偽物であり、高い買物になる

と教えてくれる。聞いているうち頭がおかしくなる。したがって買いたくとも買えない。結局価値があるのかなのか？皆目わからずに目の保養に終わる。以来、帰国の日まで、何ひとつ買うことが出来ない。それでも何か土産物と思いい、ザーサイをデパートで十個、手にして帰国した。

女房が、「お父さん、角のスーパーに同じものがある」と教えてくれた。泣面に峰でした。それにしても折角行ったんだから、水晶玉の一個ぐらい持って帰るべきでした。

私のショッピングはショッピングというより、ショッピングでした。

## 悠久

西安は幾多の王朝の栄枯衰退。歴史的にはシルクロードの出発点。ここより東西に絹を運んだのが語源、絹の道。市の中心部を取り囲む城

壁も、明代のものだという。二千年前後の史跡。中国悠久の流れは止まっていなかった。遺跡というより奇跡。唯々、啞然とする。スケールが大きくて表現の仕様もない。それでも、ほんの一部だというから声も出ない。西暦前二千年〜四千年と聞くだけで、気の遠くなるような、悠久の大地。そこにとり残された遺跡。中国の歴史で、戦国、秦代、前漢、後漢とくれば、キリスト以前のこと。

日本では縄文から弥生といった石器時代。石おのや矢じりを持って、狩猟に明け暮れ、横穴か竪穴に生活していたと、中学校の歴史で学んだ記憶は間違いだろうか。日本でも最近あちこちで発掘しては、最古、最古と古さを競っている。

しかし、目を見張るような遺跡など出て来ない。中国にこれ程の文明、文化があったとするなら、日本は一番近い国、何千年も置かれるは

ずがない。本当に日本の歴史に間違いはないのか?と疑ってみたりする。私の表現について専門家の方はさぞ滑稽に思い笑っておいでかも知れない、歴史を知らない幼稚な疑問。もしかしたら、日本のどこかに、忽然と埋もれた古代の遺跡が発掘されるのではないかなど、あまりに大きなギャップに本心戸惑ってしまっている。

ここに立ち「悠久」ということばをはじめて、理解し実感した。人間の命、一人の一生なんて、なんととはかなく短いものかと。この尺度で測るなら、たとえ百寿を全うしたとしても、どうにもならない、アツと声も出ない程の短さ。この短い命をつなぎ継いで、さまざまな生活や文化、歴史や伝統が培われ築かれて来たという感を強くした。これ迄考えもしなかった角度から、悠久杭をグサツと打ち込まれた。

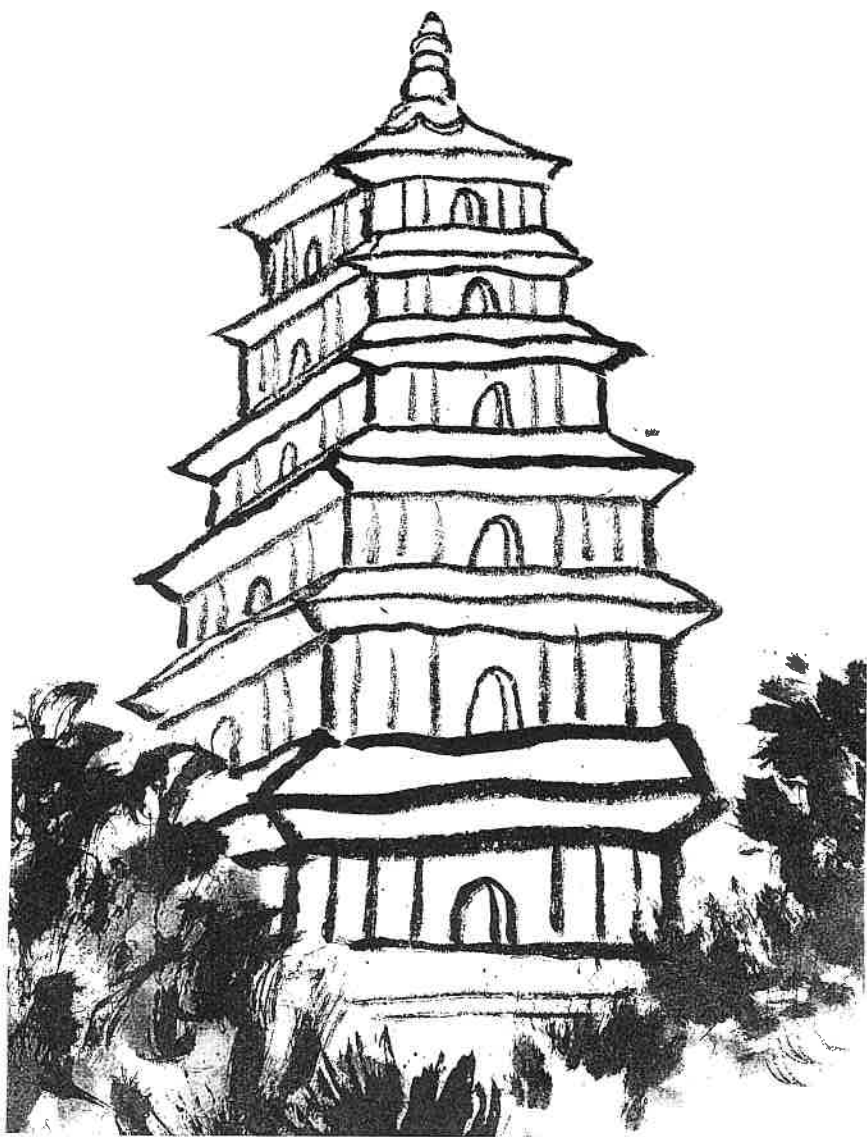
仕事の関係で、世界各地を歩き、その国のことはなんでも知っている、知っていると思ひ込

んでいた。実は幻。本当は何も知らなかった。あつてはならない錯覚に、ようやく気づいた思いがする。

インド、中東、エジプト、アフリカ、ヨーロッパ、南米あたりなら、これ程のショックもなかったと思う。だが隣の国、想像を絶した「悠久の遺跡」。これはどう収めて良いのか戸惑うばかりである。

旧約聖書の中に、『陽はのぼり 陽は沈む またもとのところに戻って行く ひとつの時代は去り 次の時代が来る しかし地はいつまでも変わらない 昔あつたことは、これからまた起こる 陽のもとに 新しいものは 何一つない』と謳いあげている。

いま真にこの言葉が解つた様な気がする。美しい詩だと思ふ程度だったが、これは西安のショック以来、脳裏から離れない。これこそは宇宙自然の摂理、方程式を教えたものと思う。天



地の運行と同じく、人の一生もまた生ずる者、逝く者。自然界もまた、春去つて夏来り、秋去つて冬来る。あたかも水の流れのように、無限に持続し止むことがない。孔子も『川のほとりに在りて曰く、逝く者は斯くの如きか、中夜をわかつたず』といっている。私もまた、悠久の流れの一滴。はるか東の空に思いを馳せている。土地の人にどこから来たか？と問われればきつと、東の邦。日本国、縄文県、弥生郡、横穴町字竪穴一五―三四番地。と答えたに違いない。さて、ここまで書き、一体何を書いてきたのか、何を言いたいのか、まことに思いつくまま、方向に狂いが生じています。何でも書けと言われて、本当にその通りになってしまっている。閉じようもありません。今少し、取り留めもなく続けて参ります。さて、とにかく、今の中国、世界人口の二五％だということ、食糧事情から人口の抑制という、一人っ子政策は辛い政策。

やはり自然ではない。胸の痛みを感じる。それでも世界の二五％の人達が中国語を使っていることになる。

大変なこと、いま迄こんな認識もつたことはない。毎日二十七億食余りを中国の人達だけで、とっているとなれば、やはり食糧の心配が先に立つ。土地は広大でも不毛の地はあまりにも広い。こんな国が、仮に、日本やアメリカの様に自由奔放にしたら国が治められるのか、日本のように資源を浪費し、消費に明け暮れるようになったとしたら、食糧は、エネルギーは、一体地球環境はどうなるのか？

先の世界環境会議で、先進国と後進国の間、その考え方に大きな違いがあるのは当然にしても、地球環境の保護という見地からは共有しない訳にはいかない。国の間の不平等感を埋め合わせることは、至難の技。先進国が先に地球を汚し、後進国が汚して悪いという法はない。仮

に、自国の都合と今の豊かき、幸せを棚上げして考えるなら、やはり空恐しい事態を想像しない訳にはいかない。

西安の史跡を歩きながら、今日の平和もつかの間なのかもしれないとわけわからぬ不安を覚えた。過去に人類が残した遺跡は、一体なんなのか、なにを語っているのか、考えさせられる。果たしてこの二十世紀我々は二千年後どんな形で残せるのか。空のブルーとは反対にグレーの一日だった。

## 北 京

この旅もいよいよ納めの地。中国には北京あり、南京あり、西京あり、飛んで東の海に東京あり。やはりアジアはひとつか。

あと二つ残した目的を果たす事により、旅団も大願成就、そしてこの旅は終わる。納めは首都北京である。

北京もまた栄枯衰退、皇帝の王宮を中心に繁栄する。史跡もそのままに残されている。飛行機は予定通り。さすが中国一の大空港、混雑している。ゲートを出るまで優に五十分を要している。これが中国と納得できるようになっていた。

旅団の添乗員は、日本から一人。上海から一人、都合二人が北京まで添乗してくれた。それに各都市で一人ないし二人が土地のスペシャリストとしてバスとタクシーで添乗して来る。従って不自由は全くない。至れり尽せりのお世話を頂く。

添乗員の方には、最高に恵まれたと思う。先ず上海から超姑娘が添乗した。北京まで献身的に尽くしてくれ、旅団は嫁にしたいやら、娘にしたい程で、まことに気立てのいいお嬢さんなのである。男性軍は夫々の思惑の中で、なんとかこの姑娘、葉さんに、世話を頼んだり用事を

お願いしたり、特別自分だけに好意を示して頂きたいと思つている。しかしそうもいかない。旅団の男性軍は、六十年もしぶとく生き抜いてきた勇士ばかり、心とは裏腹に誰ひとりそんな素振りも見せない。そして無視を氣どつている。僧侶が二人もいては堅苦しくていけない。暗黙の闘いは、結局北京のゲートを後にするまで空振りに終わつてしまった。私は思う、姑娘よ、あなただけは我的。你だけは、世界一幸せになつて欲しいとネ。請。

北京から乗り込んだスペシャリスト。いつものように、自己紹介をしている。名前は孫という。運転手も孫といつている。背丈一八五センチ、色黒で壯観な男ぶり、見るからに、社会主義国家の代表選手に見える。目の輝きから、並の者ではない。或いは正規の黨員かもしれぬ。私は悩んでしまった。これまで、添乗員にはあれこれ執拗に質問して来ただけに、北京でそれ

が出来なくなつても困る。

私は冒頭に聞いてみた。「オイ孫さん、あなたはしっかりとした政府の黨員ですか。」彼は言う、「そう見えますか。」「ハイ、見える」と答えてみた。彼は、はじめてニッコリ笑い残念ながら黨員ではありません。

黨員だつたらこのバスには乗りません。エリートとして国家の仕事に従事します。と答えてくれた。納得して安心した。私はあなたを見た時黨員ではないかと疑い、名前を聞いて損したと思つた。運転手さんの名前も孫さん。これは大変だ。大損したと思つたからと言つてやつた。なにも私は思想に固まつた人を差別している訳ではない、しかし、生まれつきどうにも肌合わないと思つている、それだけのこと。

私がキラいなものは、同じく相手も私を嫌いになるに違いない。

そんな間柄で行く道を同じくしたら、限られ



た人生の時間がムダになる。

これだから歴史の中で、また現実にはイデオロギーの絡んだ紛争は、永久に解決しないし援け合う間柄にはなり得ない。

一部の思想で、人の自由、信仰の自由まで奪ってしまふような思想だとするならば、私の正義からはやはり許せない。ただ厄介なのは向こうも正しい正義に立脚しているから解決しない。人間の全ての問題、唾み合いも戦争も、お互い信ずる正義で戦うから争いは永久に無くならない。

### 日中友好の足跡と広済寺

ガイドをいただきながら、空港よりバスで直行。すでに亡き、横浜善光寺初代総代により設計建立された。日中友好医院を訪ねる。都心には珍しく、駐車場が広い、先見の明。緑に囲まれ、病院らしい落ち着きと、環境が整っている。

建物を見るだけで、伊藤先生の思想、お人柄、人となりがかがえる。

粉骨碎身、心血をそそいだ日中友好の礎、そこに立つだけで、先生の偉大さ、ご立派さがうかがわれてならない。早速、医院長代理が駆け寄り、手厚い出迎えを受ける。

働く医者も、設備も北京の最高のレベル。外来患者も毎日二千人を超えると説明があった。近代医療五〇％、漢方医療五〇％、西洋医学と東洋医学の併用。

病気の根本的原因と治療には中国独特の根源的治療医学の分野まで踏み込んでいる。伊藤先生の御遺志である日中友好はもとより世のため人のため脈々と受け継がれ発展している。偉大な貢献の実態に触れ敬服する。

院内はゆつたりと、あらゆる設備が機能的に配せられ、近代性と中国古来の美しさを合わせ持ち、一見ホテルではないかと錯覚する。医

院内を案内する先生から特別な関係者だけという、漢方薬草の貯蔵室まで見学が許され、東洋医学、漢方治療の神髄に触れたような思いがする。

伊藤先生の令夫人も建設中に何度か訪問された様子であった。しかし完成後は初めてとか、ご覧になって感銘一入であったことと思う。ここに生き続ける偉大な足跡。横浜善光寺でのご活躍と合わせ見ながら、平成に生きたヘジョン万次郎の権化なのかも知れないとそんな気がした。

北京の観光ガイドブックに、『北京で病気になるほどに、まこと立派なホスピタル。』と書いてあったら迷わず日中友好医院へ……と書いてあるほどに、まこと立派なホスピタル。

さて次行程、目指すは北京の名刹、弘慈広済寺。中国仏教協会本部にもなっている。北京では最重要特別地域の一角、故宮のすぐ近く政府要人の居住地沿い。

それだけでも名刹の役割と位置付けが歴然としている。

十三世紀の金朝末期に建立され、西劉村寺といった。のち弘慈広済寺と改められる。

日中戦争、内戦、革命騒動で大きな損害を受けるも、由緒ある寺院として立派に修復、復元され今に至っている。

日本仏教協会関係者は無論学者、専門家に至るまで、素通り出来ない重要な寺。また世界の仏教関係者も必ず訪ねるところと聞いて納得した。横浜善光寺留学僧育英会の中国関係窓口にもなっている。大寺院と思いきや、見過ごしてしまう程、質素でこじんまりとしている。これまでの寺院は、その規模と壮大きさに圧倒され続けて来た、それだけに拍子抜けしてしまった。この規模の寺が、何故名刹なのか、大きさも横浜善光寺とさして変わらない。しかしやっっていることは中国仏教興隆の拠点だというから驚

く。他の寺院と違うところがはつきりとしてきた。横浜善光寺と同じく中身が濃い。嬉しくなりました。大ききや、衣の色だけで、モノや人の判断をはいけません。訪ねるに、観光、物見遊山の参拝者はなく、真に救いを求め、安らぎを願う方々のお寺であることが、中国寺院の新しい発見につながった。

私が庭を散策していると、参拝に来たらしい中年の男が何やら話しかけて来た。

私も積極的に挨拶し、流暢な日本語で話してみた。ところが男も負けてはいない実に中国語がうまい。やがてポケットからタバコを取り出し、私に吸えという。私は思い切って三本引き抜いてやった。まさか三本も取られるとは思っていなかったのか、男は少し顔色を変えた。しかしまたニッコリ顔で話が続いていた。言っていることはまったく判らない。私もポケットから日本のマイルドセブンをとり出し箱ごと男の

ポケットにねじ込んでやった。そしたら「謝、謝、ドウイグチー」といいながら、握手まで求められ周囲から拍手喝采、いい気分でした。見事日中友好親善をはたした気分。

さて広済寺でも、方丈より訪問の事情や、育英会の現状と将来についてさらに詳しく報告、そして一層の日中友好交流について意見交換をする。

### 追悼供養

いよいよ最終目的。成寿山横浜善光寺開基、故村岡満義氏の二十三回忌法要と、初代総代故伊藤喜三郎氏の追悼供養を執り行う。

方丈より意義と広済寺との関わり、そして二人の法要を同時に執り行う事のできるご縁と奇跡は、まことに『宗祖 道元禅師さまの御導き お慈悲』以外なものでもない涙ながらに、論語の一節に『終わりを慎しみ 遠きを追

えば 人の徳 厚きに帰す』道元さまの『身を  
けずり 人に尽くさん スリコギの その味知  
れる 人ぞ尊し』。

横濱善光寺の信徒のご多幸、ご隆昌を第一に、  
開基さまと初代総代に対し、心からの報謝を奉  
ります。またこの旅団が障りなく、無事に帰国  
出来ることを合わせて祈願する。

宗祖第二の故郷で『般若心経』の読経。

旅団の最終にふさわしく、蒔田僧侶の声も、  
水晶のようにすきとおり、朗々と見事な伴奏。

これまでとは違つてとても清々しく、壮快な気  
分。晴れやかに穏やかに読経できたこと、ひと  
り私ばかりではなかつたと思う。

### 旅行・雑談・頭は使うもの

少し余談になります。旅先での色々、先にも  
少しふれている。各地、何処に行つても変わら  
ないのは、すさまじいばかりの物売り、押し売

り合戦。

正直、ほとほとうんざりする。何処でもユツ  
クリ座る場所がない。歩く道はふさがれ、逃げ  
道は閉ざされる。落ち着くことが出来ない。寺  
院といえども例外ではない。

ただ天童禅寺の食堂だけは全くなかつた。世  
界中どの国に行つても、大なり小なり同じ光  
景は見られる。だから敢えて取り上げる様なこ  
とでは無いかも知れない。

しかし少し書きたくなる。問題は程度。場所  
とタイミングがある様に思う。どんな一流の食  
堂でも、サービスはそつちのけ店ぐるみで商売  
がはじまる。食べさせるより、売ることが優先  
する。

考え様では、いながらにして買物出来る。  
その点から言えば一種のサービスかも知れな  
い。くつろぎ、ゆつくり話しながら食べるとい  
うことはとても出来ない、チョット油断すると、



もう手がつけられない。大概根負けしてしまう。結局買わない訳にはいかなくなる。観光客だから一見客という見方もあるのかもしれない。自分たちの店だからにしても悪いとは言わぬ、しかし一部の人達のために、折角いい思い出が帳消しにされたことも少なくはなかった。そのため『中国の人達は』と、言ってしまうのはやはり辛い。いい意味では、このバイタリテイこそ、世界中を席卷し、成功している華僑の人達に通じているのかも知れない。この逞しい底力はとうてい日本人の及ぶものではない、何千年という歴史と伝統の差かもしれないと思ったりもする。これから先、地球上に何か起きてても、中国の人達だけは生き残れると思った。

さて、こんな状況下を歩いて来て、決してイヤな顔をしたくない二人の異星人、何とわが旅団にいた。方丈と蒔田僧侶である。実に不思議。この方々に或るとき尋ねてみた。

答えは簡単、「持てる者は、必ず慳貪になる。失いたくないから心配が生まれる。また周囲のことが気になる。自慢ではないが、私は初めから無い。無いから使う心配がない、従って失う事も無い。どう安心でしょう」。……とおっしゃる。合点はいかないが、何となく説得力がある。蒔田僧侶に問うても、多分、同じ禅問答になる。自分が恥をかくだだけだ。ところがである。そんな方丈がどこに行っても必ず、いの一番誰よりも先になにか買い求め、それを両手に見せびらかしながら歩いている。私は買わされてはいけないと終始逃げ回り、断り続けることにひたすら専念する。ところが逃げてても逃げてても追い回され、売り子と同じように落ち着かない。

方丈は始めに紋どころあり。これが目にはいらぬかという具合。初めに何かひとつ手にするから、従って追い回される事が殆どない。

これは無い者の強味ではなく使う頭の知恵の

分量。旅行中、私は拒否症に落ちて、それすらもできないでいた。だからと言ってなにも欲しくないものまで手にする程の勇氣もない。方丈はそんなことはどうでもよい、物の価値判断ではなく手当たり次第といった方がいい。私はそれを見て、初めは笑っていた。しかし後半になりやつと気づいた。頭も金も使いよう、チョツトの事で自分の安全とゆとりをもつことができ。方丈はどんな処でも、たとえ道端でも歩きながら、簡単に買ってしまふ。私から見れば買ってあげない方がいいと思う場合がある。だから言ってみた。「方丈、仕様もない、安もの買いはいかが」かと。

大事な事は断る勇氣。与えない勇氣も必要なのではありませんか。さらに大事な事は、彼らにいまの境地から早く抜け出る勇氣を与えることこそ大事であり、それが方丈の役割、真の慈悲というものではないでしょうか、どうでしょう。

う。と詰め寄つてみた。気持ちのいいものです。ところが方丈は……ハアハアハア。

「トーゴさん教えてくれてありがとう、頭がいいよ、おっしゃる通りです。実にその通り。」なぜか方丈、素直に認め過ぎる。

さてトーゴさんおっしゃる通りに「慈悲」へおもしろいやりへの使いわけはむづかしいネエー、あなたの言うそのへ使い分けが美しく出来るようになったら、修行はおしまい。『与えるも慈悲、与えないも慈悲』。さあその使い分けどうします。方丈、なんと「慈悲の仕訳」と来た。どこですり替わつたのか、態勢が逆転しているように思う。へすべては人を救うというのが基本でありその標準から発している。

言われてみると私には標準がない。自分の好き、嫌いで決めている。結局自分が何に言うたのか分からなくなりました。

方丈のご性格は、どんな意見、忠告でも必ず

喜んで聞く、また言ってくれる人に感謝し礼をいう。しかしひとつも直さない。いつでも自分の信念で道を歩いて行く。

いまひとつ、方丈は行く先々で、あまり豊かでない人達を目にしては、すぐ思い詰めたように悩む。どうする、どうしよう、あの人達を、なんとか豊かに幸せにしたい。どうしたら救えるのか、方法はないか、自問自答しておられる。二度三度ではない、四六時中。切羽詰まったように苦慮する。歩きながらへおもいやり〜が生まれる。なんとも托鉢乞食の本心真心は考え、悩む次元が違う。

菩提心というか、それが意識しなくともいつでも、肝に座っている。

トーゴさん「どうする」と私にも向かって来る。私に言われてもどうしようもない。「それは方丈の仕事、お好きなようにして下さい。あの人達はあれで結構幸せなんですよ」と言っ

まう。本心私の知ったことではないのです。

方丈、チョット待って下さい。ここは中国、外国です。すべては『治外法権』そんなことは、こちらの為政者、専門家にまかせましょう。

それより方丈、まだ「私も豊かではありません、決して救われておりません。先ず順番から言っ

て私が先です。」と答えることに終始した。しかしどう転んでも私の知恵と屁理屈では通じない。

方丈の菩提心、まこと湯水のごとく、いつでも処かまわずどんどん湧き出てくる。『尚、廻らして成仏得度回向するなり』か、参った。

三十周年記念訪中も、全ての目的を、予定通り達成した。旅行中、トラブル、ミスも全くない。また誰ひとり、病气や怪我もない。行く先々で、色々な奇跡や偶然に出逢った。

雨を乞う街には雨をもたらせ、雨を喜ばぬ旅団の道のりには曇りもなく、風も黄砂もなく、



寒ささえなかつた。

すべて『たまたま偶然にうまく運んだ』と言った方が良いのかもしれない。それでも何故? どうしてを言われても私にはわかりません。

しかし何か言い知れぬ、へ全ては天意というか、何か「未知の力」によって導かれたような気持ちを否定することも出来ない。

そんな旅、そんな訪中古寺巡礼の旅であった。

### 旅行後記

北京を案内してくれた例のガイド孫さん、やはり終始、愛想はよくなかつた。

好きになれと言つても、なんとなく好きになれないタイプ、と言つた方が適当かも知れない。何とかジョークを言おうとしてもたつき、ジョークにもならない。チョットしたユーモアも通じない。いつもきまりわるそうにしていた。しかし一生懸命が伝わってくる。彼の人は時間

と共に旅団に溶け込み、咬めば咬む程に味が出て来た。私はまるで反対、愛想は良いが咬んでも、味が出ない。

いよいよ帰国寸前、北京空港に間もなく三十分というバスの中。突然、彼はマイクを握りしめ、やにわに演説を始めた。いよいよ本性を剥き出して来たと思つた。

「私、孫は縁あつて、日本横浜善光寺古寺巡礼の旅に二泊三日、寝食を共にした。これは私にとって「運命的な出逢い」。昨日、広済寺ではじめて信仰の尊き人間の崇高さを発見し、夕べは眠れない思ひでした。これまで数えきれない外国人、特に日本人をガイドして来た。しかし、ついに「人間にふれる」ことはなかつた。私は日本に行ったことはありません。私は戦争を知りません。従つて、日本の文化、歴史、生活、習慣は、本を読み人に聞くだけで、充分わかりません。」

旅行期間中ご覧いただきました様に、中国は決して豊かではありません。しかし歴史と伝統は、世界のどこにも負けないものを持っています。これは過去のものであって、中国のいまの私達に直接豊かさをもたらすものでないこと、誰でも知っています。

でもすべて尊い祖先なのです。だから大事に取り扱い、大事に保存し、敬意を払わねばならないのです。それが私達の在り方だと思つていきます。

いま私は、自分の言葉で自分の考え、思つていることを話しております。これは全く私の自由意志なのです。こんなことは初めてなんです。どうしても話さない訳にはかないのです。

許して下さい。

いま中国は発展途上にあります。人口十二億五千万人。膨大な人達で溢れかえっております。四千年〜五千年の歴史と伝統も、また特有の歴

史、文化、生活、習慣、そして中国人の持つ本来の問題や習慣、そして必ずしも自分の自由意志ではない「社会主義」という習慣を、国の事情により持たされていることを知っていただきたいのです。

政治は社会主義、経済は自由主義、市場経済の過度期的最中で、混乱しながらも何とか発展しようとしているのが現状です。或る人達によれば、中国という国は、世界の常識に外れ、特々な国という評価があることも知っています。全ては国の「計画配分」という制度で割り振りされているから、言われているのかもしれない。しかしこれも、自由になりすぎたら、一カ所に人々が集まり過ぎて、国のバランスがとれなくなることも分かつて欲しいのです。

中国では個人の自由というものは限られており、とても少ないのです。

さすがにすごいと本の皆様は「安全と、水と、

自由』には、金がかからないと思っておいでだ  
そうですが、中国は違います。持てる金と労力  
をいくらつぎ込んでも、足りないのが現状なの  
です。だから日本の国や自分の自由、自分の豊  
かさを標準にして、中国と比べないで欲しいの  
です。あらゆる面で違和感を感じられることと  
思います。

道路事情、衛生事情、物販事情など、この全  
ては、中国人の平均的、生活水準が低い事に起  
因しています。この印象を日本に持って帰って  
欲しくないのです。

事実があまりにも厳しいからです。私は皆さ  
まが漠然と中国の旅をされなかつたこと、よく  
知っています。

私は中国人と日本人の共通点(家を大事にし、  
親・祖先を敬う)そして(長幼の序)に基づい  
た価値観を共有できる民族だと認識します。だ  
から僅かの間でも、価値観の共有が確認できれ

ば、心から尊敬し信頼し合うことができると思  
っています。

中国は何処に行っても、人人人。自転車を黙々  
とこぎ続ける人達。道路標識はあつても、ない  
と同じ。私達のバスに向かって、猛然と立ちは  
だかる人たち。

道路は人のものであつて、自動車の走る所有  
物ではないのです。だから、こんな状況の中で  
バスを運転できる運転手は、標識のない空を飛  
ぶパイロットよりはるかに難しくエリートなの  
です。これからの中国は今のままではありませ  
ん。今のままであつてはいけません。これ  
は誰の責任でもなく、中国人一人、ひとりの自  
覚と責任、そして努力が必要なのです。

私は中国を愛しています。それだけに少しで  
も学び、自分と中国を高めたいものです。十年  
後はキット変わります。これは本当の心です。  
どんな国の歴史にも光もあれば影もあります。

これからの中国には光り輝く歴史を作るんです。私はこの仕事に従事し、はじめて多くを学びました。とても色々な、キツイ質問や、疑問、ご意見、そして私に対する忠告と信頼の言葉を頂きました。

聞いて下さい。中国に昔から美しい詩が残っています。これもそのひとつです。

《年々歳歳 花相似たり 歳歳年年人同じからず》

毎年咲く花はみな同じ、しかし人間は学ぶことと努力で成長し変化する、国も同じです。

この訪中団のリーダーは誰か？先生はだれか分からない程でした。多分衣を着ている人が先生だと思います。でも荷物を持ったり運んだり、おやつを配ったり、手伝いばかりしていました。だから私は尊敬出来るのです。

やっぱり、日本横浜善光寺は、さすがにすごいと。私は信じます。謝謝。」と結んだ。彼のメ

ッセージは旅団の心をゆさぶり、瞬時に国境を取り払い、心と心、魂と魂をしっかりと結んでくれた。新しい時代の新生中国の新しい発見をさせてくれた。生まれ「おごる日本は久しからず」。バスの車窓に中国の樹木が萌えはじめ芽え渡っている。こんな美しい風景は見ていなかった。否目に映っていなかったのだ。「心素直なればすべて美」なのか。

この訪中で悠々の流れに立ち、色々な人達に出逢い、学びを深めることができた。お陰さまで私も少しは柔軟心を取り戻したのかもしれない。否、取り戻したと思いたい。道元禅師さまの言われる「われ彼の地において柔軟心を学ばん」とはこのことか。

春

天童寺

西安

北京の旅

國 廣 良 子

出 発

留守たのみ旅立つ朝の諸葛菜

上 海

海越えて降り立ちし国金盞花

寧 波

道元の入宋記念碑水ぬるむ

遣唐使着きし江に佇ち春の水

うららかや御ン僧水晶玉買われ



天童寺

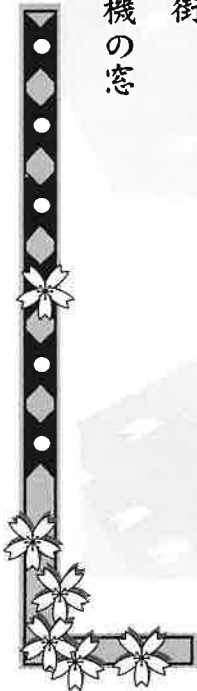
天童寺千の堂字の霞みけり  
おめもじの叶ひし猊下桃の花  
朝東風や古刹回廊石畳

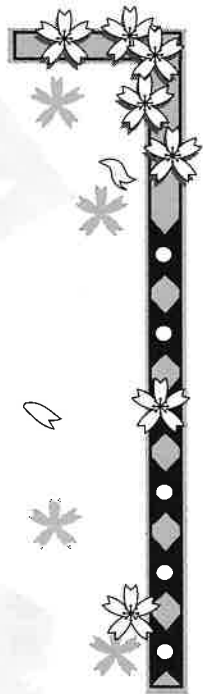
阿育王寺

金箔の鑑真像や竹の秋  
子ども等に大いなる国あたたかに

西安

城壁の昏れて西安春の雨  
春曉の大路水撒く西安街  
春の江の大きく曲る飛機の窓





兵馬備

鳥の巢や永久に語らず兵馬備

十三陵

春愁や石室暗く玉座あり

興教寺

亀鳴くや玄奘大師の墓処  
心経を唱ふわれ等に風光る  
やや傾ぐ大雁塔や春の雲



万里の長城

長城に春禽一羽見たること  
春惜み侍てば長城渺々と

街

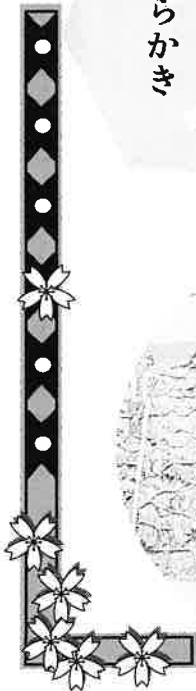
春埃煉瓦住居に人を見ず

故宮

瑠璃瓦綾なす春の故宮かな

帰国

御ン僧と共にせし旅春惜む  
春暮るる甘納豆のやはらかき





# 留学僧を取り巻く異文化

ニューヨーク州立大学 伊藤 博

## 留学僧とは

近年、仏教の国際化という言葉が耳にしますが、少し時代錯誤の感があります。インド北部に発祥した仏教は南はスリランカ、北は蒙古、東は日本、西は中央アジアにまで及んだのは正に紀元前から始まった仏教の国際化でした。但し、欧米での禅やチベット仏教の普及に代表される仏教熱は国際化の現代版と言えるでしょう。ごく少数の人々に限られておりますが、欧米の仏教の研究と実践は明らかに新鮮味があり、一考に値します。横浜善光寺留学僧育英会もアジア

に限らず、欧米にも派遣し、更に外国からも留学僧を受け入れていきます。仏教界でも世界の幾多の宗教家達と一堂に会し、相互理解を深めたり共通の問題の解決に取り組んでいます。キリスト教が西洋社会の独占ではない様に、仏教が東洋人だけの宗教ではないという意味で仏教が地球的規模でしかも人間一人ひとりの宗教として取りあげられています。

文献や各種のメディアを通じて国内にいても海外の仏教を学ぶことはできます。しかし、現地に行き肌で体験する方がより理解と呼吸が深まります。日本は仏教学の宝庫ではありませんが、

ほかのアジアの国々にはパリーイ語やチベット語等による文献、更に、米国シアトルのワシントン大学やスイスのローザンヌ大学のインド仏教後期の研究の様に、欧米にも貴重な文献や仏教の研究があります。また、外国の研究者達から直接学んだり意見の交換をすることも出来、留学の効用は大と言えます。

日本の留学僧制度は長い歴史を持っています。六世紀後半に伝来した仏教は中国や朝鮮半島への留学僧たちに負うところが多大了。留学僧達は經典の翻訳は解釈を通じて仏教学の向上に、また大衆への伝導布教にも貢献してきました。さらに、留学僧自身が海外で得た知識や体験を帰国後、宗教の枠外でも異文化の紹介に一役買い、広く文化の交流に貢献してきました。

## 世界の類似性と多様性

留学僧を取り巻く世界の宗教や文化は、その

同一性と多様性が交差し複雑に絡み合っています。一方では、情報網や交通機関の発達のお陰で、世界は小さくなったと言われます。人間はどこに住んでいてもかなり共通の行動をします。衣食住という最小限の日常の活動から人類社会を維持し発展させるといふ高度な活動に従事しています。精神活動にしても、自然教を始めとする素朴な原始宗教から複雑な現代宗教まで多種多様ですが、その根底には共通点があると思います。生きる喜びと不安、死や未知の世界に対する恐怖、そして神や超自然的な現象に対する好奇心、慄きと崇拜、そして愛と敬虔な気持ちは宗教心を引き起こす原因と考えられます。この様な気持ちは人類共通の特性で、無宗教者も含めて多くの人が宗教乃至はそれに似たものに生きる拠り所を求めるわけです。

他方、世界は広く、空間的にも人間は個々の文化に縛られ、多種多様です。人間の行動範囲

は比較的狭く、日常の行動様式も限定され、各地域の風俗、習慣そして宗教は習慣化されています。宗教は一義的に定義できませんから、世界に至る所に多種多様の宗教が存在するわけです。仏教の発祥地である北インドやネパールは今ヒンズー教ですし、インドには多数の回教徒もおります。同様に欧米でも色々のキリスト教派のほか、同じ神を信ずるユダヤ教と回教が深く浸透しています。

仏教にしても、国境を越えて伝播された仏教は行く先々で形を変えました。東南アジアを中心とする南方上座部は戒律も厳しく寺院や仏像の建築色彩は大乗仏教の日本人に強烈な印象を与えます。チベット仏教も一種独特です。ミャンマー（ビルマ）では、葬儀は死者の親戚と隣人で行い、僧侶は参加しません。もともと日本でも江戸時代以前はお寺は葬儀に関与していませんでした。隣の韓国では儒教が国の宗教とし

て栄えたことがあり、今でも仏教の葬儀に影響を与えています。

カナダのモントリオールの仏教会での例ですが、キリスト教会で毎日曜日行なう礼拝のように、寺の檀家は仏教の「教会」に集まり、「賛美歌」を合唱し、仏教の「牧師」が礼拝と説法をします。参加している二世、三世の日系信者には何の違和感もないらしく、日本国内の神仏混合同様、キリスト教の儀式との類似には驚かさず。

留学僧は宗教以外の文化にも接し、異宗教とその文化との相関関係も見ることでしょう。日本では子供の頭を撫でて誉めるのが習慣ですが、タイ国では頭は一番大切な所で手で触るのは大変失礼なことだし、サウジアラビアでは椅子などに腰掛けていて、膝などを組んで他人に足の裏を見せるのはご法度です。西洋では親子や友人の間で「アイラブユー」と言うのは日常

茶飯事ですが、日本人には少し抵抗があるかも知れません。

## 絶対神の文化と日本の宗教

神の觀念の無い仏教徒の日本人留学僧にとつて、神を絶対視しているキリスト教、ユダヤ教、そして回教の人達の行動様式を理解し難いかも知れません。日本の神道は日本の起源や天皇制を盛り込んだ国粹主義的な思想で、そこに出てくる神はほかの原始宗教同様、諸々の物体に宿つておる自然神であり、キリスト教や回教の絶対神とは区別されています。神が宇宙と人間を創造し、人間の行動を規制する場合、信仰する者は聖書やコーランの教えが善悪の基準となり、白黒をはつきりさせます。日本人は時折自分の宗教が何かを問われて返答に困ります。躊躇し、知らないとか、何も無いと答えて相手から軽蔑されることもあります。神の觀念の無い

日本人はどこから善悪の基準を得るのかを素朴に問うわけです。

日本人はよく無宗教だと言われますが、日本人に宗教がないとか、善悪の判断がないということではなく、日本人は善悪の判断を宗教に求めないということです。特に、戦後、国教としての神道がなくなり、宗教教育が禁じられた結果、特定の宗教を倫理道德の基準としたがりません。日本人の思考様式が仏教や神道の様な特定の宗教に基づかず、儒教や仏教も含めた東洋文化や伝統それに西洋からの価値判断が複雑に絡み合つて日本人の行動に影響しており、これを単純に一つの宗教に帰することが出来ないことにもよります。

神が善悪を定め、人間の行動の規範を示すと信じる者は日本人には極端に思えるほど自己表現が断定的になりがちです。これは欧米の個人主義の影響でもあります。儒教の思想の強い日

本では、本来家族が最小の単位として家全体の福祉と和の精神を重んじ、家族の一人ひとりの自由や意見は二の次にされてきました。欧米ではフランス革命やアメリカの独立戦争を契機に個人の人権が最重要視され、大衆の中でも個人は自分の意見をはっきり言う伝統が生まれました。

### 留学僧への期待

絶対神を信じ自己の意見を主張する宗教は、相手との対立を深め争いになることも多々あります。古くは十字軍とアラブ軍との宗教戦争、現代ではアラブ・イスラエル戦争、イラク・イラン紛争そして北アイルランドの内紛等たくさんあります。それに反し、曖昧な玉虫色の日本の表現と物の考え方は意志の伝達に誤解を招く虞があります。それと同時に、仏教の中庸や柔軟性は宗教間の融和を生み出すのに一役買うと

もいわれます。神道が国粹的で社会統制を目的にしているのに反し、仏教は宇宙や人類の起源を自然科学に任せ、専ら個人の精神面と行動に焦点を当て修養を説いている点で、全ての宗教に共通な慈悲や愛の観念を通じて、人間共通の精神問題を地球的規模で探求するのに適しているともいわれています。そうだとすると、仏教の留学僧がより大くの人に仏教の内容を紹介する必要があります。但し、この事は仏教に改宗させる事とは異なります。留学僧は伝道師ではないですが、留学先で伝導する機会もあるでしょう。その時は地味に一对一で相手の思考様式や価値観を十分理解して対話すべきでしょう。西洋の個人主義は聞いている側の自己主張も重要視するので、一方的な説法はあまりなじみません。禅問答でも一義的な答えよりは、複数の答から相手に選ばせるのも一つの方法でしょう。

留学僧は欧米の合理主義と福祉活動にも気付くでしょう。中世期のヨーロッパで起こったキリスト教宗教革命は富と宗教との問題に取り組みました。それまでは金儲けは罪と見なされ、ひたすら信仰を通じて直接神に仕えるように説いておりましたが、宗教革命家の一人であるキヤルバンは、合法的な手段で富を得ることはその富を神のために使う限りは罪ではないという新しい解釈を広め富の蓄積を正当化しました。経済活動は躍進し、西洋の資本主義の発展につながりました。これはボランティア活動にも反映されています。日本のボランティア活動は短い歴史しかありませんが、欧米では個人の自由な意志に基づいて公共団体とは無関係に大規模に行なわれます。さらに、布教活動もその延長線上にあります。キリスト教の伝導活動はよく知られており、宣教師にとって神の教えと西洋の価値観は一体化し、長年未開発の奥地を始め

世界津々浦々に布教し福祉活動に携わってきました。

日本も含め東洋にもキリスト教と西洋文明の優越性を信じる人がいます。韓国人の三分の一はキリスト教信者ですが、キリスト教への改宗の裏には西洋の文化生活への憧れがあるそうですが、動機は別として、日本人の間にはほとんど浸透しなかったのとは対照的です。同時に、半パーセントの日本人キリスト教信者の多くが知識階級であることも見逃せないでしょう。インテリ達は葬式仏教を非難し、知的な拠り所としてより理想的と思われるキリスト教に走ります。彼らにとって聖書は宗教を理論的体系的に説明しており、教会での日曜礼拝や聖書研究会を通じて聖書に対する造詣を高めようとしています。

西洋の国でも同じような現象が見られます。既存のキリスト教や他の宗教に不満を抱き教会

を去り、冠婚葬祭以外は宗教に疎遠になる人たちが大勢おります。その内の少数の者は他宗教に魅せられます。彼らにとって回教やヒンズー教や仏教は東洋の神秘的で新鮮な思想と写り、知的欲求を満たしてくれます。精神修養や人生哲学としてお寺に通ったり入門して修行に入ります。故前角博雄老師のような仏教の伝道師が対象としたのは主に、欧米のこの少数のインテリの不満分子であり、彼らの次の世代の仏教徒の育成が楽しみです。

## 日本人の宗教観

横浜善光寺留学僧育英会は外国人留学僧をも援助してきました。アジアや欧米から来て日本で仏教学を大学院のレベルで研究している若いお坊さんには日本の社会や文化はどの様に見えるのでしょうか。高度な科学と技術を持つ豊かな経済大国とも見えるでしょう。親切な日本人

にも沢山会うでしょう。日本は江戸時代から明治維新以降にかけて外人アドバイザーを招き、国家総動員で近代資本主義に盲目的に驕進して、戦後新興成金の国になりました。しかし、中庸を説く仏の教えが後継者によってどう解釈されたとしても、富と宗教の関係はあまり論じられておりません。経済学者の中には日本の資本主義を批判する人もおりましたが、あくまで亜流であり、宗教上の観点からの考察批判ではありませんでした。とにかく、外国人留学僧は日本人の物質文明への異常なまでの執着心と世俗主義そして精神面の欠乏にも気付くことでしょう。これは日本に限らず先進国の特徴であります。

先進国での宗教離れと世俗化とは対照的に、回教は発展途上国において、すごい勢いで波及しています。教義の内容はともかくとして、回教徒の女性は回教徒の男性と結婚することを義

務づけられている事にもよります。稀に、同じ神を信ずるキリスト教とユダヤ教の男性との結婚だけは許されますが、仏教徒や他の異教徒と一緒にになることは禁じられています。これは回教徒の子孫を殖やすためで、ユダヤ教の女性が他宗教の男との結婚を禁じられているのも同じ様な理由に因るものと思われれます。回教徒の男性が異教の女性と一緒にするのは黙認されていますが、結婚後女性が回教に改宗することが多いからでしょう。回教の強い中近東や東南アジアやアフリカ諸国の出生率が高いことを考えると、回教は急速に増大するでしょう。しかも、世界でキリスト教が着実に伸びていることを考えると、近い将来に、仏教人口が増える可能性は少ないでしょう。

しかし、宗教は人間一人ひとりの精神的な現象であるとすれば、信者の数のような量より個人の宗教の質の問題になります。しかも、どの

宗教が一番良いかが重要ではなく、どの宗教がどの人の宗教心に一番適しているかが問題になります。ヒンズー教のインドとか回教のサウジアラビアとかユダヤ教のイスラエルとかキリスト教の欧米と言った国単位ではなく、仏教徒が皆無状態の社会でも少数の現地人との宗教心を満たすならば、異文化の中の仏教も存在意義があるでしょう。

横浜善光寺育英会は内外の留学僧を通じて仏教学の向上と仏教の紹介のため、ゼロから始まり十五年間も続いてきましたが、これらの目的達成の為これからが正念場でしょう。



## (目 的)

佛教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

## (派 遣 先)

1. Zen Center of Los Angeles (LA禅センター)  
"923 S.Normandie Ave LA. CA. 90006 197SA"
2. Zen Mountain Center of New York (NY禅センター)  
"Box 197, Mt. Tremper, NY 12547 USA"
3. Zen-Zentrum Eisenbuch (アイゼンバッハ・禅センター)  
"Eisenbuch 7-84567 Erlbach Deutschland German"
4. Wat Paknam (ワットパクナム)  
"Bhasichareon Bangkok 10160 Thailand"
5. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

## (派遣期間)

平成13年4月より1年間

## (給 費)

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する  
必要経費並びにその往復旅費

## (提出書類)

### 1. 論文 (次項による)

#### ○ 論題

- ① これからの国際興隆と仏教の役割
- ② 世界平和と仏教徒の誓願
- ③ 留学僧として私はこれを学びたい
- ④ 異文化の中で仏教を学ぶ

いずれか一題を選ぶこと 400字詰原稿  
用紙5枚以上 (A4版タテ書き)

### 2. 保証人と連署した願書 3. 卒業証明書

### 4. 履歴書 5. 推薦書 6. 健康診断書

## (募集人数)

平成11年度 2～3名

平成12年12月10日、事務局必着のこと

## (発 表)

平成13年1月10日、本人に通知する

## 横浜善光寺留学僧育英会

〒233 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号

TEL. 045-845-1371 FAX. 045-846-2000

# 第 17 回 生

# 横浜 善光寺 留学僧募集

平成13年度・2001

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の  
規程ならびに細則をごらんください。



**ZENKŌJI**  
**YOKOHAMA**

□心の時代□

## 留学生交流を支えて

— NHKラジオ第一放送「ラジオ深夜便」 —

十月十五日金曜日午前四時六分を回りました。今日の、「ラジオ深夜便」の担当は山田誠浩です。

では、「心の時代」です。

今朝は、横浜善光寺の住職、黒田武志さんに、  
「留学生交流を支えて」というテーマでお話していただきます。

黒田さんは、昭和十三年の生まれで、今から三十年前に横浜の現在の場所に、新しき寺、善光寺を建立し、十五年前から、海外留学僧派遣

育英会<sup>を</sup>を設立・運営しておられます。聞き手は、金光寿郎<sup>かなみつとしお</sup>さんです。

金光　こちらの横浜善光寺さんでは、十五年ほど前から留学僧の方の留学、海外との交流を支援なさっているとのことですが、現在までの、最初からの経過というと、おおまかのところどういう感じになっていらっしゃるのでしょうか。

黒田　育英会を始めましたことは、第一に、私

自身も三十年前にタイ国にも、そしてアメリカにも留学させていただきまして、帰国しましてこの寺を創りましたが、世界中の方々にご迷惑をおかけしていろいろとめんどうをみていただいて、この横浜にきましてから新寺を建立いたしました。当時、まったくお金がなかったのですが、ただいま建坪も四百坪近くになって何とかやっておるわけですが、みなさまにそのお礼をしたいと思いました。こうして現在いられることは、すべてみなさまのおかげで、何かみなさまのお役に立てることがないか、と。で、僕が一番感激を受けたのは、やはり若い時代、知らない国に行って勉強する中で、多くの方に助けられて知らないことを教えていただいたことなんです。そして、今日あるのは、すべてその国の方々、世界中の方々のおかげと認めているんです。ですから、そのように、世界中に行つて若い方々に勉強してもらう、そして、世界

からおいでになって何かご不自由があれば勉強のお手伝いをしたい、と、いうような思いが、この育英会を始めた一番の動機なんです。

しかし何分にも育英会運営にはお金がかかります。どなたでも私に質問するのは、「いったいどこからお金を工面するんですか」ということなんです。私は、そのことに関しましては、ちようど今年はお寺開創三十年目になるんですが、育英会を設立した開創十五年目の頃には、お檀家の数はおよそ千五百軒でした。その方々に、このように毎回お願いしたのです。「私たちは毎日朝昼晩三度食事をいたします。その三度食事をするとときに、ひと口分ずつお食事を減らして、その分、善光寺に寄付をしていただけないでしょうか」と。一族、二人の方も四人、五人の方もいらつしやるでしょうが、一族ひと口分だけを善光寺さんに、仏さんにあげようと、そう思っていたら、一食につき十円

くらは節約していただけます。一日ですと三十円、一カ月ですと、大金ですけども、九百円、それを善光寺に―仏さまに、ご先祖さまに、頂戴したい。そのお金を私は、これから世界中のあちらこちらに行つて勉強したいという若い人達に、その頂戴し預かったお金をお使いいただく、と。そしてまた、海外から日本に来ていゝる方々で、ご不自由している方々に、こと仏教に関することでお金をお使いいただくことと、基本的な一番大事な経済的な基本筋をたてて、そして、育英会を創りたいとみなさんにお願ひ申し上げたわけです。

それが非常に多くの方の賛同を得まして、最初はアジアを中心に、まず成功させようと思つておりました。しかし、当時日本人というのは、アジアとの交流を大事にしようとお考えの方が少なかつたんですね。やはりアメリカ、ヨーロッパ、そういうところとの交流を重要視す

る方が多いことを感じましたので、最初はアジアのタイ国を中心しようと思つておりましたが、アメリカの方へも初期の頃から目を向けておりました。と、いいますのは、アメリカには私の兄が創立し、そして私も修行した禅センターがありましたから、そこにも派遣しよう。と。まずは、私が修行したタイのワットパクナムとの交流、次いで、アメリカの禅センターとの交流、この両国への派遣を軌道に乗せたら、次はヨーロッパへも広げていくことにしたので。こうして世界が一つになっていくことを願つたわけです。いろいろとご批判やご意見をいただきましたが、ただいま、十五年を過ぎて、派遣国十三カ国、受入れが十カ国、関係国が二十カ国と、多くの方々には喜ばれるようなとの願ひがかなつてゐるわけです。

金光 人数にすると、延べ何名ぐらいお世話なさつてゐるのでしょうか。

黒田 ただいま刷り物上では九十三名というふうになっておりますが：

金光 十五年間で？

黒田 そうです。ただ、そこに刷り物以外にもつと何年もお世話した方もいらつしやるので、総数は百二十名ぐらいになると思います。

金光 ほほお、そうですね！

受け入れられる方と派遣される方の割合はどの程度でしょうか。

黒田 だいたい、今は半々ですが、七、八年前、前半くらいまでは派遣が六、受け入れが四ぐらいでしたね。

金光 ではほぼ概略はうかがっておいてですね。それではそもそも住職さんが、なぜそういうことをやろうと思われたか―これはもう、お若い頃からのご自分の体験を踏まえた上でそういう道を進まれたんだと思われませんが、学校は駒澤大学をお出になられて、随分「僧堂」とか

托鉢とか体験ご指導なさっておられるそうですね。ちよつと、その若い頃からの仏教に対するお気持ちから聞かせていただけますか。

黒田 はい。私は大学院を終わりましたから、最初總持寺に安居いたしました。やはりなんといつても、我々には僧堂の生活、修行が大事。

そして修行する場合には必ず素晴らしい師にいろいろ教えていただくということが僕の基本的な考えです。素晴らしい師匠にめぐり合うことはなかなかむずかしいのですが。

まあ、私はそれで大学院出て總持寺に行ったわけですが、大学院を出ているとかなり優遇をされるので、半年の修行で「正教師」という資格を得て、次に永平寺に修行に行きました。永平寺に行く前に、先ほども申しましたように私の次兄がアメリカで禅センターを開いておりましたので、そちらに行きたいと思っております。私の兄は四十年前に開教師として留学をし

て以来亡くなるまでアメリカで暮らしておりましたが、私は若い頃に兄に、私もいずれアメリカへ留学したいと頼んでおりました。すると兄から、それでは坊さんになれ、とすすめられ、言われるがまま駒澤大学大学院に進んだのですが、やっと卒業しても、ちゃんと修行してから来るように言われ、總持寺へ。總持寺へ半年行きますと資格がもらえますので、改めて兄に頼むと、「おまえ、半年ぐらゐの修行で何になる。永平寺へ行け」と言われ、そこで永平寺に行つたわけですが、嫌々ながら修行しているのですから、うまくいくわけがない。そのうち、痔を患つて―寒いですから―最初は我慢しておつたんですけど、なかなか体調が戻らないので：金光 なにか、延寿堂というか、病気の修行僧が入るところへ入れられたとか。

黒田 ええ、そこへ入ったんです。それで、痛くてどうしようと思つて延寿堂に入ると、待遇

がいいんですね。お風呂も、誰も入る前に入れてもらえたり、非常に優遇をしてくれる。しかし、最初の三日、四日はよかつたんですが、一週間も過ぎてきますと、「こんなこととしては修行にならないから帰ろう」と。そこで上の方の、老師に相談しました。ところがその当時は、大学院を卒業した者が何人もいて、永平寺で修行するということは今後の体勢としては非常にいいわけですね。だから帰らないで少し我慢するようにいわれたのですが、私は、それでは私の良心に反するということで、帰らせてほしいと言つたんです。しかし、お金がないんですね、一銭も。ですからある友人から千円を借りて、永平寺を出たんですが、千円だけではとても東京まで行けない。電車賃を払つてごはんを食べたら幾らも残らない。そこで、そのまま午後いっぱい市内で托鉢をして、夕方寒くなつて駅に戻りました。この応量器に半分ぐらゐお金を頂戴

して、持ったまま駅についたら、電車の発車のベルがなるんですね。ホームには右に東京行き、左に直江津行き、と、二本の急行電車が同時に入っていて、駅員の方に東京、上野の方向に行くにはどっちに乗ればいいんですか、と尋ねると、「坊さん、乗ればすぐに行くよ」というので、慌ててパツと乗りましたのが、――僕は、名古屋を通って東京に行こうと思っていたんですが――手前の方の急行によく確かめせず乗っちゃったんです。そして走り出して、体はクタクタに疲れているし、今持っているお金を確かめると六百二十円しかない。持っていたお金全部合わせても八百円くらいしかなくて、これでどこまで行けるかなあとしばらくは考えたりしていて、そして、ハッと気がついたら、僕は富山經由の直江津行きに乗っていたんです。

金光 反対方向に？（笑）

黒田 そう、反対行きに乗っちゃったんですね。

それで、困ったということで、すぐに車掌さんに言いました。困ったなあと思っているところに、私が總持寺で修行していた頃の友人で、やはり駒澤大学を出る僕より少し若かった松本君という友人が富山にいたことを思い出しまして、寺の名前は聞いていたので、尋ねるところにしましたんです。夜の八時半富山で降りて、寺に行きましたが、九時には開枕ですから、寺の中はまっ暗なんです。しかし、しょうがないから寺の戸をどンドン叩いて起こしたんです。中から「何だこのやろう」というような声がするわけですよ（笑）。そして松本君が戸を開けて出てきて、「えっ、黒田さんか。永平寺にいるんじゃないかったのか」と驚きまして、「いや、調子が悪くて出てきたから、ちよつと泊めてくれ」といって、話をすると、「そうか、困ったな。でも、金がないなら、一日二日托鉢すれば、帰る金はあるだろう。富山は仏教国ですから。明日か



ら黒田さん、托鉢したらどうか」というんで、次の朝、ごはんを食べさせていただいてから出かけました。九時ぐらいから、「ぎゃーてーぎゃーてー」と言つて、市内を一日歩いて、三時くらいに寺に戻つて、そっくりお金を仏さんに差し上げるんですよ。しかしいくらくらいかなと思つて、般若心経をあげてから、「黒田さん、ちよつと数えたらどう？」というので、ご喜捨を数えてみたら、八百円くらいあるんですね。二日だと千六百元になるし、三日目にはもう帰れるなあとと思つて、その夜も泊めさせてもらつて、次の日も托鉢して、千円近いお金を頂戴いたしました。では、僕は東京に帰るよというのと、「いや、せっかくここまで来たんだから、能登にある總持寺の祖院さんにお参りしてから帰つたらどうか」と言われましたので、その気になりまして、彼も、何かあつたら使えと三千円ほどのお金を貸してくれましたので、私は能登に出か

けることにしました。能登に行きましてからも、そのまま帰るのもつたいたいものですから、そのまま「ぎゃーてーぎゃーてー」と言いながら、ついつい日本を一周することにしたんです。金光 そのまま、托鉢で廻られたんですか。黒田 そうです。托鉢しながら日本を一周したんです。

金光 しかし、托鉢というのは、いつもいつも八百円とか千円とかもらえるものではありませんよ。全然もらえないときもあるわけですよ。ね。

黒田 そうなんです。最後の、京都あたりを歩いている頃は、雨が三日も四日も降つて、誰も戸を開けてもくれない。相手をしてくれないような有り様でした。私はずっと草鞋をはいていましたから、歩き続けるとポロポロになつてしまうので、草鞋を探すのもたいへんで、釣り道具屋さんでやっと見つけると十足くらい買ひ



こんでいたんです。そして、腰から体中に草鞋を巻き付けて歩きました。次の町で草鞋があると探すが、とにかく雨が降ったり、雪道を歩いたりすると、びしょびしょになって、草鞋から体全体から馬糞の臭いがするわけですよ。ですから、誰も泊めてくれませんし、ほかにもいろいろなことがありましたが、とにかく、三日間、京都で雨に降られたことがあったんですよ。

金光 あ、全然みいりなしで？

黒田 そうそう。それでも、托鉢僧は必ず、涅槃金といって、自分が不慮の死を遂げたときのための葬式代となる最後のお金を携帯しているんですよ。

金光 ああ、行き倒れみたいになったときの後始末のお金なんですね。

黒田 そうなんです。それを、千円持っておったのですが、とうとうそれに手を出して食いつ

なくほどの生活になっていましたから。京都の知り合いを尋ねたんですが、僕のずぶ濡れ泥だらけの姿を見て、本来なら助けてくれる立場の方でさえもが、驚いて、「今日はお客さんが来るから泊められない」と断られるほどでした。しかたがないので、京都の町に出て、お寺を尋ねることにしたのです。雨はどんどん強くなるし、薄暗くなってくるし。暗くなってからお寺に泊めていただくというのは、大変失礼なことなんです。やはり、ルールとして、三時前後の陽が傾く頃には自分の住処、今夜泊めていただくところを探して、そして、陽が沈む前に身解いて、ちゃんと支度をして、お風呂を沸かすとか玄関を掃除するとか、お夕飯の準備をして、そして、お夕飯を頂戴して、朝早くお勤めをして失礼するというのが、約束ごとなんです。しかし、これができないわけなんです。雨は降っているし、体は汚い。しかしそれでも、尼さん

のお寺なら泊めていただけるかもしれないと思つてある臨濟宗の尼寺に行くと、庵主さん自身が出てきて、私の姿を見るなり「今日は庵主さんがいないから泊められない」といふんですね。もう少し先に行ったら、四、五軒お寺があるから、どこかは泊めていただけるだろうとそこへ行つたのですが、ダメと断られ、何軒まわつても断られたので、しかたなく私は京都の駅に行つて、どこか泊めてもらわなくちゃと思ひ、五六百円のお金がまだありましたので、亀岡というところに行つてそこで泊めていただける宿を探しました。そこで、私を見かねて、「泊まりな」といつてくれる旅館が一軒だけあつたんです。旅館といつてもほとんど木賃宿なんです。今から三十年前ですから、土間ですね、土間にいる私を見てご主人がかわいそうに思つて、「まあ、上がりなよ」と言つてくださったんですね。私の体は冷えきつていましたので、「お風呂に入

れていただけませんか」というと、「いやまだ、お客さんがたくさんいるから、風呂はいつ入れるかかわからないなあ」とおっしゃる。これは、つまりダメだということですから、銭湯の場所を聞き、濡れた法衣のまま雨の中かなり長く歩いて銭湯まで行きました。そして、ありつたけのお金をもつて出て、十六円払つてやつと温まつて、帰り、ルール違反ですが、一合のお酒を買いました。それが当時三十五円ぐらいたつたんですね。それからパン十円とバターを十円で買つて、宿に戻つて残つた金を出すと、二十四円しかありませんね。とにかく腹すいてますから、お酒を飲み、パンにバターをぬつて食べながらじつと二十四円を見ていたら、「俺の命は二十四円か。俺はいつたい、何をやってるんだらう」と思えてきたわけですね。しかたない、ともかく寝ようと思ひ、ずぶ濡れの法衣を脱いで廊下の方に干して寝て、翌朝三時。まだ雨が

降っているんですね。五時になってもまだ降っている。それで、さて、どうしようかと正座して考えて、東京に電話して親父に金を送ってもらおうかとも思ったんですが、一、二時間ボーッと考えているうちに、「俺は坊さんじゃないか。坊さんというのはただひたすらにお経をあげればいいんじゃないか」とふと思えてきて、宿を出る前に「ご先祖さまにお経をあげさせていただけませんか」と頼んだのです。仏さまは三尺くらの渡り廊下の向こうの離れにありまして、私はそこに通されました。「そこでお経をあげてくれ」というので私は歩いて行きました、精いっぱい般若心経を唱えてご供養させていただきました。「それではありがとうございました。これで失礼します」と言ってお出て行こうとすると、宿のご主人が、「雲水さん、腹減っているんじゃないかい」と声をかけてくださったんです。そりゃもう、何も食べてませんし、腹は減ってい

ますから、ついつい「はい」と言うと、そこで初めてあったかいごはんを三日ぶりに頂戴いたしました。二膳いただきますして、三膳目もいたできたかったんですが、それはやはり遠慮して、そして、再び雨の中出て行ったのです。頭にかぶっているのは網代傘ですから、じゃんじゃん濡れるし、一銭も入っていない応量器にも雨水がたまる。こんなにお金もたまればなあなどと思っているうち、亀岡の郊外に出たとき雨がピタッとやんだんです。ふと見ると女子高校の入口で学校帰りの学生たちが出てきたところでした。そこで一つ、この方たちのために般若心経を唱えようと思って「ギャーテーギャーテー」と唱えていると、その学校の入口の横の家から三十歳ぐらいの女性が出て来てとことこと私に寄ってきて、十円のご喜捨をくださったのです。さらに唱え続けていると、出て来た女学生たちが百人近くバーツと集まってきて、一円、十円

とご喜捨をしてくださったんですね。私がおもうダメだと思ったときに、命が甦ったような気がしたわけです。そのとき、三日間も出なかつた太陽が出て雲の切れ間から一瞬のうちにサーッと光が射したんです。

「人間は生かされている」

そうしみじみ有り難く感じ、僕は生命を大切にし修行をやり直さなければいけないと思つた、そこが僕の原点なんですね。そして、自分の体験を家族の前で「僕はありつたけのことをやってきた。すごい経験をした。俺はたいしたもんだ」みたいなことを言つたんですよ。すると、十年ぶりにアメリカから戻っていた次兄は、「そうかそうか。えらいもんだな」と言つてくれたんですが、長男は、「おまえ、そんなにいろんなことしてきて、いったいおまえに何があるんだ。おまえには何もないじゃないか」と。それでハッと気付いたんです。自分に何もないこ

とを。それで、修行のやり直したということであらためて總持寺に行つて僧堂に入りました。それから、これからは何をしようかと考え、本当の仏教とは何だ、自分は何を学ぶべきか、考えたところから僕の新たな人生が始まつたのです。

金光 それからインドに渡られたんですか。

黒田 はい、そうです。その後、總持寺で四年間修行のやり直しをいたしました。それから、インドやタイ国といった仏教国では、仏教の教えがどのようになっているかを知りたくて、これらの国々に渡ることを決心しました。そして、インドの仏跡を巡拝したあと、タイ国のワット・パクナムで修行をいたしました。これは、二二七の戒律を守る修行です。その後はアメリカに渡り、ロサンゼルス禅センターでアメリカの方々といっしょに坐禅修行をいたしました。それから、寺もお金も何もない日本に帰つてき

たのですが、大阪のナリス化粧品という会社が私を助けてくれて、一千万の寄付を―三十年前に社員一千人から月々三百円ずつ集めて下さって―私は三百円でどうにかなるのだろうかと実は不安だったので、み仏の力ですね。担当の東郷さんというお方が「先生、たいへんなことになったよ。お金集まり過ぎて今、七百五十万にもなっている。先生いらさないよな」と言っています。私は、「いやあ、もうお金は決して無駄にいたしません」と言って一千万円のご寄付いただいて、この横浜善光寺を建立したんですね。それで、そのあと、五カ年計画で千軒、檀家さんになっていただく、と、そのうち檀家さんも千五百軒になったので、みなさんのために釈迦殿を造ろうと思ったんですね。ところがお金は一銭もないのに、総工費は相当かかるという。そこで私はそのときかなりの借金を銀行にしました。何でも使えといわれ、他にはないという

仏像も入れました。檀家の方も協力してくださって、全部決裁して、それで借金が残りしましたがそれも十年くらいかけてお返ししていけばいいかなと思って、釈迦殿を建立したんですね。私自身は一銭もないところから、これだけのものができたということで、すべて皆さまのお蔭であり世のなかに還元しようと思いました。そこで何を考えついたかというと、自分がかつて世界中の方にお世話になってきたから世界中にそのご恩を返したい、と。すべての方々、自分の出来る限りのことをしたいと思ったんですね。そして、何をすることも、最後は「人材」だ、と。「何をすることも、先生、人材が集まっていれば、人事に成功すれば八割はもう何かを行う前に成功する」と言っていたら、それなら世界に通じる心を持つ人材を育成すれば、日本は永遠に滅びない、永遠に栄えていく、と、いうことで、留学僧派遣育英会を創り出したというこ

とが、僕の単純な話なんですけれども。

僕の誓願はみなさんに救われ助けられ、仏さまに救われてきた、そのご恩をみなさんに戻そうということが僕の今日の育英会設立の動機であり、僕の人生観の基盤になっているし、僕の願いなんです。すべてみなさんに助けられ、今日の僕がある。みなさんのおかげだということ。をいつでもお話申し上げたいわけなんです。

金光 ま、今、世界中のお世話になってきたとおっしゃいましたけれども、たとえば、タイの寺院でご修行になられましたね。タイの仏教などは日本とはだいぶ違って、昔聞いた、一種の悪口になってしまいかもしれませんが、お寺の中だけで自分の悟りをひらく、ということ聞いたことがあるんですが、あちらの寺院でのご修行というのはどういう印象をお持ちになりましたか。

黒田 ええ、まあ、向こうはですね、生ぬるい

ようなところもないことはないのですが、しかし、二二七の戒律を守るといって、戒を守ることが一つのベースですからね、戒律を守らなければもう宗教ではないですから。日本の場合は戒律がなくなっていますから、僕はやはり、戒律はなくてはいけない、守らなくてはいけないものだと思います。それと同時に、日本と比較したなら、日本がよい悪いということではなくて、タイの場合は僧侶の方々が心から民衆の方々に尊敬を受けているんですね。これは日本では考えられないほど。僧侶が心から尊敬されている、熱心な仏教国ならではのこそ、一つの仏教施設建設にしても、日本とは比較にならないほど壮大なプロジェクトとなるのです。たとえばタイ国に仏教がはじめて伝来したところといわれ、古くから仏教の聖地として知られるバンコク西部のコン・パトムという町に建てられている「ブッダモンソン」という聖地は、仏紀二



五〇〇年を記念する事業として一九五五年に、プミポン国王が自らが定礎を主催し、国政府と国民が一体となって建設が始まりました。途中工事が中断されることはありませんでしたが、今もなお仏紀二五〇〇年を迎える二年後までには完成の予定で建築は進められています。すでに中心となる仏陀像や主要施設は完成しており、およそ二・五キロ四方の広大な敷地の中心部に、シンボルである遊行仏陀像が建ち、その周辺に四つの記念堂、会議場、図書館、宿泊施設、瞑想ホールなどの建物が点在しています。まさに、今世紀最大の仏教遺産といつてよいでしょう。この施設の中でも、極めて重要な意味を持つ『南伝大蔵経』の経蔵があります。これは私も若き日に修行したワット・パクナムの偉業であり、十年の歳月をかけて昨年の秋に完成いたしました。もちろん私も、善光寺の機関誌『成寿』でもご報告しているとおり、できる限りの協力を

続けてまいりました。この、二十世紀最大の仏教遺産の中の最も重要な位置をしめる『南伝大蔵経』というのは、縦二メートル、横一・一メートル・障子一枚半ぐらいの大きさの大理石の板碑七〇九基、表裏合わせて一四一八枚分に、経・律・論の三蔵を、ワットパクナムの僧侶たちがパーリ語で一字一字、精根こめてすべて手書きで彫ったものなのです。七〇九基の板碑が壁のようにずらりと並ぶ経蔵内部は、外からの強い日差しが遮断され、涼しい風が流れ、全体に崇高な空気に満ちた空間です。欄干の部分には、釈迦の前世の物語であるジャータカ物語や現代までのワットパクナムのご住職の歴史、僧侶と国民が心をつなげて経蔵建立に取り組む姿が色鮮やかに描かれており、その場になると、手を合わさずにはいられない気持ちになります。こんなにも素晴らしいものが、十年という月日でできてしまうというのが、タイの

とてつもないエネルギーなんです。日本では百年かかってもできるかどうか。いえ、お金さえ払えばできるんでしょうが、無償で人々が動くという信仰の篤さ、エネルギー。台湾も韓国もそうですが、たいへんな力が民衆の中からお寺に燃え上がって生きているというような感じなんです。日本の場合と比較すると、日本はお寺というと観光的な気分で見ている人もいますし、既成の教団に対するいろんな思いもあります。僕は、あちらの方は仏教が現代に生きていくのを感じますね。それはお坊さんたちが厳しい戒律を守るからです。それは、戒律を守ることで民衆の心に偉大な力を起こし、戒律を守ることによって逆に民衆の力が結集して燃え上がる、というよりは、はかりしれない爆発的なエネルギーになっているというのが、タイではないかという感じをうけているんですね。

金光 そのエネルギーの中心になっているの

が、仏教ということですね。

黒田 仏教ですね。なんといっても僧侶が中心となつてね。中には力のないお坊さんもいますが、しかし民衆たちは自分たちもお坊さんになつて二二七の戒律を守るでしょう。だから大事にせざるをえない。しかし今は比率は半々、僕が昔修行に行っていた頃は、民衆の八割くらいがお坊さんになりました。今は十人のうち五人くらい——半分はアメリカ、ヨーロッパに勉強に行つたり、政治的に出世しようという方も出てきました。今は、お坊さんはただお寺にいなさいというのではなく、田植え仕事もやろうという新しい仏教がね、芽生えていますよ。何十万人という人が坐禅してね。その人たちがすごい力でタイ国を動かそう、世界を動かそうというようなところにまで来ていますね。だから日本の既成の教団の人たちが、俺たちは大乘仏教で、向こうは上座仏教だなんて壁をつくるよう



沙門 任 氏 畫



なそういう時代はとうに終わった、そういうことを強く私は感じてますね。日本の僧侶の方々ががんばってはいるんだけど、もつともつと力を合わせて、今何をするか、を考えてほしいと思うんですね。今、大事なことは何かというと、五年先、十年先ではなくて、今、何をするのか、どうしなければいけないのか、ということをもう一度冷静に考えなければいけないということ。それが、宗教家の本当の命だと思う。するともうやることは決まってくる。生きていく、とはどういうことか。生きていくことは、多くの人々の役に立つことです。悪いことなんかできない。それが釈尊の命だという、そこをね、私は道元禅師の立場でお話するけれども、しかし、他の宗教もみな、同じなんです。道元禅師だって、私は曹洞宗だ、なんて言ってます。日本の仏教は、世界を指導し、世界は仏教の救いを求めている―キリスト教だとかマホメ

ットだとか、そういう隔たりをつくるのではなく、みんなが、心から「ああ、そうだ！」と動かされるものが宗教であると思うから、もう一度原点に―私たちはない力をふりしぼって、皆さんの力を結集して、世界を動かしていかなければダメだということが、僕の強い誓願なんです。

金光 タイの他にアメリカの禅センターにいらつしやったこともありますが、ここでは指導をなさっていたのですか。

黒田 向こうの人たちは一生懸命なわけですよ。

金光 アメリカの方たち？

黒田 ええ、日本の人の多くは仕方なしにやってるんですよ。結論言っちゃうと。向こうの私たちは、好きでやっているわけですよ。全然レベルが違うわけです。概して、坐禅をするような人はプライドの高い人が多いんです。俺は、

何年坐った、というような。それは大事なんだから、自分も、自分が本当に救われなければダメなんです。それが根底。ですから、最初も申し上げたように、いい師匠に指導していただければだめなんです。アメリカの場合には、百年、まだ、アメリカに仏教が伝わってから百一三十年、鈴木大拙先生が最初に大乘起信論だいじょうきしんろんを翻訳されたのが、二十四、五歳の頃。禅の言葉は百数十年前から知識としては入っているんですよ。アメリカには。しかし、正式に、それがどういうものかを説ける人がいなかったんです。それだけなんです。それを戦後、曹洞宗とか臨済宗とか、私の次兄、前角博雄老師とか、鈴木俊隆老師、片桐大忍先生、そういう方々がアメリカと密着してこの三、四十年くらいで完全に定着させたんですね。わかりやすく。安谷白雲老師とか宇坂光龍老師とかいう方々が非常にわかりやすく説いた。たとえば、日本の場合では、

臨済禅とか曹洞禅とかの比較などはなかなか言えない。しかし、そういう単純な質問に、(私もアメリカにいるとき、そういう先生の脇にいましたから、聞いていたのですが)、そういうとき先生は、どう答えるかという、日本の本に書かれているかどうかは別として、曹洞禅というのは、春雨で、臨済というのは、吹雪。そういう表現をしたんですね。それを兄が訳しますと、アメリカの方はわからないようでもわかるんです。フィーリングとして。違うように見えて、同じ「水」じゃないか、と。なぜ違うというのか、本質は変わらないじゃないか、と。アメリカの人にはそういう上手な説明をするとすぐわかる。日本はただ坐るんだとか、只管打坐しかんたざとか言うけど、じゃあ只管打坐とは何かって、私は言うんですよ。日本からは、アメリカ人に教えられるような表現できるような、いい指導者がどんどん出て世界の中に入って行ってほしい。

英語がわからなくても、カタコトでも、日本語でも、一生懸命説明をすれば、自然と―心ですから―そんなことは、アメリカでは三十年以上前からやっているんだから、日本はもつとしっかりしなくちゃだめだ、と思いますね。アメリカでは本当にいろいろな点で違っています。自給自足ですから。我々が正当に評価しないと。禅堂といったって馬小屋を改造したものだし、私たちがつくった禅センターは民家の歯医者さんの家を買ったもの。柱だけ残して、そこで坐禅しているんですから。形にこだわらないんです。日本みたいに。形でなく、心を説くことを、アメリカの方が先にやっているんで、これももう、まったく日本は遅れている。

しかし、日本もほめるべきところがありますよ。福井の発心寺さんとか、四国の端心寺さんとか、日本でもがんばって外国の方を受け入れているところはたくさんありますから。日本に

もそのように世界に開けてはいるんですが、アメリカでは十五カ国ぐらい来て摂心やっているんですから。私もそこにいましたが。うちの育英会の留学僧も出し、私も坐禅していて、世界は一つと感じましたね。

金光 やはりそういうところで生活し、生きた禅の修行をしている方の側から交流しなきゃいかん？

黒田 ええ、そこが僕の原点でもあるわけなんです。やはり、「人的交流」これをしなければ世界はだめだ、というのが僕の心です。だから私はどんどん若い人々に外国へ留学してもらい、また、受け入れられるのならば多少のことなら何とかしてさしあげたい。そうした、人的交流―世界を結ぶには人材の交流以外にありえないと思っています。だから、どんなに自分が苦しくとも、どんなことがあっても、実行しなければと思っている。いうことは誰でもできる。

世界中の人がいろいろ言っているけれど、実践しなければ。そのためには、命を投げうって、裸になって尽くしていきたい。それには、何もない方がいいと思っています。

金光　それが、こちらの横浜の善光寺さんが出てきて、たしか今三十周年ですね。三十年たった現在でのお気持ちということになるわけですね。どうも、ありがとうございます。

『留学生交流を支えて』—お話は、横浜善光寺の住職・黒田武志さん、聞き手は金光寿郎さんでした。

註　NHK第一ラジオ放送　十月十五日放送  
「心の時代」より収録・加筆



## 立正佼成会開祖 庭野日敬先生が遷化

立正佼成会開祖の庭野日敬先生が、十月四日、東京都中野区の佼成病院で老衰のため遷化されました。九十二歳。

庭野先生は黒田方丈ともご縁が深く、善光寺に温かく力強いご支援をお寄せ戴いていました。悲しみは筆舌に尽くし難く、先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

庭野先生は明治三十九年十一月十五日、新潟県十日町市生まれ。人に尽くすことを何よりの喜びとした祖父や、「なるべく暇がなくて給料の安い、骨の折れる所へ奉公するように」という父の薫陶を受け、十六歳の夏に上京。その後、恩師である新井助信先生や長沼政さん（のちの長沼妙佼協祖）との出会いを経て、昭和十三年三月五日、三十一歳の時に立正交成会（三十五年から教団名の「交」を「佼」に改称）を創立。以来、『法華経』に帰依し、慈悲の実践に徹してこられました。「真の平和は宗教心の涵養による以外にない」との信念から、「国民皆信仰」「明るい社会づくり運動」を提唱。また、平和のための宗教協力を国内外において推進されました。日本の宗教者としては世界的な知名度を有しておられる数少ないお一人でした。

葬儀・告別式は十月十日、東京都杉並区の立正佼成会大聖堂で営まれました。なお、平成三年十一月十五日、法燈継承式により長男の庭野日鑽氏が会長位。



# ブラフマ・カマル

黙仙寺住職  
明治大学文学部教授  
阿部 慈園

(一)

月明く ブラフマ・カマル 神々と

満月の夜にだけ咲く花がある。日中は、その花弁をすぼめる。一見、蓮に似ている。プーナ(Poona,当地ではプネーPune)の人々は「ブラフマ・カマル(Brahma-Kamala)」と呼ぶ。「梵の蓮はちす」とでも訳せようか。「梵」には、「宇宙の創造神」としての「ブラフマー(Brahma,梵天)」

という意味があるから、「梵天がくれた蓮」あるいは「梵天が咲かせた蓮」という意味を持つかもしれない。また、「梵」には、「清浄なもの」「神聖なもの」という意味もあるから、「清らかな蓮」「神々しい蓮」も可能な意味であろう。純白にして、大輪。その直径は、二〇センチメートルくらい。花弁群は、花芯を二重、三重にとりかこみ、花弁の数は約二十五。鼻を寄せると、上品な芳香が鼻孔をくすぐる。しかし、この花は蓮科に属する花ではない。

プーナにいた頃、葉の形がどうもサボテンに似ているから、ひよつとしたらサボテンの一種かもしれない、と思つて、カナダ人の友だちに聞いてみたら、はたしてそうだった。帰国して、辞書『広辞苑』を開いてみると、サボテン科クジャクサボテン類の一種である(註2)という。事実、この花は、蓮のように水栽培ではなく、ほとんどが鉢植えだ。茎は平たく葉状。サボテンに似ている。ただし、トゲはない。北インド、クルクシェートラ(Kurukshetra)で見た深紅のバラも美事だったが、満月の光を浴びて、ほんなりと咲くこの花は、神々しさすら覚えた。

日本では「月下美人」とこの花は、呼ばれている。誰が名づけたのか、不明であるが、言い得て妙である。諸橋哲次氏の『大漢和辞典』にも、この語は見当たらないから、漢語ではないらしい。恐らく、明治以後の成語であろうか。

新聞紙上で、一度だけこの花を見たことがあ

るが、夜咲いたかと思うと、すぐしぼんでしまふうそうだ。『広辞苑』は、「四時間くらいしか咲いていない」という。インドでは、もう少し長いように思う。気候のせいであろうか。彼の地では、年一回だけ咲くのではなく、雨季のはじめの六月から、二、三カ月(花によつては数カ月)にわたつて、次々と花をつける。この花は、サボテン科に属することからも、南方起源であろうか。

## (二)

「ブラフマ・カマル」のほかに「クリシュナ・カマル(Kṛṣṇa-Kamala)」も、好きな花の一つだ。「クリシュナ」は、梵天ブラフマーが創造した宇宙を維持する神「ヴィシュヌ(Viṣṇu)」の化身の一つで、絵では、いつも横笛を手にし、紫黒色に描かれる。「クリシュナ」という語には「黒」「暗黒色」という意味があるから、この神

は白色系のアーリア人の神ではなく、肌の色がより黒い原住民（ドラヴィダ人など）が信奉していた神であろうと思われる。

この花は、紫紺色で、直径は一〇センチほどだ。花卉は六、七枚。昼間咲く。これも蓮科ではなく、つた科に属するようだ。花の色、大きさ、花のつき方が「紫鉄線」に似ている。つたかずらの類であろうか。いつだったか、V. V. ゴーカレー先生を訪ねた時、先生が、

「ミスター・アベ、これはクリシュナ・カマルというんだ。ハッハー」

と言いながら、この花を手わたしてくださったことがあった。「紫」は、インドでは「クリシュナの色」のような気がする。

「牛の国」インドは、また、「花の国」と言えるかもしれない。いろんな種類の花が咲き乱れ、年中、花の絶えることを知らない。日本では一鉢三千円もするブーゲンビリヤが、そこかしこ

に咲いている。赤に、黄に、白に。橙色のもあった。黒紫のもどこかで見たように記憶する。

道を歩く女の人が、垣根越しに咲く花の一枝を手折っても、一寸庭に足を踏み入れて、気に入った花の一つ、二つを摘んで、髪ぐしにさしても、だれも何にも言わない。大らかで、いいなあと思う。花が多いから、花が安い。十ルピー（約三百円）も出せば、バラが十本も手に入る。

インドの数多い、麗しい花々のうちで、ブラフマ・カマル、クリシュナ・カマルは、小生にとって「花中の花 (*puspānam puspā*)」だ。

(三)

「釈尊の国」インドと、私が関わりを持ってから七年の星霜が流れた。プーナ大学大学院のサンスクリット科に留学渡印したのが、一九七四年十一月。パーリ学の泰斗 P. V. バパット博

士に就いて『清浄道論 (Visuddhimagga)』に関する論文をまとめ、同大学に提出したのが、七年三月。審査を経て、学位が授与されたのが、九カ月後の同年十二月八日。バンダルカル研究所からの論文出版のために、三度<sup>みなび</sup>渡印したのが八〇年三月。校正・若干の増補等で一カ年を費し、八一年二月二五日にやっと刊行を見た。

正味、四年半をインドに過ごしたことになる。少しく、インド人的になってしまったかもしれない。帰国後、思っていることを齒に衣着せずついてしまう自分に、時々気づく。日本人どうし、それほど多くの言葉を費さなくとも、互いに察してしまう。ドナルド・キーン氏は、意味をあえて明確にしない、あいまいな表現がむしろ、日本語らしい日本語であるとさえいう。

しかし、インドでは、当地の人に対してのみならず、欧米人とつきあっていると、どうして Yes、No がはっきりしてくる。また、



はつきりさせねばならない。No<sup>o</sup>ならば、その理由を。また意見を求められたら、一応自分の確たるものを用意しておかねばならない。寡黙は決して美德ではなく、あいまは後で災いをもたらす。

インドへ何かを学びにくる欧米人には、ほとんどないことだが、それでも東洋人に対する優越感（優越感）は潜在的には持っているようである。一度だけ、*「Jap<sup>o</sup>」*と言われたことがあった。もちろん、すぐ *「Japanese<sup>o</sup>」* と言い直したが。そんな彼らと、ほぼ対等につきあつていくには、自分の主張を見解をある程度明確に言えないと、なめられることがある。流暢でなくとも、自信を持って、相手の目をしっかり見つめ、迫力を持って語る。相手は「こいつは、自分の意見を持っているな」という目をする。

インドで行動する場合、英語が話せれば、それで十分ことたれるが、欧米人の留学生はほと

んどが、インドの近代語の一つをマスターしようとする。仏教論理学を専門とするドイツ人の留学生が、マラーティー語を学んでいる。彼女は、

「インドの近代語のうち、一つでもできないと、恥だから」

と言う。日本からの留学生は反対に、そのほとんどがインドの原地語を学ぼうとしない。短期間の間に、専門分野のテキストをできるだけ読んだ方が得策であり、インドの近代語をたえ勉強して帰国したとしても、それでメシが食えるわけではないからだ。

#### (四)

自分の論文が活字化されることの、恐こおさと喜びを交互に感じながら、一年の月満ちて、私の処女作が世に出された。その間、校組で、バンドルカル（バンドルカル）のプレスのおやじと、しばしば口論し

た。私が若いせいもあり、おやじはすでに何十冊も校組しているから、自分独自の美学を著者である私に押しつけるのだ。二、三週間ゲラなしで、「どうしたのか」と思っただけでプレスに行く、「活字が底について、近日中に、ボンベイへ活字を買いに行く」と言う。

出版費用のことで、事務局のボスともみあったこともあった。契約した費用より、さらに三、四割を要求したので、一時はインドで出版することを断念しようかと思つたほどだ。

二月二五日（一九八一年）、長年住み慣れた研究所ゲストハウスのメインホールで、出版記念パーティーが開かれた。七〇名ほどが来てくれた。お世話になつた先生方、米・独・日・カナダ等からの留学生、研究所職員、それに下働きのピューンたち。インド人の奥さんになつてゐる里子・ダムレーさんが、六器の生花を美しく

生けて下さつた。小さな日本が、来客の目をしばし酔わせた。インドティーとスナック、それにぶどう少々がふるまわれた。私の資力では、それがせいぜいであつた。

先生方、友人たちはともかく、その種のパーティーには参加できないピューンたち（非バラモン階層）を、私は席に着けさせたかつた。いつも彼らは、給仕をするか、隅の方に立つて、飲み食いを見ているだけなのだ。そして、パーティーのあと、残り物を少しずつ分けあつて食べている。私は、そんな彼らを一度パーティーに招待したかつた。やせこけて、目ばかりギョロギョロしている彼らと同じテーブルに着いて、茶が飲みたかつた。

パーティーは、七〇名が一堂に会することはなく、三回に分けてなされた。第一回目、先生方と留学生たち、第二回目、研究所職員及びプレスの連中。ピューンたちは、結局メイン

ティーブルには着かなかつた。しかし、サイドテーブルで、ビスケットをほおぼりつつ茶を飲んでゐた。研究所夜警のガンパット（マーリー＝花作師カースト）のほほのゆるみが、ぶどうの一房一房を口に運んでゐた。ゲストハウスの鍵を預かるトプター（農民カースト）のやさしい目が、今も思い出される。

一八〇ページの小著は、バパット先生に捧げられた。ココナツツとブーケ（グッチ）を添えて。八十七歳の老大学者に捧ぐには、拙いものであつたが、先生は鳩のような目をなごませて受けて下さつた。私の心には、七年の青春を燃やし尽くした、といういささかの感慨があつた。ミセス・バパットには、オーランガバード・シヨールとココナツツを手渡した。

グル（Guru, 師）は、弟子に、直接「法（Dharma）」を教示するが、グルの夫人は、間接的に弟子の面倒を見る（例えば、お茶やお菓子等をふ

るまう）ので、学業が修了した時には、オーランガバード・シヨール（三〇ルピーくらい）を奥様にプレゼントするのが、当地のならわしとされる。

奥様には、ずいぶんとかわいがつて頂いた。帰国が近くなると、しきりに、

「何故、インド人の女の子を嫁にして日本へ連れて行かないのか」

と言われて、返答に困つたことがあつた。十二歳の時、先生（当時二十歳）に嫁がれたので、英語を話されない。もつぱら、小生とマラーティー語でやりとりする。おかげで、小生のマラーティー語は、少しく上達した。

シヨールとココナツツを手渡した時、夫人は、いささかの驚きと慈しみのまなざしで、私をじつと見つめてくれた。今年、満八十歳になられる。

(五)

「クリシュナル・カマル」の絵が入手できなくて、本の表紙のイラストは、「ブラフマ・カマル」にした。アメリカからのジム・レインを通して、カナダ人のアーティスト、ジャック・アングースンに、そのイラストを頼んだ。彼は、一つ返事で「OK」してくれた。五つ六つの草案を描いてくれ、

「一つを選べ」

と言う。

「これ！」

と指したものが、彼自身一番気に入っていたものと一致した。汗顔ものの小著に、彼は「花」を添えてくれた。あとで、

「謝礼を払いたい」

と言っても、

「そんなものはいらない」

と言う。ひどくうれしかった。彼の奥さんはサンスクリット学者で、彼女のインド留学についできたのだ。飄々乎として鶴のような男だった。本の表紙の裏には、「渡水看花」の四文字を『Over the Ocean, Seethe Flower』の英訳を添えて、引用した。

註 (1) 本稿は「梵の花びら」(『東海佛教』第二十七輯、昭和五十七年六月、東海印度学仏教学会)を改題、補筆訂正したものであることをおことわりする。

(2) 『広辞苑』六九一ページ。



# アメリカ禅センター滞在を終えて

## —— 帰国報告 ——

福田 智昭

私の師、善光寺方丈の御配慮を頂き、去る六月四日、日本を出発。二日間は、善光寺方丈御夫妻を始めとする禅センター訪問の御一行とご一緒させて頂き、善光寺育英会留学僧として、その後も現地に留まり、ロサンゼルス禅センターで勉強を続けておられる遠藤博因師と行動を共にさせて頂き、各地を見学した後、ロサンゼルス禅センターに約三カ月間滞在し、八月二十

七日、帰国到しました。

ロサンゼルス禅センターでは六月中旬に慧玉ウェンディー師の主管就任の晋山式が行なわれ、私も典座の一員として展待の仕事に従事し、一応の役割をまっとうさせて頂きました。その後、約二週間を、マウンテン禅センターに赴き、修行中のアメリカ人と寝食を共にし、貴重な体験をさせて頂きました。ロサンゼルス禅センタ

ーとは異なり、自然につつまれたマウンテン禅センターは、メンバーのアメリカ人も若い人が中心で、日本の禅や文化に対する関心も旺盛で、今後のアメリカ禅の可能性を感じました。ロサンゼルス禅センターに滞在中は、曹洞宗北米布教總監の秋葉老師の要請もあって、禅宗寺の施食会の法要を始め、葬儀、その他法要に随喜させて頂き、誠に有意義な三カ月間を過ごすことが出来ました。以下、その間の体験を簡単にまとめ、帰国報告と致します。

#### (一) ロサンゼルス禅センター(ZCLA) での生活

ロサンゼルス禅センターは、市の中心街を離れたNormandie Ave.にある。メキシカンの人々の住む街の続きにあり、少し足を運べば、朝鮮街(Korean town)も近い。自然食を中心に取り扱うスーパー・マーケットもあり、日本

食が一種のブームのせいもあり、日本人の日常生活に必要な食品が殆どすべて揃っている。

それらの多くは、日本からの輸入ではなく、アメリカ産のもの、あるいはその加工品であるが、日本のものと何等変わりない味のもので、異和感はなかった。日本食が、ヘルシー食として、いかにアメリカ人にもてはやされているかが、感じ取られるものであった。

ロスの禅センターでの生活は、特別の場合を除き、各自が自炊をし、僧堂のような共同生活ではない。一日の生活は、朝五時の振鈴に始まり、坐禅、朝課の後、各自、朝食をとり九時より作務に入り、戸外、屋内の掃除、建物の補修工事等々、一日の予定によって行なわれる。昼食後の午後は自由な時間である。

夜は、夜坐があり、止宿の者の他、日中、会社勤務やそれぞれの仕事を持った人々も集まって坐禅に参加する。一炷の夜坐の後、主管の法

話 (Dharma talk) があり、質疑応答なども行なわれる。以上が大雑把に見た一日の行事の流れである。週末の土曜、日曜日は参禅会のようなものが行なわれ、参加者は昼食を共にする。このセンターは、単に禅の修行道場であるだけではなく、超宗教的な人々の交流の場でもある。

例えば、ユダヤ教のラビ (教師) のユダヤ教の聖典の解説などが行なわれ、私達も聴講した。その他にもいろいろな講座が開設される。このセンターは、総合的宗教文化の交流や集いのためにも利用されるのである。主管の慧玉師はユダヤ教のラビやキリスト教の神父などとの交流も行なっているようである。当センターの坐禅の際も、独参や考案も日常的に行なわれ、臨済禅の方法も採り入れられている。この点は、日本の禅院とは異なり坐禅が日常的なものとして人々に参加の機会が与えられ、各自の生き方の上で、真剣に禅を求めている様子が、短い滞在

によっても理解できたように思う。

滞在中の六月十四日、慧玉師の晋山式が行なわれ、全米各地の故前角博雄老師の法嗣の弟子や法孫の方々が随喜された。私はその展待のためにアメリカ人数名と共に典座の役に就き奉仕する機会を与えられた。日本とは異なり、いわゆる懐石料理的なものではなく、野菜を用いた、いかにもアメリカ的な料理であった。私は私で精進寿司、のり巻、てんぷらなどを作り供した。永平寺大庫院にいたころの料理の垂流的なものであったが、アメリカ人にとって物珍らしい物もあったのか、ある程度喜ばれたようだった。晋山式は中庭に舞台を設けて行なわれた。また七月には首座法戦式つまり Dharma Battle、日本禅院の形式化された儀礼的傾向の強い様式とは異なり、各自の日常の宗教体験から発生する疑問、疑義を質し合う問答本来の意義が継承されたもので、故前角老師が開教体験の中で苦



勞の末に会得された方法を採り入れられたものが伝承されたものだと思う。

## (二) マウンテン禅センター (ZMC) での 体験

シティー・センターで約二カ月を過ごした後、八月初旬、先輩の遠藤博因師に伴なわれ、百数十マイル離れたマウンテン・センターに赴き、約二週間滞在し、アメリカ人修行者や参禅の人々と生活を共にした。マウンテン・センターの方はかなりの高地にあり、境内の背後には高い岩山がそびえ立っている。松林に囲まれ、乾燥地帯にあるため、ところどころ岩や大地が露出しているが、境内は整地されている。自然のまっただ中で市塵をさけて静寂の中に建造物がある。このような人里離れた場所に電気を引き、自然の湧き水を生活用水としている。この場所に道場を開かれた前角老師の御苦勞が偲ばれ

た。

当然、その事業を理解され、多くの資助された中でも、善光寺、黒田御老師の支援の大きさが実感された。野性の動物が多く棲息し、日中でも鹿が活動しているのを見た。リスが枝々をとり廻り、私の目の前で鷹がリスをその鋭い爪でつかみ取り飛び去るショッキングな光景も眼にした。夜にはマウンテン・ライオン（クーガー）が、センターの回りにも出没すると言う。月夜には遠くでコヨーテか山犬の吠き声も、夜陰の中で耳にした。近くの街からは二、三十マイルぐらい離れているから、車なしでは絶対に生活はできない。ちょうど夏期休暇のため、大学生や、若い勤め人で休みを取って安居に参加している人もいた。総員二十名が生活し、修行に努め、前角老師の法嗣で主管の天心フレッチャー師と夫人の清泉師が中心となって運営している。安居や摂心の際は会員はそれぞれいく

らか会費を払って参加し、僧堂に準じた生活を実践している。各自作務を行ない、可能なものはすべて手作りで、テーブル、椅子等、生活用具も木工作務で作ってしまう。焼香机、木版なども手作りである。私は滞在中、作務の中で典座を担当し、日本料理を手始めに、ボタ餅の類を手掛け、帰り際には残りの小豆を使い水羊羹を数本作ってきた。拝登の際、私は温かく迎えられる、すぐに皆んなと意志を通じることができた。二週間もあつという間に過ぎ去ってしまった。

振鈴は午前四時二十分で、坐禅、朝課、作務と続き、昼食後は坐禅、晩課となっており、夜は夜坐と僧堂のような生活を送っている。独参も行なわれ、それぞれ熱心に禅の奥義を究めようと真剣である。中には自分の全財産を捨て出家してサンガの一員となった人もいるようである。日本の禅が、故前角老師の長年の苦勞によ

って、この地に根づき、多くの人々がそれぞれの意志によって安居や撰心に参加し、あるいは完全な出家者のな生活を送り、日々精進している姿を見るにつけ、先駆者、前角老師の偉大な業績を実感し、感動を抑えることができなかった。

二週間が過ぎ、遠藤師のお迎えを頂き、ロスのシティー・センターに帰ることとなり、別れを告げると、涙を眼に浮かべ別れを惜しんで下さる人々もいた。主管の天心師からは、来年必ず再訪し、共に修行に精進するよう薦められた。私にとつて感動の旅であり、楽しい二週間の滞在であった。

### (三) まとめ

アメリカ禅仏教会に大山のようにそびえ立つ前角博雄老師が、遷化されて以来、法嗣、法孫のアメリカの人々は、どのように法を継承し、

維持発展させるために、日々どのような活動を展開しているかが私にとって最大の関心事であった。この度、善光寺方丈様の御配慮によって、三カ月間の禅センターでの貴重な体験をさせて頂けたことは、私にとって幸甚この上ないことであり深く感謝申し上げたい。

シティー・センター、マウンテン・センターとそれぞれの置かれている地域の環境にに応じて、その維持発展に努力している様子を知ることができた。強力、且つ熱意に燃えた中心的な指導者が遷化されて以来、これからの禅センターのあり方において、まさに現在では、最も重大な過渡期にあると言えるのではないかと思う。時代的、社会的、文化的環境に応じて、宗教は変容し、展開して行くのはインド仏教から中国仏教へ、中国仏教から日本仏教へと移行する過程における変容、発展の歴史を概観しても分る通りである。しかし、見失なつてはいけな根

本の仏教のありようがある筈である。アメリカ禅の実相を管見しただけでは、全体を論じる訳にはいかないが、前角老師の播き育ててこられた禅が、今後どのように発展していくか、私達、日本仏教者の立場から注意深く見守り、協力し、手を結び、その発展に力となつて行くべきだと思ふ。前角老師の存在は、直接の弟子方のみでなく、孫弟子の方々にとつても、カリスマ的尊崇の対象であり、アメリカ宗教界にとつても稀有な存在として認められているのではないかと思ふ。センターのブック・ストアには老師の伝記が並べられていた。また、この前角老師の偉業を力強く支えてこられた善光寺方丈様に対する、前角老師の法嗣の方々の期待に燃えている熱いまなざしを感じざるをえなかつた。

## 中村元先生のご逝去

インド哲学、仏教学、比較思想研究の世界的権威、東京大学名誉教授で東方学院院长の中村元先生が、十月十日、急性腎不全のため、東京都杉並区のご自宅で、ご逝去されました。八十六歳でした。

中村先生は善光寺留学僧育英会の名譽顧問をお務め戴き、留学僧育英会に対する深い理解と温かい眼差を常に注いで下さいました。育英生の論文集には玉稿を賜り、その将来に大きな期待を寄せられていることがひしひしと伝わって参りました。善光寺は掛け替えのない大切な先生を亡くし、大きな悲しみで一杯です。心より哀悼の詞を申し上げます。

中村先生は大正元年十一月二十八日、鳥根県松江市生まれ。旧制一高を経て東京帝国大学印度哲学・梵文学科へ進学。昭和十一年卒業。同大助教授を経て二十九年教授に就任、四十八年定年退官。スタンフォード、ハーバード大学等の客員教授も歴任。比較思想学会初代会長、日印文化協会会長を務められました。

昭和三十二年、『初期ヴェーダ哲学史』（全四巻）で学士院恩賜賞、五十年に『仏教語大辞典』で仏教伝道文化賞を受賞。四十九年紫綬褒章、五十二年文化勲章、五十九年勲一等瑞宝章を受賞されています。東大退官前の四十五年には、東洋思想の研究とその普及のため財団法人東方研究会を設立し、理事長に就任。退官後は東方学院を開講し、自ら院長となって一般や後進の指導に当たって来られました。著書多数。



# 現代アメリカ禅仏教における一考察

〈文化的受容とそのダイナミズムについて〉

横浜善光寺育英僧 遠藤 博因

はじめに

アメリカ合衆国において「ZEN」の三文字は、「YOGA」と並んで東洋の精神を表現する代名詞になるぐらいまで広く膾炙された言葉である。その実アメリカには日本からの禅だけではなく韓国、中国、台湾そしてベトナムからの禅が入り込みそれぞれに修行されている。そんな中で「Zen」という日本語の表記が代表されるようになったのは、日本からの禅がアジア諸

国に先駆けて紹介されたからである。その最初の架け橋となったのが一八九三年にシカゴで開催された「世界宗教者会議」における釈宗演の講演、そして鈴木大拙による一連の翻訳と自らの英文による著作である。その後主に知識層を中心に禅は東洋精神の象徴として学術的に研究され、その広がりを増してゆくことになった。

しかし実際にアメリカにおいて禅が白人の間で大きな関心を惹いたのは、一九六〇年代後半から七〇年代にかけてである。時代は五〇年代

の黄金期を謳歌したのだが、ベトナム戦争による社会の動揺、平和運動、ヒッピームーブメント、等があいまじり振り子現象とも呼ばれるように人々の関心は物的なものから精神的のものへと大きくシフトしていった。そのような時代背景の元、悟りの体験や理論では把握できない公案といった禅の要素が人々の注目を集めるようになった。その魅力的な側面や人々の動機については、一考に値するがここでは、この時期「ZEN」は爆発的に人々の関心を惹いた事実を記すまでにとどめたい。そして、この時期日本から渡った僧侶の中で白人修行者を中心にサンガ（ここでは禅を基本とする修行を行う団体、グループ、寺院、禅センター、禅道場すべてを含めてサンガとする）、を確立した方は、曹洞宗系では鈴木俊隆老師、片桐大忍老師、前角博雄老師、臨済宗系では佐々木承周老師、島野老師の名を挙げる事ができる。そしてこれら

の老師の薫陶を受けた修行者の中から法を嗣ぐ者も出始めた。これがアメリカにおける第二世代の僧侶、そして指導者である。これらのアメリカ人僧は七〇年代後半から八〇年代にかけて師の元を離れ独立してサンガを設立するようになる。現在にいたっては、これらの僧から弟子へと法の伝授が行われる段階にきている。第三世代の禅の指導者たる僧の出現である。もちろんこの僧侶達も第一世代の師の元で修行を始め、十年、二十年という修行期間を経て第二世代の師より法を嗣いでいるケースが今のところ主である。これが現在のアメリカ禅仏教のメインストリームである（この論考では日本からの流れを汲む禅サンガを主に対象として話を進める）。しかし、アメリカ人でありながら言葉の壁を乗り越え、日本の僧堂において修行を終え、再びアメリカに戻り禅の指導にあたっている僧侶もいるということを一言付け加えておく。

ここでは副題にも記したとおり、文化変容とそのダイナミズム、つまり禅の受容を白人社会の文化的価値観と付き合わせてその根付きの度合い、方向性を考察してみたい。さらにはアメリカ禅の現在を知ることがひいては日本の伝統的仏教教団の置かれている状況を客観的に省察し、時代の趨勢に適應するヒントを与えてくれるのではないであろうかと考える次第である。

## 本論

現代アメリカ禅仏教を表現するのに最もふさわしい三つの特徴、(1)在家修行を基盤とするデモクラシズム、(2)女性指導者、修行者の活躍によりフェミニズム的要素、(3)社会福祉活動を通じての修行と現実社会への統合、をあげそれぞれどのような文化的価値観が背景になっているのかを論じてみたい。

### (1)在家修行を基盤としたデモクラシズム

アメリカ禅を語るにおいて在家修行という要素は大変重要な位置を占める。ほとんどのサンガはごく少数の出家の僧侶が指導者的役割を果たし、残りのメンバーやスタッフは在家修行者として禅を行ずるという構図である。この場合、出家僧といってもサンガの規模や個人的事情に応じてまちまちであるが、僧侶として専属にそのサンガで指導的役割を担っているケースは少なく、ゼン・ティーチャーといえども実際には何らかの生業と両立してゆかなければいけないようなサンガ全体として多く見られる。つまりサンガを構成し運営する実質的基盤は在家修行者達なのである。

その具体的方法が、理事会やメンバーシップによるサンガの運営である。理事会は在家修行者、つまりそのサンガのメンバーから投票等の民主的手段で選ばれる。そしてその理事会の決定により指導陣(堂長)を選任し雇うことをし

ている。この構造はサンガの規模によって少し異なり、大規模な運営をしているサンガほど理事会の権限が大きいようである。例えば、アメリカで最も大規模な運営を行っているサンフランシスコ禅センターでは、三カ所の禅センターを二人の堂長がローテーションを組んで指導に当たり、その下に僧堂でいうところの単頭、維那、知客などのスタッフ陣が雇われる形になっている。またメンバーシップ二五人以下という禅グループは別として、比較的小規模の禅サンガにおいても理事会の制度が設けられているようである。

さらにカウンスル (council) やプラクティス・サークル (practice circle) と呼ばれるグループミーティングを行っているサンガもしばしば見受けられる。指導者、そして在家修行者が車座になってその時の課題について自由に意見を交換し合うというものである。いわば原始仏

教教団において行われてきた布薩のようなものである。そこで出てきた意見を智慧としてサンガの運営に個人の修行の向上に反映させようというものである。それぞれのサンガやその時の課題によって進行の仕方や取り決めが少しずつ異なるようであるが、共通していえることが発言の機会が保証され (沈黙も一つの発言の表現)、必ずしも結論にいたる必要はないという具合に進められている。

このようにアメリカの禅サンガにおいては指導者の主導権は比較的小さく、メンバー一人一人がサンガを運営する重要な要素となるような構図が見える。

## (2) サンガにおける女性の活躍とフェミニズム

アメリカのサンガがそこに帰属する人々によって民主的に運営されているという現状と同じく、そこに男女における社会的性別、つまりジェンダーによる修行における利益、不利益といっ

たものもほとんど見られないのが現状である。

まずアメリカのサンガではおしなべて男女半々の割合でメンバーが構成されている。この状況をジョン・大道・ローリー師は自身の著書の中で次のように述べている。「全米におけるほとんどの修行道場で四〇％ちかくが女性です。

私たちの禅堂ではこの比率はむしろ逆転していて六〇％の女性と四〇％の男性の比率です。」また私自身が一九九七年に七カ所（カリフォルニア、オレゴン、ユタ、コロラド州）の禅サンガ修行者にアンケートをとった結果、寄せられた回答者九〇人の男女比は五〇％対四二・二％であった（無回答七・八％）。さらに女性の指導者の活躍も目立つ。これは全米の禅サンガ（日本の禅の流れをくむサンガ）約一二〇箇所のうち女性が主管を務めるサンガは二六箇所であった。なかなか数字にはでないのであるが、女性の修行者がサンガの運営の重要な部分に加わっ

ていたり、準指導者的役割をはたしているケースがかなり見受けられる。そんな中で仏教史、特に禅における歴史上の尼僧や女性修行者について勉強会を開き、三国歴代祖師があるように女性の系譜をつくりあげたりする指導者もいる。

そして修行体系における重点の移行である。禅サンガのなかでは男性的ともいえる伝統的な坐禅修行（只管打坐・公案）を行じながらも、女性的要素を含んだヴィパサナ・メディテーション（今、ここに意識を集中してゆく瞑想）や心の中で愛情や優しさを他者に振り向けるチベットの瞑想法を採り入れたりしているサンガも増えてきている。

アメリカ仏教全般に対していえるフェミニズム化について、ジャック・コンフィールド師は必ずしも性差別主義や家長制を排除しようといった動きではない。無所得や悟りへの研鑽を求

めるより、自己とその身体、他者、サンガ、地球との関わり合いや癒しについて修行することにより、深遠なる仏法を探究してゆこうという動きであると述べている。つまり仏法における女性的要素を発掘し、修行してゆくということではないだろうかと私自身考える。

### (3) 社会福祉活動にみられる友愛主義

フェミニズムがアメリカ禅の色合いを内側から塗り替えているのに対し、ボランティアリズムや友愛主義という宗教的価値観が禅堂に閉じこめられた修行を現実社会へと引きずり出している様子が見受けられる。まず第一に、ほとんどの禅サンガにおいて地域へのコミュニティ活動への参加が行われていることである。その具体的例をあげると、地域で行われるストーリートクリーニング、スーパークITCHン（ホームレスへの炊き出し）、プリズンプログラム（刑務所における仏教徒の信仰の援助、メデイテーション

クラスの開催）、フードバンクへの参加、クリスマス時期の老人ホームへの慰問などである。たがいのどのサンガにおいても少なくとも一つや二つはこのような地域社会と接する活動を行っている。

また禅サンガにおける付加的福祉活動が最終的には本業となってしまったケースもある。ニューヨーク禅コミュニティを主宰していた、ベルナード・徹玄・グラスマン師は、サンガの運営資金調達のためベーカーリーを起業し、ホームレスの人々を少しずつ雇い入れることを始めた。それが最終的にはホームレスの人々が必要な福祉援助を得、なおかつ個人が自立できるように職業訓練を行うところまでその活動を発展させていった。

また、末期患者のケアを行うホスピスを運営するサンガや、それと平行して患者の心の部分をサポートするケア・ギバーと呼ばれる人材の

育成を計っているサンガも出始めている。アメリカ

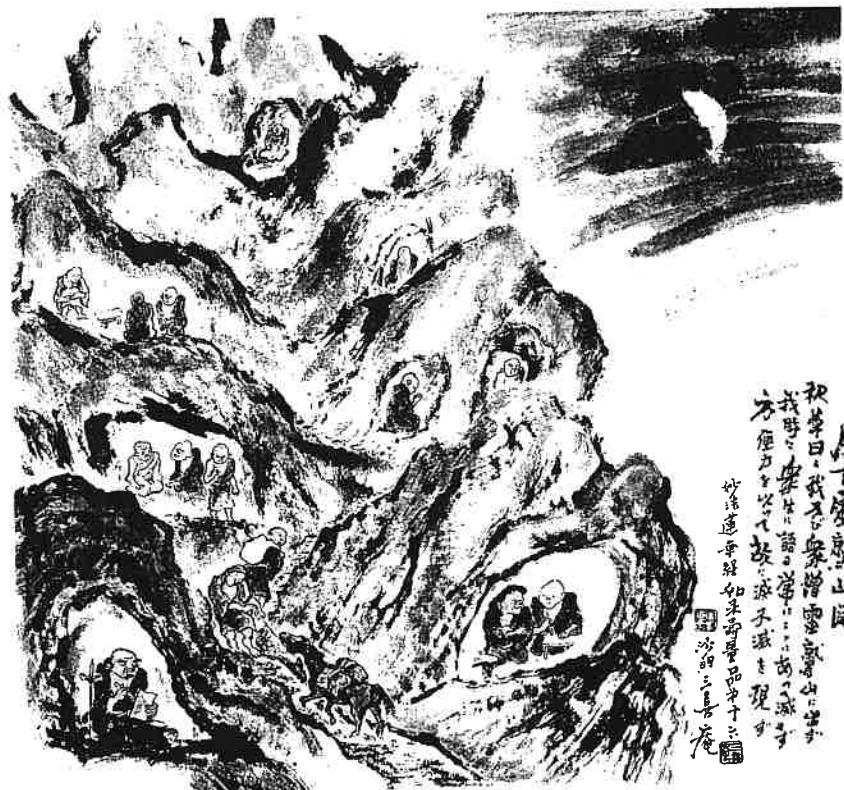
では伝統的に病院やホスピスにおいてユダヤ教会、キリスト教会を母体に聖職者、またはそれに準ずる人々が患者の心の部分のサポートを行うチャプレンシー・サービス (Chaplaincy Service) やパストラル・ケア (Pastoral Care) という制度が確立されているのである。このようにアメリカではサンガが何らかの地域の活動に取り組んでいることがあげられ、また坐禅修行からそちらの活動が本業になってゆくサンガのケースもある。アメリカにおける宗教的友愛主義の価値観から鑑みると、禅サンガにおいてその修行や活動形態が菩薩行や慈悲行として福祉活動に向けられることはごく自然な成り行きであると思われる。その実、仏教(小乗、大乘、チベット密教、無宗派) サンガ全体を通じて、近年エンゲージ・プディズムと呼ばれる福祉活動 (Social Action) を修行の基本としているサ

ンガの数が急速に増えている。

#### まとめ

以上アメリカ禅について民主主義、フェミニズム、友愛主義といった文化的価値を取り上げ、自国の土壌に禅が受容されていっている様子を述べさせていただいた。その意味するところはと問えば、アメリカに移植された禅は見事にその土地の人々の精神的、社会的必要性を満たしてきているということではないであろうか。

振り返って日本の伝統的仏教教団は、果たして現実社会に生きる人々の精神的、社会的ニーズを満たしているのだろうか。私自身、教化活動として実質的に何も行っていないのに等しい人間がこのような問いを発するのは誠にいかがましいのであるが、アメリカでの禅の実状を報告させていただくことで、皆様ににがしのかのヒントをお与えできれば幸いです。







横浜市内に希少価値ある新たなる聖地、誕生。

悠久の祈りの丘

横浜  
やすらぎの郷霊園

善光寺開創30周年記念事業

「横浜やすらぎの郷」  
受付開始

日当たりのよい、穏やかな丘陵に広がる「横浜やすらぎの郷霊園」は、晴れた日には霊峰富士や丹沢の山々を望む、まさにやすらぎの聖地です。園内には管理棟や道路を完備し、お参りされる方への配慮もしています。都心にも近く、車はもちろん、電車やバスの便も恵まれています。また、霊園の数が少ない近隣の方にとっては、まさに理想的な近さです。

## 宗教、宗派、国籍は問いません。

新規開園好評受付中。

市内としては希少価値のある宗派不問の霊園として誕生した「横浜やすらぎの郷霊園」。交通手段や周辺環境もよく、年回忌や法要にも対応できる設備を整えています。

代々受け継ぐ永代使用権。

規定の永代使用料をお納めいただきますと、永久に使用する権利を保証いたします。その際に永代使用承諾書をお渡しします。

やすらぎを守り続けるための管理料。

霊園の事務管理や清掃および環境整備（承諾証の区域を除きます）などに必要とするもので、あらかじめお納めしていただきます。

どなたでも、お申し込みできます。

ご希望の区画が決まりましたら、所定の申し込み用紙にご記入のうえ、お申し込みください。

●ご連絡・お問い合わせは  
善光寺 ☎045-845-1371  
管理事務所 ☎045-924-0210

## 附近 ご案内図



### 倫子夫人の実父が遷化

平成十一年七月十五日、善光寺奥方、倫子夫人の実父・加藤照雄老師（福井県三方町常在院東堂）が遷化されました。世寿九十三歳でした。密葬は十七日、本葬は十九日に、本寺に当たる臥龍院住職安藤良童師の導師で修行されました。加藤老師は昭和三十八年十一月から四十三年十一月まで二期六年間、大本山永平寺で単頭を勤められました。

### 総代会が開催されました

平成十一年度の総代会が八月二十四日（火）午後二時より開かれました。釈迦殿において堂頭老師導師による本尊上供のあと、客殿に席を移して議事が審議されました。今年度は「やすらぎの郷霊園」に関する経過報告、人事に関する事項が新しい話題となりました。





### 黒田住職の長女・素子さんがご結婚

黒田住職の長女・素子さんは婚約相整い、十月二十三日、前平和子様の三男・武男氏と結婚式を挙げられました。式師に駒沢女子大学学長の東隆眞先生を拝請、ご媒酌は(株)翠雲堂社長山口肇様でした。末永いお幸せをお祈りいたします。

ご寄付御礼

〈育英会寄付〉

|            |       |
|------------|-------|
| 松井 貞保殿     | 三十五万円 |
| 菊池 カツ殿     | 三十五万円 |
| 小澤 邦義殿     | 三十五万円 |
| 阿部 慈園殿     | 二十万円  |
| 仁田 明殿      | 二十万円  |
| 柴田 秀晃殿     | 十一万円  |
| 島田喜久子殿     | 十一万円  |
| 匿名 名殿      | 十万二千円 |
| 越石商店殿      | 十万円   |
| 宮林 昭彦殿     | 十万円   |
| 細井 勉殿      | 十万円   |
| 奈良 忠則殿     | 十万円   |
| 北館良之助殿     | 十万円   |
| 山口健而・満・義男殿 | 十万円   |
| 蒔田 恭治殿     | 十万円   |
| 角田 宗道殿     | 十万円   |
| 小川 光生殿     | 十万円   |

|          |     |
|----------|-----|
| 石川 成俊殿   | 十万円 |
| 亀野 哲雄殿   | 十万円 |
| 黒田 能勝殿   | 八万円 |
| 古谷 ミエ殿   | 七万円 |
| 谷口 武殿    | 六万円 |
| 岩波 道俊殿   | 六万円 |
| 穎田 力殿    | 五万円 |
| 岡田 哲道殿   | 五万円 |
| 山口 晴通殿   | 五万円 |
| 東武トラベル殿  | 五万円 |
| 百田 行雄殿   | 五万円 |
| 漆原 義哲殿   | 五万円 |
| 佐藤 勝宏殿   | 五万円 |
| 高橋孝一・則孝殿 | 五万円 |
| 宮田 林産殿   | 三万円 |
| 中村 正信殿   | 三万円 |
| 吉田喜代美殿   | 三万円 |
| 柳下葬儀社殿   | 三万円 |
| 見性 寺殿    | 三万円 |
| 河内 義宣殿   | 三万円 |

|             |     |
|-------------|-----|
| 篁 素明殿       | 三万円 |
| 関 ツル殿       | 三万円 |
| 小林 碩順殿      | 三万円 |
| 窪田 成円殿      | 三万円 |
| 鈴木 正光殿      | 三万円 |
| 和田 正哉殿      | 三万円 |
| 真瑞 清志殿      | 三万円 |
| 山口今朝雪殿      | 三万円 |
| 安藤 康哉殿      | 三万円 |
| 伊藤 太一殿      | 三万円 |
| 伊串 昇穎殿      | 三万円 |
| 芦辺 謙禅殿      | 三万円 |
| 都築 哲信殿      | 三万円 |
| 仏教国際交流協会 藤寺 | 三万円 |
| 内山 款偉殿      | 三万円 |
| 伴 大介殿       | 三万円 |
| 昼間 光威殿      | 三万円 |
| 鈴木光太郎殿      | 二万円 |
| 政門 正殿       | 二万円 |
| 藤森 正男殿      | 二万円 |

|     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |      |     |      |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|------|-----|
| 吉田  | 渡辺  | 渥美  | 飯塚平 | 増田  | 椎名  | 星野  | 原   | 園部  | 村松  | 今泉  | 近藤  | 博林  | 新城  | 高橋  | 山本  | 久保田賢 | 平岡  | 大粒来和 | 岩井  |
| 健一殿 | 豊子殿 | 和也殿 | 八郎殿 | 宗房殿 | 宏雄殿 | 一男殿 | 健次殿 | 逸夫殿 | 晴雄殿 | 源由殿 | 光匡殿 | 津龍殿 | 太治殿 | 鐵弦殿 | 邦法殿 | 賢一殿  | 宗代殿 | 和夫殿  | 文字殿 |
| 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 二万円 | 二万円 | 二万円 | 二万円 | 二万円 | 二万円 | 二万円 | 二万円 | 二万円 | 二万円  | 二万円 | 二万円  | 二万円 |

---

|     |     |     |     |     |       |     |     |     |     |     |     |       |       |       |     |     |     |     |      |
|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-------|-------|-----|-----|-----|-----|------|
| 渡辺  | 四居  | 今野  | 井上  | 大森  | 三沢たけこ | 稲垣  | 飯田  | 玉木  | 瀧澤  | 國廣  | 柿沼  | 五十嵐千彦 | 黒河内貞子 | 珍田末四郎 | 岡田  | 松澤  | 太田  | 原   | 蓮蔵   |
| 照夫殿 | 和子殿 | 庸彦殿 | 葉智殿 | 文兵殿 | 重弘殿   | 利行殿 | 晃仁殿 | 武雄殿 | 敏郎殿 | 幸子殿 | 幸子殿 | 千彦殿   | 貞子殿   | 四郎殿   | 充時殿 | 福司殿 | 宏殿  | 秀男殿 | 栄治雄殿 |
| 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円   | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円   | 一万円   | 一万円   | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円  |

---

|     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |       |     |     |      |      |     |       |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|-----|-----|------|------|-----|-------|-----|
| 鶴丸  | 村上  | 斎藤  | 窪田  | 荒木  | 福井  | 面川  | 安藤  | 芦辺  | 林   | 古谷  | 宮本  | 島田喜久子 | 阿部  | 亀野  | 成寿賛助 | 河野富美 | 内田  | 山野井克典 | 斎藤  |
| 慶子殿 | 博中殿 | 謹也殿 | 成円殿 | 茂樹殿 | 周道殿 | 勝治殿 | 康哉殿 | 謙一殿 | 博明殿 | ミ工殿 | 延雄殿 | 喜久子殿  | 慈園殿 | 哲雄殿 | 賛助   | 美恵殿  | 京子殿 | 克典殿   | 兼英殿 |
| 五千円 | 五千円 | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 一万円 | 二万円 | 二万円 | 二万円 | 二万円 | 三万円 | 五万円   | 十万円 | 十万円 |      | 一万円  | 一万円 | 一万円   | 一万円 |



強烈なインパクト

栃木県 植竹久夫様

去る五月の記念行事並びに祝宴に同席させて頂き、大変感謝しております。四十年ぶりに旧友にも逢うことができ、話しに花が咲いて楽しい一時を過ごすことができました。あの席で同級生一同意見が一致したことは、我々同級生の中にもこの様な傑出した大僧侶が居ること。更には世の中の人々のために大変な努力をされ、頑張っている姿に、新たに感銘を深くした事であり

ります。最後に住職のご家族からの感謝の言葉を聞いた時、あの席にいた全員が目には涙を浮かべ感激に浸っていたことが、脳裏に焼き付いて離れません。それだけインパクトが強烈でした。

誰でもそれぞれいろいろな苦勞を背負って重き人生を歩んで行くのですが、今まで黒田住職様の素顔が表面しか見えていませんでしたが、あの会場にてあの様な実情を披露され、ご家族の方々も大変なご苦勞をされて今日まで来たことを初めて知ることができました。これが為に檀家の方々並びに参会者の方々との

関係も一層結び付きが深まり絆も強くなつていくものと確信いたしております。我々の年代は人生の峠を過ぎてどちらかというと後ろ向きな考えに囚われ、行動も消極的になりがちですが、黒田住職様の姿、生き様を見て、新たに勇気づけられて帰宅致しました。

遠い昔、東京五反田、桐谷寺の頃の思い出が、今でも走馬燈のように臉に浮んできます。小生も上京して、あの地域で初めて自分の所帯を持った時代でした。昨年あの周辺を訪れる機会があり散策してきましたが、その当時の面影

は殆どなくなり時代の移り変わりを感じました。人生にも同じ事が言えますね。お互い馬齢だけは重ねていきますが、まだまだ青年のような気持ちは何時までも持ち続けていきたいものです。

身を以て行動

栃木県 稲垣重弘様

去る五月の祝賀会、大変盛大に行われ、本当にお目出度うございます。事前の準備も大変だったろうと思います。貴兄の当日の気配りには只々

感服致しました。参会者の皆様が楽しく集い話し合っておられる姿を見たとき、日常の活動がどう行われているかが手に取るように判りました。日常宗教への関心を余り持たずに生活するのが日本人一般なのですが、当日お集まりの皆さんは（ご寺院関係者を除いて）日頃の貴兄への感謝の気持ちを一杯に表現し、行動で示されていたと思います。

『成寿』に貴兄の活動の様子、状況が詳細に報告されていますが、一つの布教活動だと思えます。

「宗教とはこういうものだ」という大上段の構えが『成寿』



には感じられません。本来仏教をはじめ宗教とは人の生きていく道筋を示し、教え、一緒に考える教育機関の一つではなかつたでしょうか。人の一生の延長線上に「人の死」

もまたあります。従って生身でなくなった人の黄泉の世界の導きも宗教の大きな活動の場面とは考えますが、本来は生前に黄泉の世界への導入もされるのが宗教の仕事ではないかと思えます。この点『成寿』はこの面での内容を沢山含んでいると感心しております。「生あるもの必ず死す」当たり前のことですが、自分だけはいつまでも死を迎えるこ

とがないような気になって生活しているのが現実です。この辺の真理を十分に理解させ、安心して死を迎え入れる力を与えてくれるものが宗教かとも考えます。

『成寿』二十八号の阿部先生稿になります鑑真和尚の齢五十五歳に日本に渡ることを決意する件がありますが、これこそ布教活動の精神ではないでしょうか。六回目に渡航に成功し、「形だけの僧尼が多く、その風紀は乱れがち」の日本の仏教界を糺し、形、質ともに真正の仏教教団を確立したとありますが、貴兄もある意味では仏教とは何か、

何を成すべきかを身を以て行動されているように受け取っています。このことは貴僧を知る私たち同級生皆の見方でもあります。なお、貴兄を支えている奥様の存在なくして現在の善光寺が存在しないと言えば言い過ぎかもしれませんが、決して否定は出来ませんが、祝賀会の席上関係者がこのことにも言及していました。男にとって女房あつてのものです。これから二人三脚の心構えて邁進下さい。

善光寺と長光寺

東京都 瀧澤博夫様

私は、過日尾山篤二郎三十  
七回忌法要に参列いたしましたし  
尾山先生の短歌の弟子で、  
尾山先生の伝記を研究してお  
ります。

昭和三十八年の年譜に「六  
月二十三日永眠、九月二十八  
日横浜市港南区日野町長光寺  
で百カ日の法要あり」とあり  
まして、五十四年六月十七日  
十七回忌が善光寺で行われ、  
これには私も出席いたしました。

このたび『成寿』第二十九  
巻をいただきまして「横浜善  
光寺開創三十年の歩み」を拝  
見いたしましたところ、35頁  
に「昭和三十六年林堅峰和尚  
が、善光寺の現在地に小庵を  
建てられました。志半ばに  
してお亡くなりになりました  
(昭和四十三年)」とあり、四  
十四年に善光寺が開創したこ  
とを知りました。私は法要の  
場所が長光寺から善光寺にな  
ったのは何故なのかと、長い  
間疑問に思っておりました。

すのは尾山先生の弟子に阪倉  
松二郎という松阪の人がい  
て、長光寺の住職とお知り合  
いで、そんな関係から尾山先  
生の墓を日野墓地に決めたの  
だと聞いておりましたもので  
すから、長光寺がなくなった  
ので同じ場所に創建された善  
光寺で法要が行われたという  
ことなのかと、『成寿』を拝見  
して納得した次第でございます。  
御立派な堂宇を拝見して御  
発展の御様子まことによるこ  
ばしく存じ上げます。私の推  
測が正しいかどうか知りたく  
存じております。何卒よろし  
くお願い申し上げます。



# 読者のたより

浄行に心からの敬意

東京都  
田中良昭先生

この度は善光寺開創三十周年記念特集号として刊行された『成寿』29巻をご恵投下さり誠に有難うございました。

特に黒田住職が「横浜善光寺開創三十年の歩み」として草された「二十一世紀に向かって真実の種まきを」と題する論考の中に、若き日の修行時代の生き様が赤裸々に語り出され、それが原点となって善光寺の開創、留学僧育英会の設立へと発展し、昨年の「国

際栄誉賞」の受賞へと結実したことを改めて認識させていただき、その浄行に心からの敬意を表する次第です。

教化史に特筆される  
事業

町田市  
角家文雄先生

『成寿』をお送りいただき有難うございます。黒田方丈様の「二十一世紀に向かって真実の種まきを」：横浜善光寺開創三十年の歩み」を大変感銘深く読ませていただきました。現代における「仏教の在り方」を求めて懸命に努力されたことがわかります。「留学

僧育英会」は曹洞宗教化史に特筆される事業だと思ひ、心から敬意を表します。今後開創四十年、五十年に向けてのご発展を祈念いたします。

### 豊かな御生涯に感銘

横浜市  
高野義郎先生

この度は『成寿』第29巻御恵送に与りまことにありがとうございます。玉章「二十一世紀に：」を拝読して善光寺開創三十年そしてそれ以前の年月と合わせて、黒田老師の御生涯が実に豊かなものであることに感銘を受けまし

た。それに老師のなさっている様々な事業に接して、昔の高僧たちが宗教的あるいは社会的な多くの事業を遂行したのをいくらか理解できたように感じています。老師の今後の一層の御発展をお祈り申し上げております。

### 大きく高い目標

横浜市  
戸塚正美様

今般『成寿』開創三十周年記念号は二日間で一氣に通読致しました。今日までいろいろお話しを伺ったり出版物で読ませていただいて、三十年

の立派な業績は知っていたつもりでしたが、改めてここにその集大成を見るにつけ、その行動のすごさは頭が下がります。東大兄の筆になる「一にも二にも実行の人であり、果断の人である」が正しく言い当てて妙であります。

この三十年はスタート時の短距離ランナーのごときグツグツと、最近では少々ゆとりを持って中距離ランナー程に呼吸を整えてこられたご様子ですが、何と言つても大兄の目標は大きく、高いのです。世界規模、いや地球規模の活躍を期待いたします。そのためにはマラソンランナーのよ

うに息の長い強靱な体力を必要とします。唯々ご健康のみ心配です。ご留意願います。まずは御礼かたがたお祝い申し上げます。

永年の労苦、多岐に亘る  
ご活躍に改めて感銘

立川市  
伊藤 勲様

『成寿』29号をご恵贈くださり、心より御礼申し上げます。本年は、善光寺開創三十周年を迎えられるとのこと、誠におめでとうございます。本書を拝させていただけます。先生永年の労苦、多岐に亘るご活躍に、改めて感銘

しております。

毎回お向け下さるお心遣いに感謝の意とともに益々のご発展をお祈り申し上げます。

なつかしさひとしお

福島県  
吉岡棟憲老師

『成寿』第29号ご送付ありがとうございました。スリランカ、タイの状況がつぶさに伝わりなつかしさひとしおです。またベトナム・ホーチミン市永巖寺に建立された平和の鐘の記事がありました。故吉岡棟一方丈が三十回も足を運

んだ彼の地の文章はすぐ目に入ります。今年三回忌にあたり永巖寺住職揮毫の棟一大和尚顕彰碑が完成し、境内の新しい名所になりました。

善光寺様の益々の興隆を冀い御礼とさせていただきます。

タイ国経蔵の  
すばらしさに感銘

東京都  
内田喜八郎様

『成寿』29巻、ありがとうございました。毎々のご拝受いたしました。毎々のご恵送厚く御礼申し上げます。いつも国際的な御活動、また若い才能を育てるためのご援

助、まさに二十一世紀に向か  
つての真実の種まきのお仕事  
で、敬服いたしております。  
今回のタイ国の経蔵のすばら  
しき、感銘を深くいたしました。

### 生き方の目標

横浜市  
渡辺豊子様

重厚な『成寿』第29巻をご  
恵送賜り有難うございました。  
方丈様にはスリランカ・  
サラナンダ財団から国際栄誉  
賞を受賞されまことにめで  
とうございます。そしてま  
ますお元気で、この度の善光

寺開創三十周年の行事もおす  
ませになり何よりの御事と心  
からお喜び申し上げます。春  
季号にはカラー刷りの十八羅  
漢様を巻頭に、記念行事の記  
事が一杯。この一冊、今から  
拝読させて頂きます。そして  
今日から私の生き方の目標に  
致したく、先ずは取り敢えず  
謹んで御礼申し上げます。

すりこぎのその味を  
多少なりとも

厚木市  
伊藤信子様

『成寿』で拝見致しました  
方丈様の来し方に、改めて頭  
が下がる想いでございます。

難しいことは何も分からぬ私  
でございますが、すりこぎの  
その味を多少なりとも感じる  
事の出来る人生に近づきたい  
と思っております。命永らえ  
て善光寺様の五十周年も拝見  
できましたらこの上なき幸せ  
でございます。

益々のご発展ご期待申し上  
げます。皆々様のご健勝を祈  
ります。

巡り合いを大変嬉しく  
誇りに

東京都  
大金義次様

この度はお目出とうござい  
ます。直向きに仏の道を求め

て歩み続けている姿勢に多くの人々が感動し、今日を迎えることができたものと思いません。私は良い人との巡り合いを大変嬉しく誇りに思っております。方丈様のこと、以後も絶みない歩みは変わらぬと思いますが、それは肉体的にも大変な事です。「長生きも成功のうち」と言います。くれぐれもご自愛の上、ご活躍下さい。陰ながらお祈りしております。

### 絶好の記念

島根県  
雲藤義道老師

善光寺様並に横浜善光寺留学僧育英会におかれましては、愈々御隆盛に発展され、今春には開創三十周年、育英会設立十五周年記念祝賀式典を賑々しく挙行されました由、誠にお目出度う存じ上げます。御鄭重にも感謝状並に記念品と『成寿』29号を恵与頂き恐縮至極に存じました。記念品の絵皿は早速に拙寺の客殿の床の間に飾らせて頂きました。絶好の記念になりました。

た。

『成寿』の「開創三十年の歩み」や「記念事業趣意書」を拝読させて頂き感銘を深く致しました。歩一步と二十一世紀に向かって仏法興隆の種蒔きを進めておられますことに深く敬意を表します。

### 精一杯の心でお祝いを

新潟県  
佐々木慈光老師

この度はからずも身に余る数々の御品を拝受し唯々恐縮の極みでございます。御礼の言葉も知らず心痛む心持ちです。

身に余る情けの厚さ

いかにせん

言葉尋ねて今暮れゆく

仏法興隆世界平和を旗印に  
育英会を設立し十五年を迎え  
る偉業を成し遂げ得られました  
た英気を、唯々合掌精一杯の  
心でお祝いを申し上げます。

おめでとうございます。

今後はいよいよご尊体をご  
自愛下され益々の仏徳常の開  
く成寿の禪、目標達成されま  
すことを御祈念申し上げます  
て、厚く御礼の言葉と致しま  
す。

仏様の大きな  
ご加護の賜

神戸市  
伊藤幹雄様

この度は善光寺開創三十周  
年、横浜善光寺留学僧育英会  
設立十五周年記念式典を催さ  
れたとのこと、大慶に存じ上  
げます。先生の多年にわたる  
真摯なご尽力に敬服致してお  
ります。またこれに際し立派  
な感謝状並びに記念品を頂戴  
し恐縮しております。今後と  
も益々のご発展を心より祈念  
しております。

尚小生、永年勤続しました  
(株)ナリス化粧品を一昨年に定

年退職し、この間に習得しま  
した経験と資格を活かして経  
営コンサルタントとして第二  
の人生をスタートしました。  
お陰様でつつがなく過してお  
ります。これも仏様の大きな  
ご加護の賜と思い、日々感謝  
の生活をしております。

以上御礼並びに近況報告申  
し上げます。

感謝状は叱咤激励

横浜市  
土屋武彌様

五月二十八日の御寺開創三  
十周年および海外留学僧育英  
会設立十五周年記念が盛況裡





に開催され心からのご祝詞を  
申し上げます。方丈様のこの  
間のご苦勞が実り、当日ご参  
加の檀信徒の皆様は一樣に喜  
びを分かち合うことができた  
ようです。翌日から一週間出  
張をしましたが、滞在地で関  
係者との話題は御寺のことで  
一杯でした。また話し合う  
方々が経営者のため、方丈様  
の寺院経営に大変興味を示し  
ておられました。

は、心の安らぎを求めご指導  
をいただいております。これ  
までの私にとって、また楽し  
みができました。

誠に慶賀の至り

東京都  
園部逸夫先生

過日は盛大な記念祝典を成  
功裡に了えられましたこと誠  
に慶賀の至り謹んでよろこ  
びを申し上げます。伊藤先生  
ご夫妻とゆっくりお話しする  
機会を与えられ、幸いですござ  
いました。

ご多忙の毎日と拝察致しま  
すが方丈様はじめ皆様のご健

勝と善光寺並びに育英会の一  
層のご発展を祈り上げます。

この上ない幸せ

横浜市  
浦野フデ様

三十周年記念の式典お目出  
度うございます。セレモニー、  
イベント、ディナーテーブル  
…あの様な素晴らしいお祝いに  
お招き頂き、この上ない幸せ  
と存じて居ります。何時まで  
も胸に焼き付いて御住職の御  
立派さ眼に浮かんできます。  
益々これからも今以上に発展  
して大きくなれることと期  
待しております。まずは御祝

いの感激と御礼まで。

感激しながら帰宅

千葉県  
岩井文字様

この度は開創三十周年、育英会設立十五周年のおめでたい御祝いの席に参加させて頂きましてありがとうございます。方丈様、御奥様の素晴らしい御人柄にひかれ大勢の方々がお見えになり、盛大な御式で本当におめでとうございました。日本国中でこんな素敵な御寺様、方丈様、御奥様に恵まれた檀家は数少ないと思います。感激しながら

帰宅いたしました。

またご丁寧な感謝状をお届け頂きまして恐縮に存じております。私など本当にささやかにお手伝いの万分の一もできませんのにお心に掛けて頂きましてありがとうございます。主人の仏前に供え、方丈様の温かな御心をお伝え致しました。ありがとうございます。益々のご発展をお祈り致します。

心打たれた情熱と優しさをこめられたお言葉

東京都  
浜田和子様

先日は記念式典にご招待頂

き有難うございました。大勢の方々がお祝いに出席なさり、お祝辞をお聞きして、黒田様のお人柄がよく分かりました。黒田様の迫力のある身体の間々からほとぼしる情熱と優しさをこめられたお言葉に心を打たれました。今成寿を読んでみて、長い道のりどれ程ご苦勞なされた事かよく解りました。そんな黒田様と時々お目にかかれる智祥も私達も幸福に感じております。どうぞこれからも益々お元気でご活躍をお祈り致しております。

ご健勝を祈念

□サンゼルス禅センター  
遠藤博因師

先般は多大なるお心遣いを  
いただきました、誠にありが  
とうございました。こちらは  
恵玉さんの晋山式も無事終え  
ることができ一息ついてい  
るところであります。当日は初  
夏の清々しい風が吹き抜ける  
内庭において、晋山上堂の式  
が執り行われました。中央に  
祭壇に見立てたステージを設  
置し、その前の二百席余りは  
参列者で埋め尽くされました。  
智昭師には典座にて腕を

振るっていただきました。こ  
ちらは六月二十一日より一週  
間の摂心を予定しております。  
皆様のご健勝を祈念してお

ります。

有難く拝受

藤田一照宗師 米国

この度ロスの禅センターの  
遠藤師から、先の記念式典の  
記念品を送っていただきました。  
有難く拝受致しました。  
式典は盛大にて良い集まりだ  
ったことと思えます。改めて  
おめでとうございました。こ

ちらは暑い日と涼しい日が  
二、三日交替で入れ代わって  
いる感じです。畑の野菜もそ  
ろそろ大きく育ってしまし  
た。またいつかお目にかかれ  
る時を楽しみにしております。  
御身お大切にお過ごし下  
さい。

活躍を嬉しく拝見

武内常子様 東京都

方丈様はじめご一同様には  
お変わりもなく、又このたびは  
お寺も三十年を迎えられ、国  
際栄誉賞の御受賞と益々の御  
発展何よりの事と心よりお祝

い申し上げます。黒田通も他界して十八年、私も七十歳と年を重ね今更ながら夢のような年月の流れに驚くばかりです。方丈様にはお墓にお花を添えていただき有難く感謝致しております。成寿、お寺のご案内も送って頂き、ご一同様の活躍を嬉しく拝見させていただきます。

皆様の御健勝を心よりお祈り申し上げます。

偶然にも拝聴

東京都  
鈴木宗幹様

多忙な毎日をお過ごしのこと

と、御拝察申しあげております。NHKのラジオ番組「心の時代」を拝聴させて頂きました。加齢と共に深夜放送の愛聴者となり偶然にも拝聴することが出来ました。アレ…？アレ…？とびっくりした次第です。御元気な御活躍を心よりお祈り申し上げます。くれぐれも御自愛下さいませ

感謝や驚きでいっぱい

横浜市  
小泉孝子様

供養の折には有意義なご法話を賜り心の籠ったおもてな

しをいただきありがとうございます。「心の時代について」方丈様のラジオ放送を拝聴致しました。全世界の人々のためにこれ程財を投じて精進なされていらつしやる事に感謝や驚きでいっぱいです。どうぞこれからもお導き下さいます様に…

生きた仏作仏行

松戸市  
石川大玄老師

「心の時代」、タップリ一時間の熱弁有難く拝聴。托鉢の本人の口から話す体験は迫力がありました。十五年間の留

学僧育英会の生きた仏作仏行。続けるということは大変だと思えます。よくぞやりました。お身体を大切にして頑張って下さい。

小納七十九歳、心身共に老化したが耳はよく聞こえます。ラジオ聞いて嬉しさの余り一筆啓上。

世界中に方丈さんの  
声が

伏見 瞳様

永らく御無沙汰致して居ります。深夜便四時、方丈さんの声久し振りに拝聴しました。遂にNHKの電波に乗り

ましたね。日本国中いや世界中に方丈さんの声が轟きましたね。特に最後の熱のこもった御言葉、心から喜んで聞き入りました。

益々御発展、何はともあれお目出度く御挨拶に替えさせていただきます。

信仰に対する姿勢の  
違いを痛感

東京都  
島津源之様

NHKラジオにて、方丈様のお声を拝聴し（金光氏とのインタビュを）感動いたしました。お檀家さんによる一食中の喜捨運動が今日の貴寺

の基礎を築かれたこと、延寿堂や涅槃銭のこと、女学校前での托鉢のこと、午後三時までに宿泊をお寺に依頼するエチケットのあることなどのお話が印象的でした。

タイ、台湾、韓国などの仏教徒のパワーが大きいのに比し、我が仏徒のパワー不足を痛感いたします。現代の上座部のお坊さんや仏教に依然として「小乗」という蔑称を使う方が日本に多いのは残念と存じます。日本仏徒がクールなのは、民族性に一因があるのか、徳川時代の宗教政策の影響が強く残っているためなのか、良く分かりませんが、

信仰に対する姿勢の違いを痛感いたします。外人信者の坐禅への取り組みも真摯な態度に圧倒されます。九拜



東京都  
大藪正哉様

成寿山善光寺様開創三十周年 誠におめでとうございませう。方丈様のこれまでのご精進に衷心より敬意を表します。善光寺様の益々のご隆盛と方丈様のご法躰のご健勝を祈念申し上げます。

福井県  
木崎浩哉老師

『成寿』29号を御送本下さいます。有難うございました。いつもながらの御懇情厚く御礼申し上げます。善光寺様開創されて三十年とか…その間のご苦勞と功業を深く称え感銘至極に存じおります。

何卒一層のご自愛と御隆昌を心から御祈念申し上げます。

新潟県  
新井勝竜老師

『成寿』第29巻御惠贈いただき誠に有難うございました。「特集」等の本文の文章内容と共に「羅漢図」等の色刷りのすばらしさに有難い法楽を味わわせていただきました。ますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

たくさんのお便り有りがとうございました。

## 留学育英生からのたより

オーストリア・ウィーン大学

第13回育英生 久間 泰賢

黒田武志老師

ご無沙汰しておりますが、老師にはつつがなくお過ごしのことと思います。私の方は、お陰様で三月末に博士論文を提出し、五月末に口述試験に合格することができました。今までお力添えいただきましたこと、感謝の言葉もございません。なお、七月からはオーストリア科学アカデミーの研究員として引き続きウィーンに滞在することになりました。遠く離れてはおりますが、これからもよろしく願いいたします。時節がらご自愛下さいませ。

草々





## Foreword

The chief priest of Zenkōji—Temple  
Takeshi Kuroda

In view of the end of this century, this year falls on 30th anniversary of the foundation of Yokohama Zenkōji-Temple and also 15th of the Scholarship Foundation. I am filled with deep emotion.

We could have held the memorial ceremony without any accidents in this May. This success is completely due to our supporters' and relatives' efforts, I cannot help expressing my appreciation.

In this April, I visited Tendōji-Temple in China as the memorial event, and then in this November, Wat Paknam in Thailand as of the Scholarship Foundation with over 30 supporters held by the representative Toyoshige Tominaga and the president Hatsue Itō of the women's association.

Wat Paknam is the temple where I trained myself 35 years ago. In this visit, We received hearty welcome by Buddhist priest of the highest order, Phra Mahajama Nighachara, so we could spend wonderful time filled with respects and thankfulness. We visited Buddha Montong after lunch. This was the sacred place where King Bhumibol and his government organized national project to make an institution so as to memorize 2500th anniversary in Buddhist era. We made a field trip to the biggest Buddhist heritage

in this century, “Pali Tibitaka ”, the temple to store sutras. Inside it sutras were scripted to 1418 slabs of marble(each 2 by 1.1 meters) and came back feeling great piety and enthusiastic energy of people in Thailand. I really felt Shakyamuni Buddha’s teachings had deeply took root in this country.

Now, we believe the time has come when Japan learns from the world through teachings of Buddha and appeals to the world. It is our mission of 21st century to pass on teachings of Buddha and Rev. Dōgen exactly to the next generation. Industry and economics have developed unprecedentedly in this century, though on the other hand, we have lost lost of things. We are facing such problems as an aging society with less children, and environmental destruction. I think the future depends on our responsibility, consideration and clarity.

Rev. Dōgen said, “People to learn must be poor, if rich, they loose their ambition”. We, as a Japanese blessed with rich nature, must coexist with it and pass on marvelous Japanese culture to the next generation getting along with our history and tradition. Now we should abide by our original purpose to the last, we must make efforts to bring up talents accepted by the world for not to be isolated. We must try to contribute to the international Buddhist interchange as a place of dispatch of the world. I want to devote my life to the prosperity and the peace of the world.

## 編集後記

▼『成寿』30巻をお届け申上げます。

5月28日、善光寺開創三十周年、育英会十五周年記念式典・祝賀会を無事円成することができました。これ偏にお檀家の皆様、ご支援の皆様のお陰と心から感謝申し上げます。次第でございます。本号は特集となっております。

▼黒田方丈は9月17日、スリランカ大菩提会に於ける創立者ダルマパーラ生誕一三五年式典に招待され、祝辞を述べる榮譽をいただきました。仏教国を表明するスリランカは、現代スリランカ仏教復興の父と呼ばれるダルマパーラ師に対して、国を挙げて祝賀行事で賑わっていました。誌面でお伝えできたことと思いま

す。

▼10月4日庭野日敬先生、同10日村元先生が相次いで逝去されました。お二方とも善光寺に温かい励ましとご支援をお寄せ下さいました。かけがえのないお方を失い深い悲しみで一杯です。心からご冥福をお祈り申し上げます。

▼10月15日、NHKラジオ第一放送の番組「ラジオ深夜便」の早朝に黒田方丈が出演。質問者の金光氏に答える形で約一時間お話ししました。ラジオで聞かれた方もいらつしやると思いますが、誌上でご紹介いたしました。

▼11月8日から13日まで、タイ国を訪問いたしました(巻頭言を参照)。詳細は次号にてご報告いたします。

▼7月15日、善光寺の奥方倫子夫人の実父加藤照雄老師(福井県三方町常在院東堂、元永平寺単頭)が遷化

されました。世寿93歳でした。

謹んでお知らせ申上げます。

▼四月下旬から工事にとりかかっていた墓苑「やすらぎの郷」の工事も完成し、平成十二年四月に落慶法要を行う運びとなりました。

▼命を粗末にする世情には心が重く暗くなります。人は自分一人で生きているのではなく生かされていることに思いを致し、日々を大切に感謝の心で過ごして参りたいものです。

### 成寿 第30巻

平成十一年十二月十五日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央一丁目十二番九号

電話 〇四五(八四五)一三七一

FAX 〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 神奈川新聞社出版局





横濱善光寺